

今 渡 遺 跡

2014

岐阜県文化財保護センター

今

いま

渡

わたり

遺

い

跡

せき

2 0 1 4

岐阜県文化財保護センター

序

今渡遺跡が所在する可児市今渡地区は、市の北側を流れる木曽川の左岸河岸段丘上に位置します。この地区は、室町時代から江戸時代初期にかけて、鉄物師が集落を形成し、東濃地域、飛騨地方及び三河地方まで、その製品が広範に流通したことが伝えられています。江戸時代には中山道が木曽川を渡る地点であるとともに、木曽川の水運にもかかわり、交通の要衝として栄えました。

このたび、岐阜県県土整備部可茂土木事務所による県単地方特定道路整備事業（街路事業）に伴い、可児市今渡字大清水に所在する今渡遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、室町時代中頃から江戸時代にかけての火葬墓や火葬施設、土葬墓を発見しました。また、検出した地割溝や遺構の配置状況から、遺跡が立地する今渡・上田低位段丘上に形成された地割は、その初源を中世にまで遡ることが確認できました。本報告書が、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、可児市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年3月

岐阜県文化財保護センター

所長 丸山 和彦

例　　言

- 1 本書は、岐阜県可児市今渡字大清水に所在する今渡遺跡（岐阜県遺跡番号21214-06413）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成23年度及び平成25年度県単地方特定道路整備事業（街路事業）に伴うもので、岐阜県県土整備部可児土木事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 宇野隆夫帝塚山大学教授の指導のもとに、発掘作業と整理等作業を平成23年度及び平成25年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は柏木賢一が行った。
- 6 平成23年度は発掘作業における作業員雇用、現場管理、掘削などの支援業務を株式会社アートに、平成25年度は発掘調査（発掘作業及び整理等作業）における作業員雇用、現場管理、掘削及び整理等作業の支援業務を権本技術株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果を第4章に掲載した。執筆は株式会社パレオ・ラボによる分析結果をもとに柏木が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
青木哲哉、千田隆夫、藤澤良祐、可児市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第49系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2006『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

序	
例言	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序	8
第2節 遺構・遺物の概要	9
第3節 遺構	14
第4節 遺物	45
第4章 自然科学分析	70
第5章 総括	73
参考文献	78
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第21図	遺構図12 (S T20)	35
第2図	試掘・確認調査坑設定位置図	2	第22図	遺構図13 (SD 1、2)	37
第3図	発掘区設定図	3	第23図	遺構図14 (SD 3~7)	38
第4図	発掘区グリッド設定図	3	第24図	遺構図15 (S E 1、S A 1)	40
第5図	木曾川中流における盆地状の地形	4	第25図	遺構図16 (S K①)	42
第6図	今渡遺跡周辺の遺跡	7	第26図	遺構図17 (S K②)	44
第7図	発掘区グリッド図と基本層序	8	第27図	遺構出土遺物 1 (S T)	46
第8図	土坑分類模式図	10	第28図	遺構出土遺物 2 (S T)	47
第9図	遺構図凡例	14	第29図	遺構出土遺物 3 (S T、SD、SK)	49
第10図	遺構図1 (S T 1、2)	15	第30図	擾乱坑・遺物包含層出土遺物 1	51
第11図	遺構図2 (S T 3、4)	17	第31図	擾乱坑・遺物包含層出土遺物 2	53
第12図	遺構図3 (S T 5、6)	19	第32図	遺物包含層出土遺物 (金属製品・石器)	54
第13図	遺構図4 (S T 7, 8)	22	第33図	画面割り図	55
第14図	遺構図5 (S T 9)	23	第34~38図	遺構全体図分割図 1 ~ 5	56~60
第15図	遺構図6 (S T 10, 11)	25	第39図	層年較正結果	72
第16図	遺構図7 (S T 12)	27	第40図	調査地周辺の明治時代の地籍図と字名	74
第17図	遺構図8 (S T 13)	28	第41図	遺跡周辺の地形と明治時代の地割	74
第18図	遺構図9 (S T 14、15)	30	第42図	火葬墓と土葬墓の分布	75
第19図	遺構図10 (S T 16, 17)	32	第43図	土坑墓の変遷	76
第20図	遺構図11 (S T 18、19)	33			

表目次

第1表	平成22年度今渡遺跡試掘・確認調査結果	2	第18~19表	土器観察表 1 ~ 2	65~66
第2表	周辺遺跡一覧	7	第20表	石器観察表	66
第3表	検出遺構一覧	9	第21表	木製品観察表	66
第4表	遺物出土点数	11	第22~23表	金属製品観察表 1 ~ 2	66~67
第5表	編年対応表	11	第24~26表	遺構内出土人骨一覧表 1 ~ 3	67~69
第6表	白瓷系陶器	12	第27表	測定試料及び処理	70
第7表	古漸戸・大窯製品	12	第28表	コラーゲンの収率と炭素同位比	70
第8表	近世陶磁器	13	第29表	放射性炭素年代測定および層年較正の結果	71
第9~17表	遺構観察表 1 ~ 9 (S T、SD、 SE、SA、SK、NW)	61~64			

写真図版目次

図版 1	発掘区遠景・近景	図版 8	土坑墓間出土遺物
図版 2	発掘区近景	図版 9	土器類 (土師器、白瓷系陶器)
図版 3	S T (1)	図版 10	土器類 (古漸戸・大窯・近世陶磁器類)
図版 4	S T (2)	図版 11	石器・木製品・金属製品
図版 5	S T (3)、SD、SK	図版 12	人骨 (1)
図版 6	遺構検出状況	図版 13	人骨 (2)
図版 7	B 3~B 5グリッド 垂直写真		

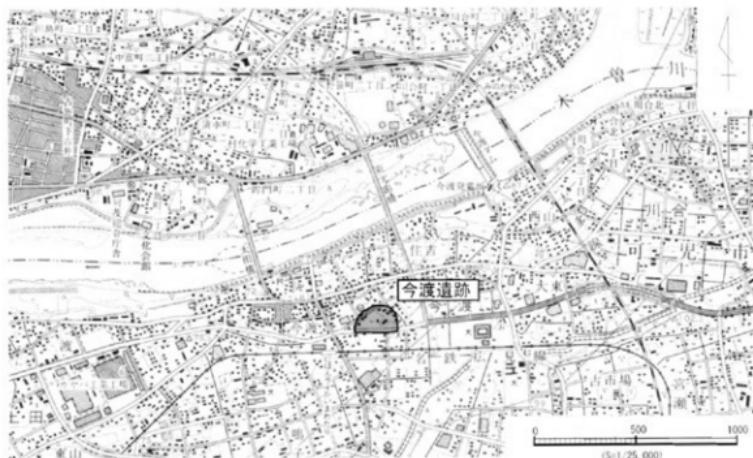
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

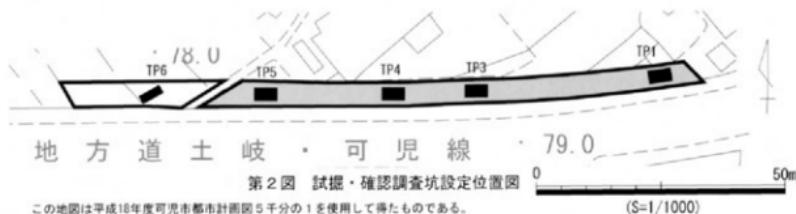
今渡遺跡は可児市今渡字大清水に所在する（第1図）。昭和58年度岐阜県教育委員会が実施した一般県道美濃加茂・可児線今渡地内改良工事に伴う960m²の発掘調査において、土坑墓・火葬墓などを検出し、中世から近世の墓域であることが判明した。

今回の発掘調査は、岐阜県県土整備部可茂土木事務所（以下「可茂土木事務所」という。）が平成23年度及び平成25年度県単地方特定道路整備事業として、可児市土田から御嵩町までを結ぶ都市計画道路中濃大橋御嵩線のうち中濃大橋南交差点から住吉南交差点までの約2.9km分の車線拡張整備に伴い実施したものである。岐阜県教育委員会は平成22年8月に事業予定地で試掘・確認調査を実施し（第2図、第1表）、その結果をもとに平成22年11月1日の平成22年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、442m²の本発掘調査の実施について結論付けられた。文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、可茂土木事務所長から岐阜県教育長あて発掘の通知（平成22年12月27日付け可土第393号）が提出され、同法第94条第4項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査の実施を求める勧告（平成23年1月21日付け社文第7号の131）がなされた。可茂土木事務所との協議により、発掘調査を道路事業計画に合わせて23年度及び25年度の2か年計画とし、同事務所から発掘調柶実施の依頼を受けた岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）は、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調柶の報告（平成23年9月6日付け文財セ第85号及び平成25年4月25日付け文財セ第24号）を、県教育長に提出した。

発掘調柶は、平成23年度は東側96m²、平成25年度はその隣接区346m²を実施した。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000) 国土地理院発行「美濃加茂」を使用



第1表 平成22年度今渡遺跡試掘・確認調査結果

トレンチ名	検出遺構	出土遺物
TP1	溝1	近世陶器1点
TP3	溝1、ピット5、土坑4	なし
TP4	ピット5、土坑1	土師器1点、近世陶器1点
TP5	土坑15	土師器と近世陶器5点、石器1点、骨片等
TP6	なし	中近世陶器12点

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

今回の調査は、昭和58年度に岐阜県教育委員会が実施した発掘区に一部隣接する。昭和58年度調査においては、日本測地系を使用したグリッド設定で1グリッド4m×4mであったが、今回の発掘区については世界測地系をもとに座標北を基準にして5m×5mのグリッドを設定した(第3図)。各グリッド呼称については、北から南へ向かってA、B、Cのアルファベットを、西から東に向かって算用数字1~21を付し、北西角の杭番号を使用した。また平成25年度の調査においては、民地と一般道路の接続部を確保するため、①区(B1~B13グリッド)、②区(B14西半分のグリッド)、③区(B14東半分~B16グリッド)に分けて実施した(第3図)。出土遺物の取り上げ方法は、搅乱坑以外で出土した遺物すべての出土位置を三次元座標を取得し、取り上げた。

2 調査の経過

現地での調査経過は次のとおりである。発掘作業後、出土遺物の整理等作業及び報告書作成は岐阜県文化財保護センターにおいて行った。

平成23年度

第1週(9/7~9/9) 7日、重機による表土掘削実施。

第2~3週(9/12~9/22) 12日、人力による遺物包含層掘削開始。15日、遺構検出。20~22日、台風15号通過の影響で3日間調査を中止。22日、現場復旧作業を実施。

第4～5週（9/26～10/6）26日、遺構検出終了、遺構掘削開始。

第6～7週（10/11～10/21）11日、宇野隆夫氏（当時：国際日本文化研究センター教授）による現地指導。12日、遺構掘削完了。13日、景観撮影。14～15日、発掘区埋め戻し。21日、可茂土木事務所へ現場引き渡し。撤収作業完了。

平成25年度

第1～2週（4/17～26）17～19日、発掘区内の駐車場舗装及びコンクリート基礎の撤去。18日、③区及び①区西側の表土掘削を実施。③区遺物包含層の人力掘削開始。26日、①区遺物包含層の人力掘削開始。

第3～6週（4/30～5/24）30日、③区の遺構掘削終了、景観写真撮影実施。5月1日、③区を埋め戻し。①区内で火葬墓4基、火葬施設1基、土葬墓15基を完掘。

第7～8週（5/27～6/7）5月27日、区画溝調査。

第8～9週（6/10～21）17日、宇野隆夫氏（帝塚山大学教授）による現地指導。18日、土葬墓1基完掘。①区の景観写真撮影実施。21日、青木哲哉氏（立命館大学講師）による現地指導。

第10～11週（6/24～7/3）24日、②区の掘削作業開始。①区の埋め戻し実施。25日、②区の遺構掘削終了、景観写真撮影を実施。28日、②区埋め戻し。7月2日、可茂土木事務所立ち会いのもと埋め戻し状況を確認。3日、正式に現場引き渡し。4日、現地撤収。

発掘作業から整理等作業に至る調査体制は、以下の通りである。

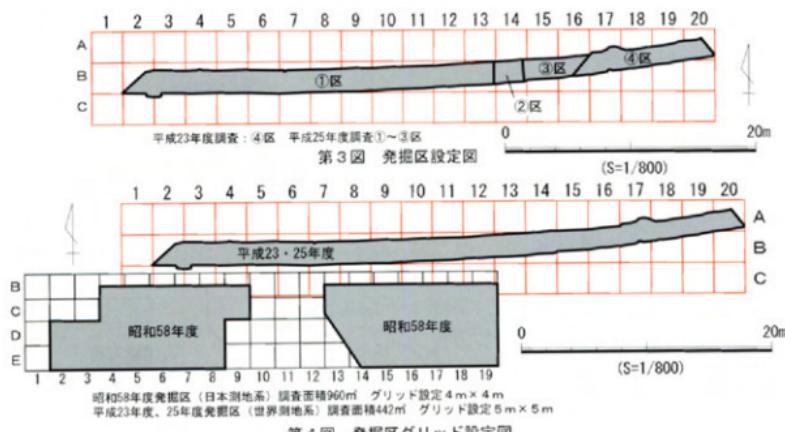
センター所長 高橋 照美（平成23年度） 丸山 和彦（平成25年度）

総務課長 村瀬 誠三（平成23年度） 二宮 隆（平成25年度）

調査課長 小谷 和彦（平成23年度） 成瀬 正勝（平成25年度）

調査担当チーフ（係長） 河瀬 実浩（平成23・25年度）

担当職員 柏木 賢一（平成23・25年度）



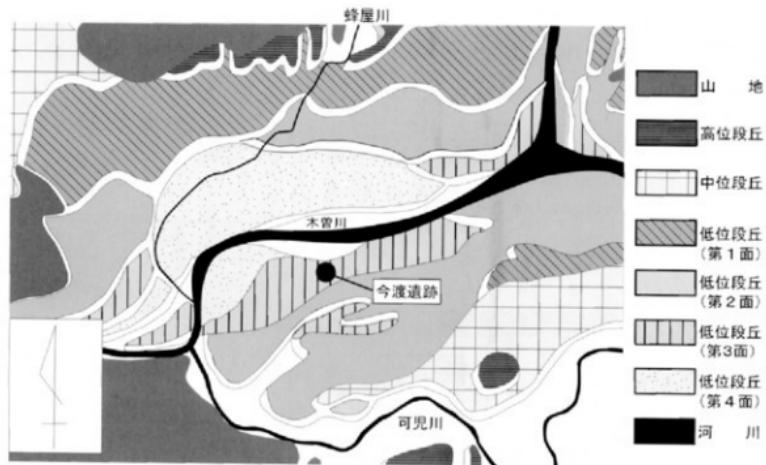
第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

今渡遺跡が所在する可児市は岐阜県の中南部に位置し、平成17年の合併により市北東部に旧兼山町が飛び地で存在する。市の東は土岐市、北東は御嵩町、北は美濃加茂市、西は坂祝町、南は多治見市と愛知県犬山市に接している。

美濃加茂市・坂祝町との境界をなす木曾川は、市の北東で飛騨川と合流して南西へ流れる。市内には、久々利川など9つの支流が可児川と合流して西へ流れ、市の西端で木曾川へ注いでいる。水運に適した当地域には、かつて兼山湊や野市場湊などの川湊があり、立地を活かして陶器などの大量の産物を運送する経由地として栄えた。

木曾川を挟んだ美濃加茂市と可児市に広がる一帯は山地に囲まれ、河成段丘が発達している。この基盤層は2億年前に湖底の堆積作用により形成された美濃中世層で、チャート、砂岩、泥岩で構成される。その上面に2.3万年前の新第三紀中新世に河川の作用で堆積した瑞浪層群がある。約150万年前には川の浸食作用が活発になり、地盤の隆起も加わって木曾川两岸に段丘ができる。3~2.7万年前には御岳の爆発で軽石や火山灰泥流が下恵戸~川合付近に堆積して黒土層を形成し、200~1万年前までに木曾川から流入した堆積物で洪積層の段丘ができる。この低位段丘堆積物は濃飛流紋岩を主体とし、現河床と同じ円礫である。また、河成段丘は禅台寺山段丘（高位段丘）、下恵戸・中恵戸段丘（中位段丘）、土田・今渡段丘（低位段丘）があり、当遺跡は低位段丘面の第3面に立地している。



第5図 木曾川中流における盆地状の地形

（可児市史 第4巻 自然編「図13 可児盆地における河岸段丘」2007をもとに作成）

遺跡周辺の土壤は黒色土で水もちが悪いため水田に向かず、畑作の割合が高い。愛知用水完成前の水田は僅かで、段丘崖から流れ出す地下水や溜池からの水路に沿って帯状に分布していた。畑作以外は、瘦せ地でも生育がよい里芋や桑の他、杉や檜などの植林用山苗の栽培も行われてきた。

第2節 歴史的環境

今渡遺跡(45)周辺には確認された遺跡が数多く存在している(第2表・第6図)。各遺跡について、発掘調査で報告された成果や文献資料等をもとに時代順に概略を述べる。

Ⅲ石器時代では徳野遺跡(66)と宮之脇遺跡B地点¹⁾(29)でナイフ形石器、宮之脇遺跡名鉄地点²⁾(27)で石刃が出土している。縄文時代では川合遺跡(21)、富上之井遺跡(53)、土田北割田遺跡(68)、北裏遺跡(72)などがあり、木曾川から可児川流域の河成段丘沿いに遺跡が集中している。竪穴建物跡が宮之脇遺跡A地点³⁾(26)で3軒、宮之脇遺跡B地点で19軒発見されている。弥生時代では、牧野小山遺跡(19)、野佐遺跡(12)、藤田坂遺跡(48)などに集落跡が確認されている。古墳時代では前期の古墳が中・高位段丘面にあり、今渡遺跡の東方にある御嵩町の高倉山古墳や東寺山古墳、可児市の長塚古墳(国史跡)などの前方後円墳や前方後方墳が6基築かれている。また、土田の低位段丘面に八幡古墳群(56)があり、八幡古墳と八幡8号(キンケイ塚)古墳(57)などを含む120基以上の古墳が築かれている。これらは後期の円墳と考えられ、川合福荷塚1号墳(23)などの川合地区の後期古墳群と同様に複室構造の川原石積み横穴式石室が特徴である。なお、方墳には宮之脇1号古墳(30)と12号古墳(41)、次郎兵衛塚古墳群(28)の1号古墳、5号古墳、車輪古墳(22)などがある。集落跡では、牧野小山遺跡、宮之脇遺跡B地点、宮之脇遺跡A地点などがあり、宮之脇遺跡A地点では竪穴建物跡78軒と掘立柱建物跡1棟、製塩土器439個体が発見されている。

古代では東山道に各務駅、可児駅、土岐駅が整備された。可児駅は御嵩町宿、顔戸などの候補地があるが、各務駅から木曾川左岸に渡って大山から可児へ至る説と、そのまま木曾川右岸を遡って美濃加茂市から川を渡ったとする説がある。後者の場合、土田・今渡から川合周辺が渡河点となり、付近に東山道が通っている可能性が高いと考えられる。

中世では墓域に関する成果がある。当遺跡の昭和58年の調査では火葬墓29基と土坑墓57基などが発見され、蔵骨器を伴わないのが特徴である。供伴遺物から14~15世紀頃で庶民の墓と考えられている。一方で清水経塚(44)、川合次郎兵衛塚古墳群内の1号古墳、長塚古墳などのように、古墳の葺石を用いた墓もある。多くは葺石を広範間に敷き詰めた(または積み上げた)集石であり、上坑内に古瀬戸や常滑焼の製品を転用した蔵骨器が埋納されている。まれに配石で区画する積石墓や五輪塔、墓塔を作り遺跡もある。供伴遺物から13~15世紀頃とされる。今渡の金屋周辺では、15世紀~17世紀初め頃まで活動していた鎔物師集団の存在がある。東濃ほか3か国(飛騨、信州、三河)に奉獻されている鰐口などの神仏具には、「可児」「佐戸」「金屋」などの拠点を示す銘文があり、金屋周辺からは鉄滓や鋳型破片が発見され、地元には享保7年(1720)に記された『今渡金屋村鎔物師由來書』⁴⁾が伝わっている。昭和62年の可児市教育委員会による金屋遺跡(46)発掘調査では、区画溝に囲まれた掘立柱建物6棟と15~17世紀の古瀬戸や大窯製品、中国青磁、包含層からコンテナ6箱分の鉄滓と鋳型片、土坑1基から119枚の中国錢が出上している。

江戸時代では、慶長9年（1604）小早川秀秋の家老である平岡石見守頼勝は関ヶ原の合戦の功績で、荏戸郷約2,400石を含む10,000石余を押領し、徳野に屋敷を構えた。禪台寺には平岡頼勝の墓（62）が残る。承応2年（1653）子の頼資の死後に徳野藩が改易となると、今渡が所在する住戸郷は幕領となり、美濃国奉行岡田善政は平岡氏屋敷跡地に徳野陣屋（63）を設けた。寛文2年（1662）代官名取半左衛門は徳野陣屋内の主な建物を笠松陣屋へ移転し、残る建物は宿舎として明治時代まで維持された。

今渡では寛永年間（1624～1643）に中山道が整備される。当初は御嵩宿から土田村渡の渡し場までの通過点に過ぎなかったが、川瀬の変化で渡河場所が年々上流に移動し、天保5年（1834）頃には中山道（20）は今渡を渡し場（49）とする道筋に変更された。当地は尾張藩領の土田村を通過して名古屋へ至る「尾張街道」と土岐郡内へ至る「十岐街道」の分岐点にも位置している。可児・土岐郡内の年貢米や陶器が土岐街道を通じて搬送され、今渡の野市場湊で船出しされた。一方で川を遡上して塩などの日用品が陸揚げされた。天保14年（1843）『川船問屋諸荷物取扱方井庭賀等書上』⁵⁾によると陶磁器類は当湊を起点に桑名湊（江戸・大坂方面行き）、大垣（越前・近江方面行き）、笠松（岐阜方面行き）へ運ばれた。今渡は川湊・街道筋・渡船場として物資の集散拠点としての役割を担い、また交通の要衝地として繁栄した。

今渡の地名を示す最も古い文献は明暦3年（1657）『今渡町御年貢御断願書』⁶⁾で、差出入に「今渡村 十右衛門」とある。また、当文献には「文禄4年（1595）に兼山城主森右近（忠政）により川湊町が造られた」と記してあり、町並みが16世紀末の川湊を起因とする可能性も考えられる。今渡村は、幕領以降に野市場村と金屋村とに分けられるが、『元禄郡高寄帳』（1688～1794）の両村の各欄に「古者今渡村」の注記がある。享和2年（1802）『美濃國可児郡野市場村繪図』では野市場村内に金屋村の屋敷地や耕作地があり、文化12年（1815）の『野市場村明細帳』にも神社3社と高札場1ヶ所が金屋村との「最合」と記されている。中山道の道程を示す繪図には、江戸期を通じて今渡の地名が用いられている。

明治7年、野市場村・金屋村・川合村は合併し、今渡村が誕生。明治32年に今渡町となり、昭和30年に可児町に編入された。現在は市制の中で「可児市今渡」として地名が継承されている。

1) 可児市教育委員会1994『川合遺跡群』

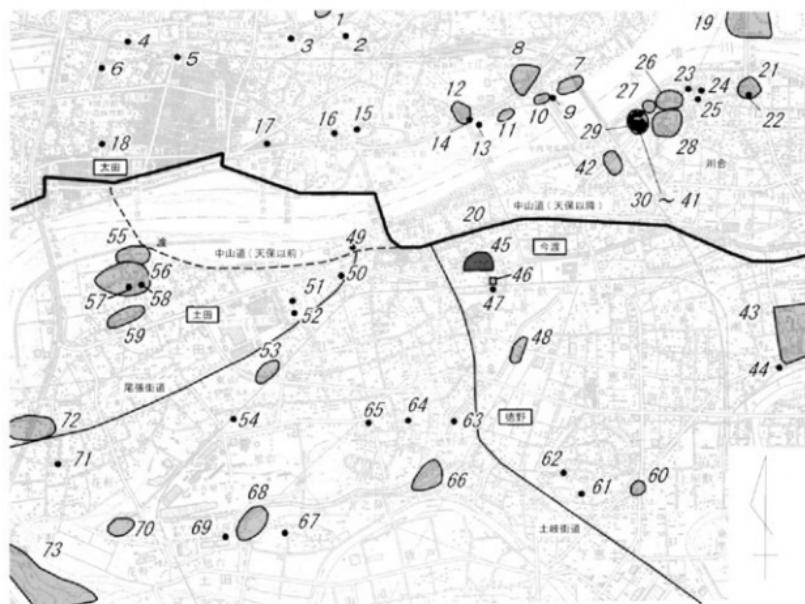
2) 1) と同じ。

3) 1) と同じ。

4) 可児町1978『可児町史』史資料編 「三五七 今渡金屋村鉢物師由来考」

5) 多治見市1976『多治見市史』叢書史料編No.193

6) 可児町1978『可児町史』史資料編 「一六五 今渡町御年貢御断願書」



第6図 今渡遺跡周辺の遺跡

(国土地理院発行の2万5千分の1地形図「美濃加茂」「小桑」2001を3万分の1に縮小して使用し、遺跡位置を加えた。)

第2表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	牛伏間遺跡	縄文・近世	26	宮之輪山遺跡	古墳・古代・白鳳・中世(「鍍合」)	50	今渡下原古墳	古墳
2	裏追間遺跡	縄文・弥生	27	川合古墳羣遺跡	縄文・弥生・古墳・古代(「白鳳」) 中世(「鍍合」)	51	土田東山古墳号古墳	古墳
3	牛畠遺跡	縄文・弥生	28	西郎古墳南古墳群	古墳	52	土田東山古墳	古墳
4	井口遺跡	弥生	29	青木神代古墳遺跡	縄文	53	宮之井岸遺跡	弥生
5	奥田遺跡	弥生	30	吉之輪1号古墳	古墳	54	土田東山古墳	縄文
6	井ノ上遺跡	縄文	31	吉之輪2号古墳	古墳	55	土田東山古墳	縄文
7	河合西岸跡	弥生	32	吉之輪3号古墳	古墳	56	大幡古墳群	古墳
8	川合川岸遺跡	弥生	33	吉之輪4号古墳	古墳	57	八幡8号(キンケイ4号)古墳	古墳
9	河合・ツ塚遺跡	弥生	34	吉之輪5号古墳	古墳	58	大幡古墳	古墳
10	川合西岸遺跡	古墳	35	吉之輪6号古墳	古墳	59	上田定安遺跡	古墳
11	赤池古墳群	古墳	36	吉之輪7号古墳	古墳	60	上田古墳遺跡	縄文
12	野里遺跡	縄文・中世	37	吉之輪8号古墳	古墳	61	原谷寺山古墳	古墳
13	鹿島遺跡	弥生	38	吉之輪9号古墳	古墳	62	平岡石見守原	近世(江戸)
14	赤池4号古墳	古墳	39	吉之輪10号古墳	古墳	63	赤野御所施跡	近世(江戸)
15	上原A地点遺跡	弥生・奈良	40	吉之輪11号古墳	古墳	64	鳴子来道跡	縄文
16	坂ノ古墳	古墳	41	吉之輪12号古墳	古墳	65	鳴子西道跡	縄文
17	神明堂古墳	古墳	42	西野遺跡	古墳	66	鶴野遺跡	縄文・弥生・古墳・古代 (「白鳳」・中世(「鍍合」))
18	穂の内古墳	古墳	43	可完工業高松古墳跡	縄文・中世	67	井之森遺跡	縄文
19	牧野小山遺跡	縄文・弥生・古墳	44	清水古墳群	中世(「鍍合」・室町・安土桃山)	68	土田北削山遺跡	古墳
20	中山道	中世・近世	45	今渡遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	69	北音羽前・塙古墳	古墳
21	川合遺跡	縄文・弥生・古墳	46	金原遺跡	中世・近世	70	土田栄町遺跡	縄文
22	東原古墳	古墳	47	今渡金屋遺跡	近世(江戸)	71	信濃町	縄文
23	川合高柴塚1号古墳	古墳	48	柳原城跡	弥生	72	北妻遺跡	縄文・弥生・古墳・古代 (「白鳳」・中世(「鍍合」))
24	川合高柴塚3号古墳	古墳	49	今渡御船山の跡	近世(江戸)	73	土田城跡	中世(「室町」)
25	川合高柴塚2号古墳	古墳						

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

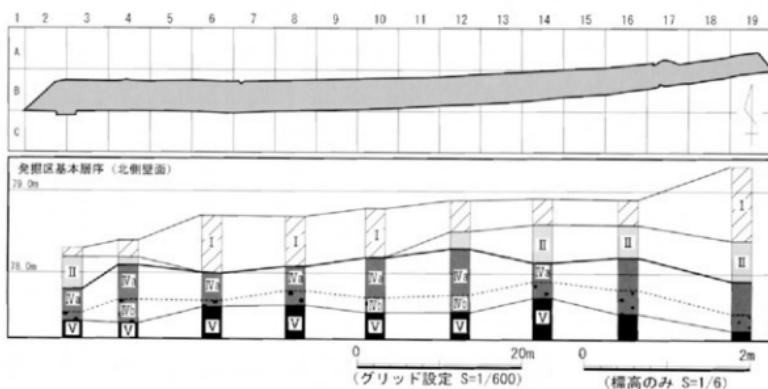
当遺跡は、木曽川が形成した河成段丘における低位段丘面のうち、上面から第3面に位置する。周辺の地形は北東から南西に流れる木曽川に向かう緩傾斜地に位置する。当地は畑作を中心とした桑や山苗などが栽培されてきたが、近年の宅地化や土地区画整備事業などにより、本来の地形が失われている。以下、各層位について報告する。

I層：宅地造成や駐車場整地に伴う客土で近年のもの。隣接する道路面までの段差約80～90cmを砂、粘土、バラスなどで埋め立ててある。また、5～11グリッド内ではIVa層に達するほど掘削が行われたと考えられ、III層とIVa層の混じり土を10～20cmの厚さで確認した。

II層：黒褐色砂質シルト（10YR2/2）～黒色砂質シルト（10YR2/1） 調査区西端と12グリッドから東側で40～50cmの厚さで存在する。しまりや粘性ではなく、小石や礫もほぼ含まれないが、多くの遺物が出土している。

III層：黒色砂質シルト（10YR1.7/1） 木曽川による段丘形成後に葦などの植物により土壤化した黒ボク。当地ではII・IV層が混じり、純粹な状態ではない。本来の構造検出面であるが、調査区内の残存状況が悪く、南側壁面付近に厚さ0.1m以内で断片的に確認できるのみであるため、IV層上面を検出面とした。

IV層：黄褐色砂質シルト（10YR5/6）～明黄褐色砂質シルト（10YR6/6） 河川の流水作用によりV層内の大型礫のみが流れずに残存し、その上から砂質シルトに覆われた木曽川堆積物の基盤層である¹¹⁾。砂質シルトのみの上層をIVa層（層厚0.1m～0.3m）、円錐が多く含まれる下層をIVb層（層厚0.3m～0.5m）とした。



第7図 発掘区グリッド図と基本層序

V層：灰色砂質シルト（N6/1） 木曽川堆積物の基盤層。地質調査ではIVa層から深さ40cmまで重機掘削したが更に深く、層内には砂礫が密に含まれていた。低位段丘内の地下水脈層²¹⁾と考えられる。

1) 当現象をアーマーコート現象という。青木哲哉氏御教示による。 2) 青木哲哉氏御教示による。

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

平成23、25年度の調査で室町時代中頃～江戸時代までの遺構を検出した。発掘区東端部は畑作の畠や植樹、宅地による地下付属設備などのため、またB5～B11付近は駐車場の整地や重機による掘削などのためIVa層上面まで削平されていた。しかし、発掘区全体で土坑（SK1～204）を、開発が及んでいない発掘区西側（SD1以西）で中近世の土坑墓（ST1～20）、近世以降の井戸（SE1）などの遺構を検出すことができた。また、現在の地割に近い位置で溝状遺構（SD1～7）と倒木痕（NW1～4）を検出した。中央やや東寄りで柵列（SA1）と考えられる遺構を検出した。

遺構の種類、遺構記号（括弧内）、分類内容は以下のとおりである。また、種別毎の検出遺構数、挿図掲載数は第3表にまとめた。

柵列 (SA) 軸線が一列に並ぶ柱穴群。

溝状遺構 (SD) 一定の幅と深さで、長軸方向が幅よりもはるかに長く掘られたもの。

井戸 (SE) 水を得ることのできる程度まで掘削されているもの。

土坑 (SK) 人為的に掘られ、溝・柵列・柱穴等を除いた性格不明な遺構。

土坑墓 (ST) 遺構内から出土した人骨によって判断した。このうち、骨片の被熱痕や炭化物、焼土等が確認できたものは火葬墓、人骨に被熱の形跡がないものは土葬墓とした。なお、人骨が伴わない遺構のうち、遺構の形状、掘方、埋土、配石、配列、埋葬品等の総合的な判断で墓と考えられるものも含めた。

倒木痕 (NW) 樹木が倒れて開いた穴に別の土が埋まったものや、立ち枯れした痕跡。今渡の民俗例として桑、榧などの樹木を植えて地境の目印としたという²²⁾。

第3表 検出遺構一覧

遺構の種類	略号	検出 遺構数	挿図 掲載数	備考
柵列	SA	1	1	
溝状遺構	SD	7	7	うち、重複2条
井戸	SE	1	1	
土坑	SK	204	10	H23(22基)、H25(182基)
土坑墓	ST	20	20	火葬墓5基、土葬墓15基
倒木痕	NW	4	0	
計		237	39	

個別遺構図の掲載縮尺は、20分の1を基本とするが遺物出土状況を示す実測図は10分の1、溝状遺構は40分の1（または50分の1）とした。

なお、本報告書において、遺構の挿図や写真は、遺跡の性格を理解する上で必要なものを中心に掲載した。また、検出した遺構すべてについて土坑分類模式図（第8図）に基づき、遺構観察表（第9～17表）に情報を記載した。



第8図 土坑分類模式図

3) 可児市2007「第6章 住生活」『可児市史 第四巻 民俗編』

2 遺物の概要

出土遺物は接合前の破片数で合計1,014点である（第4表）。接合後、破片数は931点、同一個体と判断できることによる遺物の個体数は831点である。土器・陶磁器類では、個体数から全体の遺物出土数に対する割合が最も高いのが近世陶磁器で、約35%を占める。次に土師質土器約25%、白瓷系陶器約13%の順で、これ以外は1割に満たない。

人骨・炭化物を除く掲載遺物数は合計114点で、同一個体数全体の13.7%である。その抽出方法は遺構出土遺物のうち、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち、遺跡の性格を端的に示すものや分類上の代表的なものを中心を選択した。なお、これ以外に入骨の部位が判明したもの63点を写真図版に掲載した（図版12、13）。

時期区分は一般的に使用されている時代呼称を用い、その年代観に対応する土器型式は既存の研究に従った（第5表）。なお、出土した遺物について、以下の方々から土器型式名、産地、時期、人骨の部位鑑定などの指導を得た。しかし、本書における記載内容の責任は編集者にある。

中近世陶磁器：藤澤 良祐（愛知学院大学） 人骨の部位鑑定：千田 隆夫（岐阜大学大学院）

次に種別ごとの所属時期、分布、出土割合などについて記す。遺跡全体の出土遺物分布では、西側2～6グリッドに約7割の出土遺物が集中する。一方、東側17～19グリッドでは2点を除いて全て包含層出土遺物、7～13グリッドは30点未満、20、21グリッドでは遺物は出土しなかった。これらはもともと遺構密度が低いことに加え、近現代の搅乱の影響が大きいと考えられる。出土した主な遺物について、種別毎の概要については次のとおりである。

縄文土器 1点 A17グリッドのII層から出土。無文土器の細片で時期は特定できない。

土師質土器 179点 遺物点数は25.4%である。多くが細片で時期を特定できる資料は極めて少ないが、形状が明らかな3点の土師器皿はロクロ挽き成形で製作されている。15世紀以降と考えられる。

第4表 遗物出土点数

		グリッド別遺物点数																					計	個体数	全件 割合 に占める 率	備考
		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	未 採 集	乱 等				
出土場所		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21				
		包																				1		1	1	0.1
土師・陶器類	土器	包	3	35	12	10	10								3	3	3	8	11			7				
	土器	包	2	3	103	16	13	4	6						3	1	1	1					33	288	265	179
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																					1		1	1	0.1
土器・陶器類	包																					1		1	1	0.1
	包																									

第5表 繼年対応表

須恵器 出土遺物は3点のみで全体の0.4%である。1点のみ壺の胴部の破片と判明したが、時期は不明である。

白瓷系陶器 89点(第6表)

遺物点数は全体の12.6%を占める。南部系3点以外は全て北部系である。時期は浅間黒下～丸石3号窯式、第5型式が最も古いが、主体は終末期の大洞東1号窯

式～生田2号窯式で全体の8割を占める。器種は碗が約87%、小皿は約8%である。

古瀬戸 41点(第7表)。古瀬戸は、いずれも古瀬戸後期の後Ⅲ期～後Ⅳ期新段階の範疇のもので、器種には碗、皿、鉢、盤、瓶、壺がある。白窓系陶器の大洞東1号窯式～生田2号窯式とはほぼ同時期と考えられるが、出土点数は全体の5.8%である。主な遺物は、骨壺に使用されたと考えられる底面に穿孔のある梅瓶が出土している。

大窯 8点(第7表) 大窯のものは第1～4段階にわたって出土しているが、破片数は8点である。

常滑 8点 破片8点のうち個体数は7点で、そのうち4点は壺。1点は第10型式で15世紀後半に比定できる。

第6表 白瓷系陶器

西野	東道						尾張			器種不明	計
	1200	1300	1400	1500	1600	1700	第5型式	第6型式	第7型式～		
白窓系陶器	西野	西間黒下1 丸石3 窯頭1	白土1 明和1	大窓1 窯14	大洞東1 島之島3	生田2					
	病	4 28	1 1	1 14	24 26	1					28
	小皿	7			5 1						7
	器種不明	0			1						4 4
	計	85	4	7	71	3					89

第7表 古瀬戸・大窯製品

古瀬戸・大窯	器種	古瀬戸				大窯				計	
		1400		1500		第1段階	第2段階	第3段階	第4段階		
		後Ⅲ期	後Ⅳ期	古期	後Ⅳ期						
	碗	1	1		0						
	平碗	2		1	0						
	天目茶碗	1			1	3	1	1			
	端反碗	2		1	0						
	抹袖小皿	1		1	0						
	腰折皿	1			1	0					
	志野皿	0				2					
	丸皿	0			1						
	折線皿	0			1						
	反皿	0			1						
	直線中皿	1		1	0						
	中皿	1		1	0						
	鉢	1		1	0						
	唐鉢	8			8	0					
	盤類	6	2		1	0					
				3							
	梅瓶	3		3	0						
	緑腰形瓶子	1		1	0						
	片口小瓶	1		1	0						
	巻き瓶	5		5	0						
	土瓶か盃	3		3	0						
	甕	1		1	0						
	不明	2		2	0						
	計			41					8		

近世陶磁器 248点(第8表)。近世陶磁器は出土遺物の3分の1を占め、その殆どが瀬戸・美濃焼房式登窯製品である。それ以外は肥前6点、京信1点、産地不明6点である。器種は供膳具(碗類、皿類など)126点で最も多く全体の半分を占める。他に調理具(土瓶)3点、嗜好具(徳利)18点、灯火具(灯明皿)2点、神仏具(香炉、仏龕具)6点などがある。遺物の帰属時期については、半数近くの112点の遺物の時期が不明であるが、時期が明らかになった遺物は近世後半のものが多くみられる。

木製品 3点 全て土蔵墓内からの出土で、板状木製品2点と用途不明木製品1点である。

石器 20点 石核はA18グリッドの搅乱から出土した。石鏃はB5グリッドのII層から出土した。製品は石鏃1点で、他は石核、剥片である。いずれもチャート製であった。

第8表 近世陶磁器

器種	小計	点数	1600			1700			1800			近代	備考	
			登窯第1段階			登窯第2段階			登窯第3段階					
			第1 小期	第2 小期	第3 小期	第4 小期	第5 小期	第6 小期	第7 小期	第8 小期	第9 小期	第10 小期	第11 小期	
磁類	25	11		2					2				2	
		2								2				
		3				1	1							
		2							2					
		2		2										
		2			1					1				
		3		2										
碗類	58	1				4			2					
									1	3				
									1	2		35		
									1					
										3				
		1			1									
		6								1	5			
瓶類	103	1							1					
		2								1	1			
		2								1	1			
		11		1			5					1		
		2			1									
		14				1	1	1				5		
		14				5								
瀬戸・美濃	11	1												
		1												
		1												
		1												
		1												
		1												
		1												
仏具	6	5							1	3		1		
		1								1				
		3								2				
		9		1								8		
		5		1								4		
		2								2				
		2												
漆類	19	2												
		2												
		2												
		2												
		2												
		2												
		2												
瓶または花瓶	19	12				1		4			7			
		1												
		1						4						
		1												
		3								2		1		
		3												
		3												
その他	63	1												
		1												
		18		1		2			12		1			
		1												
		1												
		1												
		31	1			1						28	1	
肥前・西・郡・跡	6	6		1				1		1		3		
		1												
产地不明	6	1												
		1												
		1												
		3										2	1	
合計	248	248						246				3		

金属製品 48点 火葬施設から出土した鉄釘、土葬墓の副葬品の銭貨や煙管などが主な遺物である。

人骨 106点 土坑墓と判断した20基の遺構のうち15基内で被葬者の骨片が出土した。106点は骨片の取り上げ点数である。残存状態が悪く断片的なものが多い。骨片の総重量は約1,000 gであった。なお、本文中や図面等に、判明した部位を掲載順にB（番号）を付けて表記した。

炭化物 19点 全て火葬墓に関連した遺物で、骨片と共に出土した。火葬時の燃料と考えられる。

第3節 遺構

遺構について土坑墓（S T）、溝状遺構（S D）、井戸（S E）、柵列（S A）、土坑（S K）の順に報告する。なお、遺構図内の記号やトーン表記について、第9図で凡例を示した。

1 土坑墓（S T） S T 1～S T 20（第10～21図）

S T 1 （第10図、図版3）

検出状況 B 2～3 グリッドに位置する。掲乱の完掘後に底面から突き出た径70cm、厚さ55cmの大型縦1点を確認した。縫の周囲が基盤層とは異なる褐色の埋土であることがわかり、掲乱底面を再検出した。

形状・方位 平面形は方形に近い形状と考えられる。壁面に遮られて全容は不明であるが、計測できる範囲の法量は長軸1.49m、短軸1.11m、深さ0.50m、主軸方向はN-60°-Eである。

縫の状況 北東側では埋土内で出土した縫は積み重なっていた。北側は調査区壁面にかかっており、抜き取ると発掘区壁面崩壊の恐れがあるため、掘削を断念した。

掘方・埋土 掘方の底面は垂直に近い立ち上がりで上方はやや広がる。底面はV層上面を少し掘り込み平坦である。上面が掲乱で滅失しているため当初の状況は不明であるが、検出面以下の埋土は混入物のない灰黄褐色砂質シルトの単層である。

遺物出土状況・埋葬状況 遺構底面付近から東向きに立位で丸皿（1）1点、横位で割れた銭貨（2）1点が出土した。骨片は発見されず、棺の痕跡は確認できなかった。土葬墓S T 15のように平面形が方形に近くて深さがあり、壁面は垂直に近いこと、火葬墓のように浅い掘り込みで被熱の痕跡がないことから土葬墓とした。

時期 出土した北宋銭は16世紀に製作された堺型模鉄錢の可能性を考えられ、丸皿は美濃瀬戸大窯期第3段階であることから16世紀後半とした。

S T 2 （第10図）

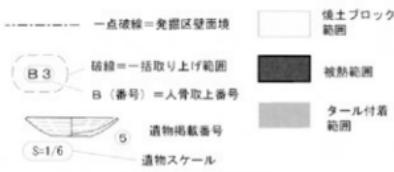
検出状況 B 2～3 グリッドに位置する。IV層上面にて検出した。上面は浅いS K 13に切られている。調査区南側壁面付近の検出面で円縫2点の上部を発見したため、周囲を精査した結果、集石と遺構平面形を確認した。

形状・方位 平面形は梢円形を呈する。長軸0.82m、短軸0.49m、深さ0.32m、主軸方向はN-32°-Wである。

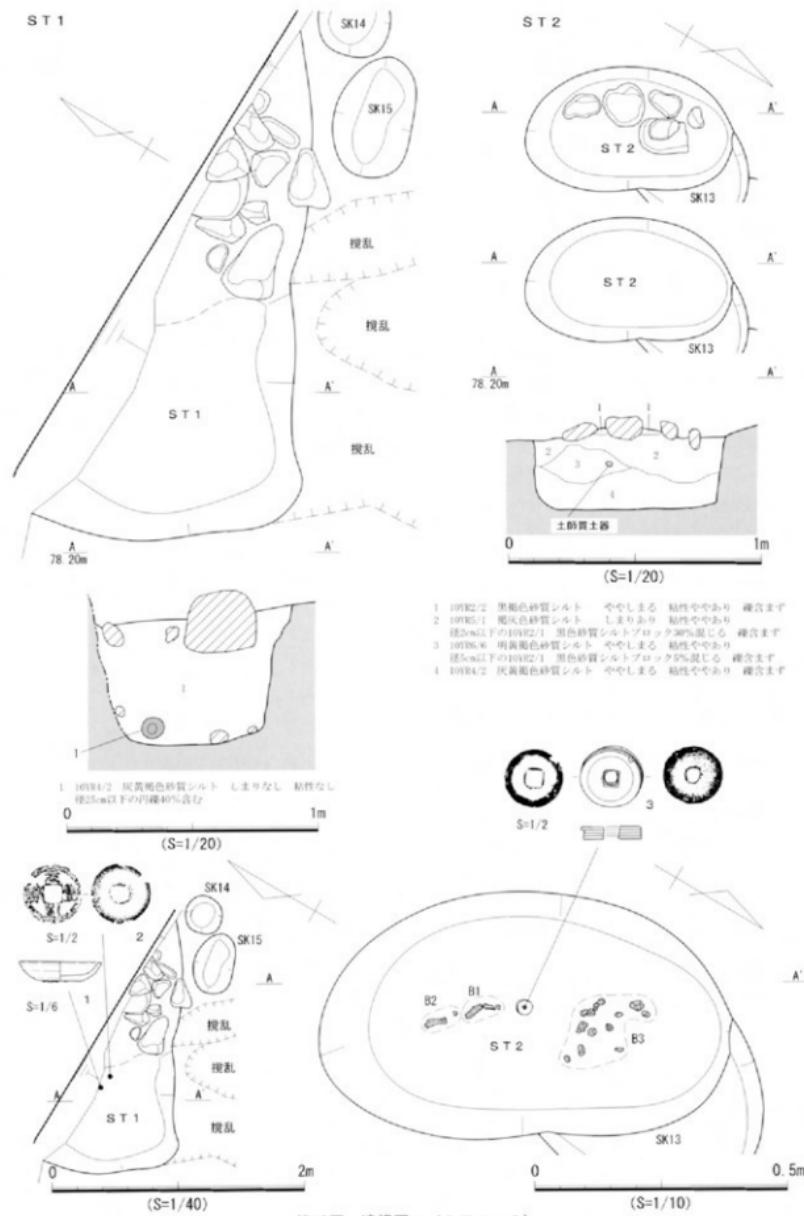
集石状況 上層の円縫5点は西寄りに配置され、北端の縫は長軸方向を直立させ、脇の小縫の直下にのみ扁平な円縫1点が出土した。

掘方・埋土 掘方は壁面が垂直で、底面はIVa層下面まで達する。埋土は上層に褐灰色砂質シルト、下層は灰黄褐色砂質シルト層であり、南東部分の中間にのみ黒色砂質シルトブロック混じりの明黄褐色砂質シルト層がみられた。

遺物出土状況 人骨が遺構の底面から少し浮いた状態で出土した。位置は長軸方向の中心軸付近に集



第9図 遺構図凡例



第10図 造構図1 (ST 1, 2)

中し、残存状態は悪く、すべて小破片であった。3層からは1.5cmの土師質土器の小破片1点、骨片と同レベルで重なった錢貨(3)が出土した。

埋葬状況 埋土に焼土や炭化物を含まず、骨片に被熱の痕跡が確認できなかったことから、土葬墓と判断した。骨片の残存状況が悪いため埋葬肢位は確認できなかったが、一括取り上げしたB3から、頭骸骨の一部である内耳孔(B3-1)1点と歯(B3-2)18点が出土した。このことから、被葬者は頭部を北に向けていたと考えられる。棺の痕跡は確認されなかった。なお、出土骨片の総重量は19.3gであった。

時期 錢貨(3)は癒着した状態で出土し、その裏面とも錢貨の裏側であるため種類は不明であるが、上面に繩を配石し、平面形が楕円形に近い点など土葬墓ST7と類似する。そのST7の自然科学分析結果が17世紀中葉であるため、17世紀代とした。

ST3(第11図)

検出状況 B3・C3グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK25に切られる。遺構検出面上では全面に白粉状の骨片と、北面から炭化物や焼土ブロックを確認した。北面の検出中に重複する遺構の一部を検出したため、再度、検出を行った。薄いIII層から検出作業を行っていたが遺構平面形が判明せず、最終的にIVa層上面で確定した。検出面上の東面で焼土ブロックや少量の炭化物片を確認した。2つの遺構と想定し、平面形の先後関係の確定を、現地では焼土ブロックの途切れた部分と輪郭の形状から判断したが、その後の出土人骨の部位鑑定では同一人物の人骨であり、遺構の底面の段差もないと同一遺構と判断した。

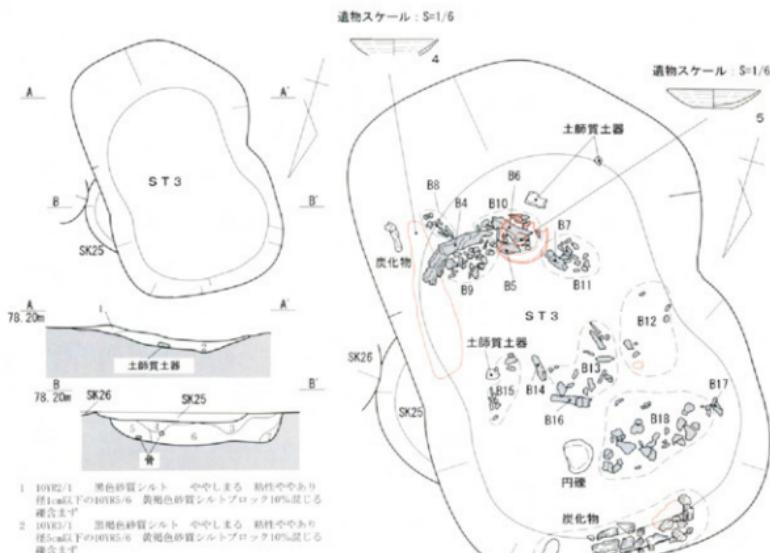
形状・方位 ST3の平面形状は長軸方向の中央が少し窪んでいるが楕円形に近く、長軸1.04m、短軸0.67m、深さ0.14m、主軸はN-42°-Wである。

集石状況 上面の集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面の断面は西側が急で、東側は緩やかな立ち上がりである。底面は東側がやや高く、全体に浅い。埋土の1、3、4、5層は黒色砂質シルト、2、6、7層は黒褐色砂質シルト、3、4、6層内には骨片が混じる。

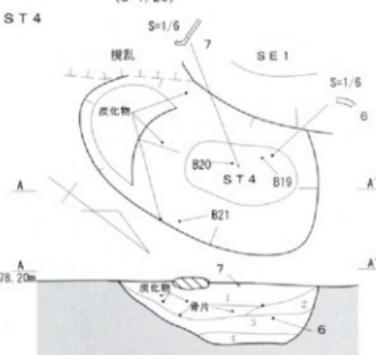
遺物出土状況・埋葬状況 ST3では土師質土器小破片4点、石器(チャートの剥片)1点、円錐1点、骨片と多量の炭化物が出土した。検出段階のIII層下面から、ほぼ完形の白瓷系陶器碗(64)が伏せた状態で出土した。遺構内南側中央で埋土中から口縁部を欠いた白瓷系陶器碗(5)が内面を少し北に向かって正位で出土した。両遺物は極めて近い位置にあり、遺構がIII層からの掘り込みが確認できれば身と蓋のような役割とも考えられた。しかし、碗(64)を遺構内遺物と判断できなかつたため包含層出土遺物としている。焼土ブロック内からも白瓷系陶器碗(4)の破片が出土した。以上の碗3点は生田2号窯式である。骨片は遺構内壁面付近には少なく、大きな破片が遺構中央付近に集中している。そのうち北側では頭骨片(B18-1)6点、内耳孔(B18-2)1点、頬骨弓(B18-3)1点、歯根(B18-4)2点、左下顎骨(B18-5)1点の部位を確認した。他には碗(5)直下で長軸を東西方向に向けて出土した骨片周辺では上腕骨(B4-1)1点、尺骨(B5-1)1点、橈骨(B6-1)1点の部位を確認した。骨片は被熱して白色を呈し、表面は収縮による三日月形の亀裂が生じている。東壁面と北側壁面で付近では、埋土中に焼土ブロックや炭化物が混じる。以上の状況から当遺構は火葬墓であると判断した。骨片が被熱で収縮し表面に亀裂が確認できることから死亡後、時間を置かずに火葬されたと考えられる。出土骨片の総重量は255.2gである。なお、北側壁面で出土した炭化物から状態のよい

ST 3



- 10YR2/1 黒色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック10%混じる
確含ます
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
径5cm以下の10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック10%混じる
確含ます
- 10YR1/1 黒色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
骨粉わずかに含む 確含ます
- 10YR2/1 黒色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
径5cm以下の焼土ブロック5%, 骨片多量に含む 確含ます
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
径5cm以下の焼土ブロック1%含む 確含せず
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
骨片多量に含む 確含せず
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック10%混じる
確含ます

0 1m
(S=1/20)



- 10YR2/1 黒色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
確含せず
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
徑5cm以下の10YR5/6 明黄褐色砂質シルトブロック5%混じる
確含ます
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
徑5cm以下の10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック10%混じる
確含せず
- 10YR2/1 黑褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
徑1cm以下の10YR5/6 黄褐色砂質シルトブロック10%混じる
確含ます

0 1m
(S=1/20)

第II図 遺構図2 (ST 3、4)

8点の直径を計測した結果、直径1.9cm～3.0cmの小径木であることが判明した。

出土した骨片は部位毎のまとまりがみられ、焼土・炭なども分けられている。遺構内底面・壁面に被熱痕がなく、焼土や炭化物が混じるのは埋土のみであるため、別の場所で火葬されたと考えられる。埋土に基盤層が混じらないため、おそらく地表面で火葬を行った後、埋葬用に土坑を掘り、最初に焼土や炭化物を含んだ埋土で遺構内の端を埋め、中央付近の埋土として小破片の骨片と上面には比較的大型の骨片を埋め、最後に腕骨上に碗（5）を置いて埋納したと考えられる。

時期 埋葬に伴う遺物の白瓷系陶器碗の年代から15世紀後半と判断した。

S T 4 （第11図）

検出状況 B 3 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。隣接するS E 1 に切られ、S T 5、S T 6、S K 35、S K 36を切る。検出時はS T 4～6 の範囲で同一埋土に見え、地表面に大型礫の集石の一部が露出した範囲（S T 6）とない範囲（S T 4、5）を確認した。重複関係が不明なため周辺を再度、掘り下げて輪郭を検出し確定した。

形状・方位 平面形状は橢円形に近い不定形で、計測できる範囲の法量は長軸1.02m、短軸0.55m、深さ0.25mである。主軸方向はN-13°～Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は北西側が急で、南東側は緩やかであり、底面はIVa層下面まで達していた。
遺物出土状況・埋葬状況 1～3層内で、表面に炭化物が付着した土師質土器の小破片105点が出土した。その後の接合作業で脚付きの土鍋底部（7）であることが判明した。また、1層内で炭化物と人骨が各々3箇所で出土したがすべて小破片であった。炭化物の出土と骨片の被熱状態から、火葬されたものであると判断する。骨片が出土した位置よりも下面の3層から耳付水注（6）の小破片1点が出土した。骨片や土師質土器は1層のみから出土し、土器は細かく割れた状態であるため、再掘削された可能性がある。出土骨片の総重量は1.7gであった。

時期 出土した耳付水柱から17世紀の江戸時代前期と判断した。

S T 5 （第12図）

検出状況 B 3 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S E 1、S T 4、S K 34に切られる。

形状・方位 南側と西側を削平されているが橢円形に近いと考えられ、計測できる範囲の法量は長軸0.5m、短軸0.35m、深さ0.17mで、主軸方向は不明である。

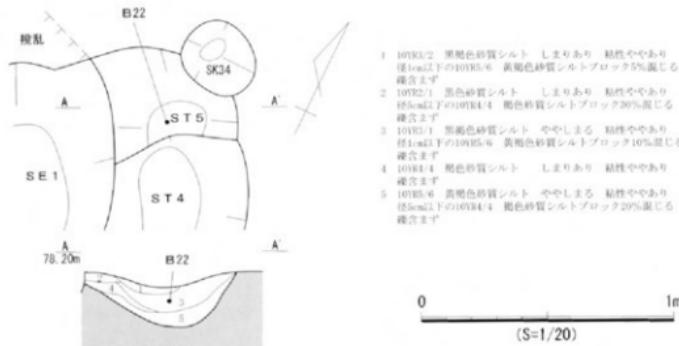
集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 底面付近から西側は緩やか、東側は急な立ち上がりで上面に至る。底面は丸みを帯び、深さは0.4mでIVa層下面まで達する。埋土は1～3層が黒色と黒褐色砂質シルト、4層以下は褐色土と黄褐色砂質シルトの混じり土である。

遺物出土状況・埋葬状況 遺構内からは炭化物や焼土の出土、被熱痕は確認できなかったが、3層内から被熱して細かく割れた歯が出土した。このうち残存状態のよい2本は臼歯（B22）であった。骨壺は確認できなかったが、出土した歯の被熱の痕跡から火葬墓と判断した。なお、出土骨片の総重量は1.2gであった。

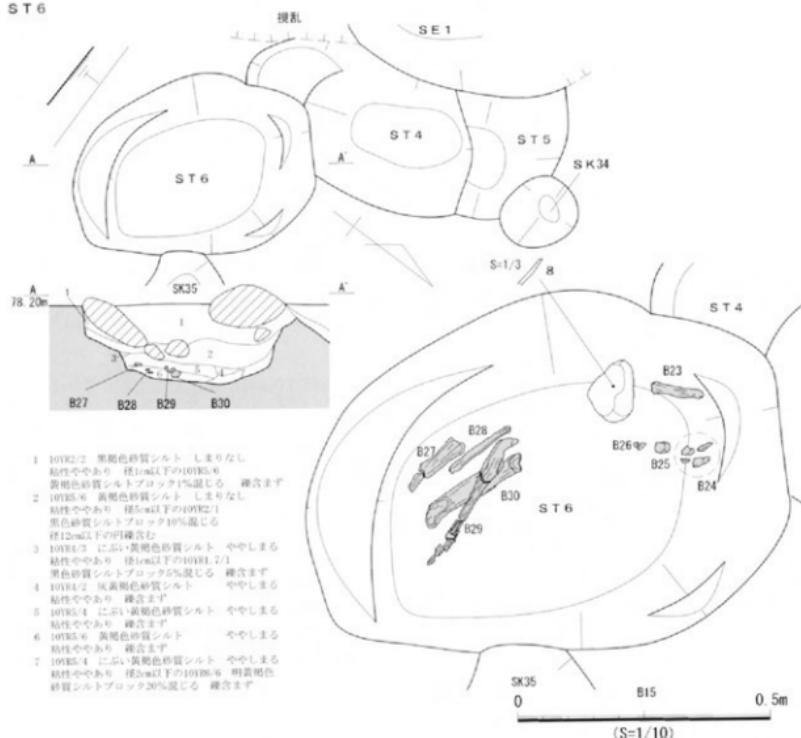
時期 当遺構を切るS T 4 が江戸時代前期であるため、それ以前と考えられる。

ST 5



- 1 10103/2 黒褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
透水性良好 10103/2の10105/6 黄褐色砂質シルトブロック5%混じる
確含まず
- 2 10103/1 黒色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
透水性良好 10104/4 黄褐色砂質シルトブロック20%混じる
確含せず
- 3 10103/1 黒褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
透水性良好
- 4 10104/4 黑褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
透水性良好
- 5 10105/6 黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
透水性良好 10104/4 黑褐色砂質シルトブロック20%混じる
確含せず

ST 6



- 1 10102/2 黒褐色砂質シルト しまりなし
粘性ややあり 後1cm以下10105/6
黄褐色砂質シルトブロック1%混じる 確含まず
- 2 10105/6 黄褐色砂質シルト しまりなし
粘性ややあり 後5cm以下10102/1
黒色砂質シルトブロック10%混じる
後12cm以下10105/6
確含せず
- 3 10101/3 に似ない黄褐色砂質シルト ややしまる
粘性ややあり 後1cm以下10101/1
黒色砂質シルトブロック5%混じる 確含せず
- 4 10101/1 に似ない黄褐色砂質シルト ややしまる
粘性ややあり 確含せず
- 5 10103/4 に似ない黒褐色砂質シルト ややしまる
粘性ややあり 確含せず
- 6 10105/6 黄褐色砂質シルト ややしまる
粘性ややあり 確含せず
- 7 10105/4 に似ない黄褐色砂質シルト ややしまる
粘性ややあり 後5cm以下10106/6 明黄褐色
砂質シルトブロック20%混じる 確含せず

第12図 道構図3 (ST 5、6)

S T 6 (第12図)

検出状況 B 3 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T 4、S K35に切られ、S K36を切る。集石が含まれる1～2層を掘り上げて完掘と考えたが、下面から骨片の一部が露出した。そのため、掘削不足と判明し、再度検出し、半截・完掘した。

形状・方位 楕円形に近い形状で長軸0.98m、短軸0.74m、深さ0.31m、主軸方向はN-50°-Wである。
集石状況 検出面では中央に大型礫4点が出土したが、重複関係が不明なため周辺を再度、掘り下げる同時に大型礫を除去して検出した。底面からは径25cm大の円礫が1点出土した。

掘方・埋土 掘方の壁面は東西側両方共に急な立ち上がりで、途中の中段は大型礫の大きさに合わせるように広がる。IVa層下面まで掘り込まれている。1層に埋設された円礫に伴う埋土は黒褐色砂質シルトで、2～3層内まで黒色砂質シルトブロックが混じる。以下、にぶい黄褐色～黒褐色砂質シルトである。
遺物出土状況・埋葬状況 遺構底面に据えられた大型礫1点があり、その上面から白瓷系陶器碗(8)の小破片1点、土師質土器の小破片3点、石器1点が出土した。骨片は北西部に外耳孔(B24-1)1点、内耳孔(B24-3とB25-1)2点、歯(B24-2とB26-1)15点が出土した。南側では大腿骨(B29-1とB30-1)2点が出土した。いずれの骨片も被熱していないことから土葬墓と判断した。なお、棺の痕跡は確認できなかった。出土骨片の総重量は165.6gであった。

時期 土葬墓の年代は、出土した白瓷系陶器碗(大洞東～脇之島)は混入と考えられ、遺構の構造からS T 4の直前の江戸時代前期と考えられる。

S T 7 (第13図)

検出状況 B 3～4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S K35に切られる。検出面で円礫5点を確認した。北西の2つの礫周辺の埋土は他の部分と異なり、黒褐色を呈していた。

形状・方位 平面形状は椭円形に近い形状である。長軸0.93m、短軸0.57m、深さ0.38m、主軸はN-55°-Wである。

集石状況 4点の大型礫が遺構の主軸に沿って上面に並び、1点のみ東端にある。礫は黒色～黒褐色砂質シルト主体の1～3層内に位置し、それより下層の灰黃褐色～褐色砂質シルト層の4～5層内からは全く出土しなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は垂直に近い立ち上がりである。底面はIVa層下面まで達する。4～5層は混じり土も礫1つない埋土であった。

遺物出土状況・埋葬状況 出上遺物は骨片のみですべて5層からの出土である。骨片が底面から約0.10m上から出土したことから、土を入れた後に被葬者を埋葬したと考えられる。判明した部位は内耳孔(B31-1とB33-1)2点、下頸骨(B31-2とB34-2)2点、歯(B32-1、B34-1)6点、上腕骨(B35-1、B36-1)2点で出土骨片の総重量は64.2gであった。頭部に関連する骨片の位置から、被葬者は頭部を北西に向けて埋葬されていたと考えられる。棺の痕跡は確認できなかった。

時期 時代が判断できる遺物が出土していないが、骨内のコラーゲンから放射性炭素年代を測定した結果により17世紀中頃の可能性が高い。

S T 8 (第13図)

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。検出時に骨片が密にある部分を中心にして遺構の輪郭を確認し、平面形を確定した。

形状・方位 平面形状は橢円形に近い形状を呈す。長軸0.63m、短軸0.35m、深さ0.05m、上軸はN-40°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 底面付近の断面は緩やかに立ち上がる。掘り込みは浅く、底面は平坦に近い。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は骨片のみで唯一、手足の部位という判断ができた長管骨(B37-1)のみがある。被熱して白色化した骨片が遺構中央から南側にかけての範囲で黒色砂質シルト層のみで出土し、僅かであるが炭化物も確認した。火葬骨、炭化物が確認できたため、火葬墓と判断した。なお、出土骨片の総重量は25.6gであった。

時期 時代が判断ができる遺物が出土していないため不明であるが、骨片内の炭酸カルシウムを元に分析した結果から、15世紀前半と考えられる。

S T 9 (第14図)

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK49を切る。

形状・方位 平面形は隅丸長方形に近い形状である。長軸1.19m、短軸0.82m、深さ0.31m。上軸方向はN-49°-Wである。

集石状況 上面で集石は確認できなかったが、底面に15点の円礫が出土した。

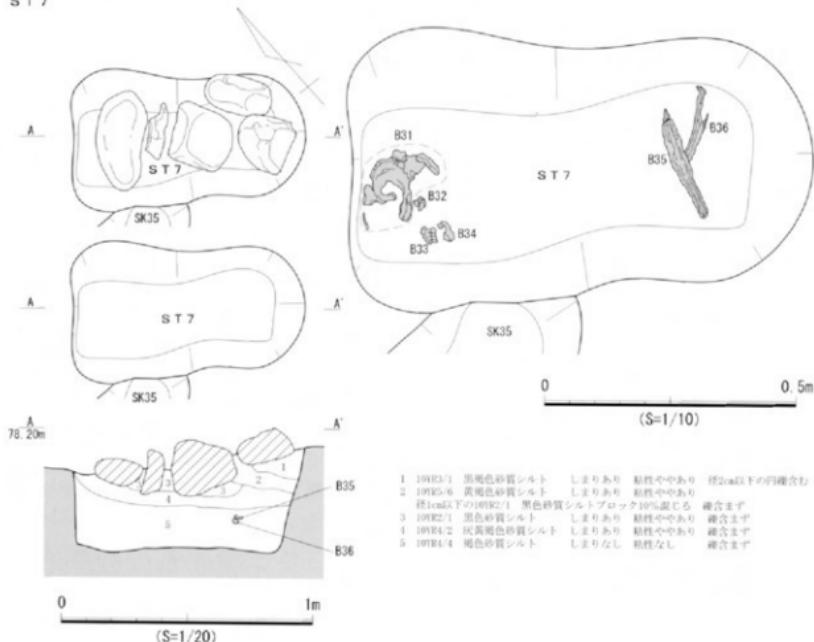
掘方・埋土 底面付近の断面は垂直に近い。底面は平坦でIVa層下面まで掘られている。埋土は1～3層が黒色と黒褐色砂質シルト、4層以下は褐色土と黄褐色砂質シルトの混じり土で、微小な骨片が確認された。4層では北から南西にかけて焼土ブロックを確認した。5層底面付近では北東端と南西角を中心に焼土ブロックのまとまりを確認した。

遺物出土状況・埋葬状況 1層から江戸後期の徳利、白瓷系陶器の小皿(9)、土師質土器4点の小破片、微細な骨片が出土した。4層で古瀬戸後期の壺または瓶(10)が2点出土した。遺構底面の四隅付近からは鉄釘(11～17)が出土した。主要な骨片は4～5層からで、5層の骨片で特定できた部位は、腸骨(B47-2)、頭骨(B58)、大腿骨(B48-1)、頸骨(B47-1)閉鎖孔(B49-1)である。また、埋土全體から炭化物(木炭)が出土し、鉄釘(16と13、14)とほぼ同位置で竹類の炭化物が出土している。

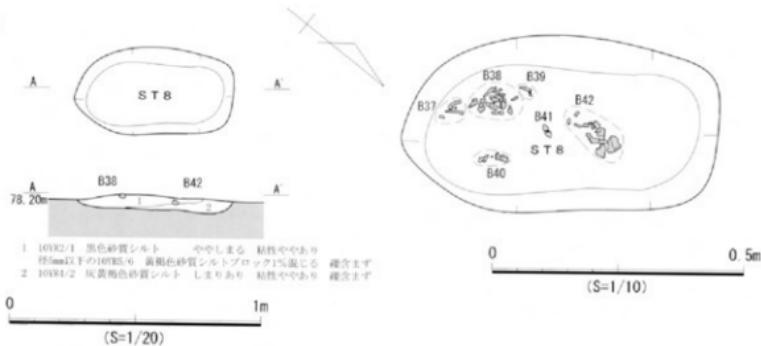
火葬状況については、まず四隅から出土した鉄釘から箱状容器の可能性が伺え、礫に付着したタール痕や被熱痕から箱状容器は礫の上に置かれていたと考えられる。礫は遺構底面から箱状容器を浮かせつつ燃焼に必要な通気性を確保する役割が考えられる¹¹。礫は北寄りに配石され、遺構中央の礫から北側壁面に被熱痕があることから、風向きを考慮して北側から集中的に焼成を行ったと考えられる。なお、竹は火力があるため燃焼に用いられたか、火葬施設の構造物等の一部であったとも考えられる。付着したタールの痕跡や鉄釘の位置から、およそ箱状容器は0.7m×0.5m程度の大きさと考えられる。よって、当該遺構は火葬施設であったと判断する。なお、死後まもなく火葬されたために骨片の部位には大きく裂け、ねじ曲がり、細かく碎けるなど、残存状況が悪いため、この施設にて単体か複数個体が焼成されたかの判断はできないが、頭骨や大腿骨などの主要な骨片が残存していることから新たに埋葬場所を作らず、そのまま火葬墓に転用した可能性が高いと考えられる。なお、出土骨片の総重量は215.7gであった。

時期 1層出土の徳利が最も新しいが混入品と考え、脇之島期の白瓷系陶器の小皿(9)と遺構底面で出土した壺または甕(10)が古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ期であることから、15世紀中頃と判断した。

S T 7

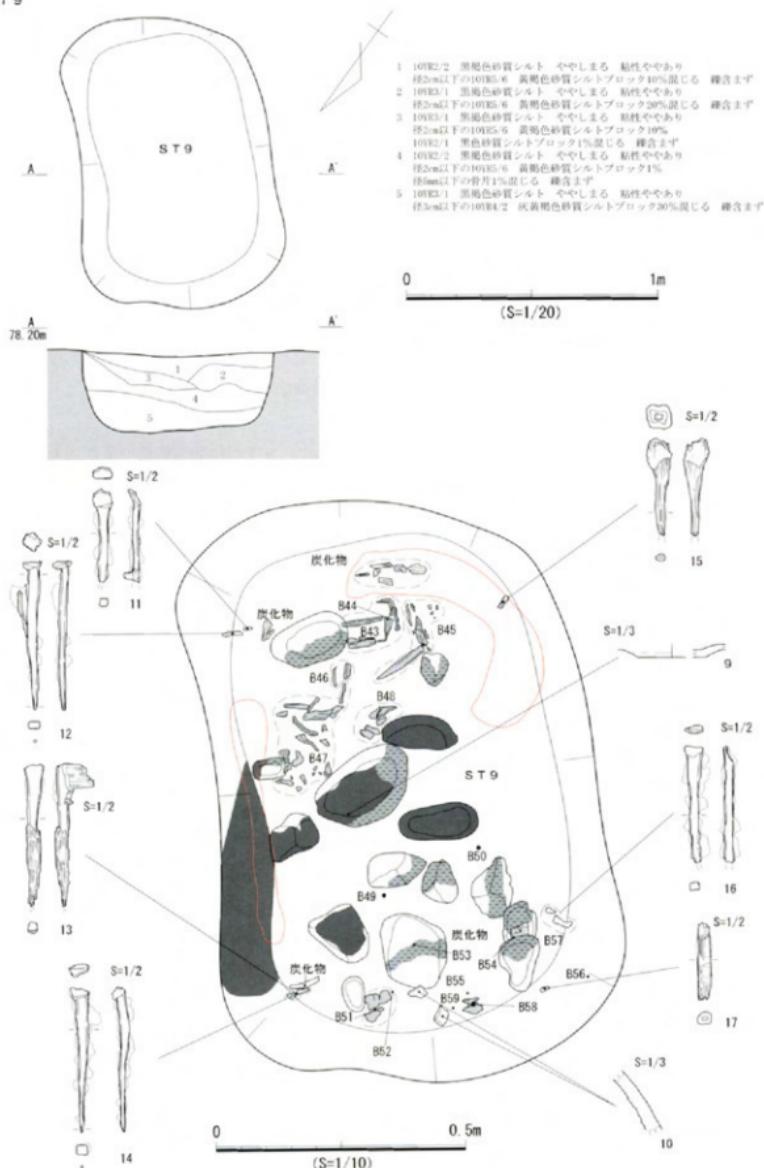


S T 8



第13図 遺構図4 (S T 7、8)

ST 9



第14図 遺構図5 (ST 9)

S T 10 (第15図)

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。

形状・方位 平面形が橢円形に近い形状を呈する。長軸0.72m、短軸0.52m、深さ0.23m、主軸方向はN-35-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の南側は緩やかに掘り込まれているが、北側は一段窪む。1層は黒褐色砂質シルトで遺構全体に及び、北側の窪み内はやや濃い黒褐色砂質シルトで充填されていた。

出土状況・埋葬状況 特定できた遺物は骨片のみで歯(B60-1)が7本あり、一部の歯根部分に下顎骨(歯槽部分)の一部が残っていた。頭骸骨と確定できないが、その一部と思われる部位も出土した。よって、歯のみの埋葬ではなく、少なくとも頭部が埋葬されていたと考えられる。骨片には被熱の痕跡はないため、土葬墓と判断した。なお、出土骨片の総重量は5.1gであった。

時期 時代が特定できる遺物が出土していないため不明であるが、小型で橢円形の平面形で、ゆるやかな立ち上がりの浅い掘方であることから、江戸時代前期に所属する可能性が高い。

S T 11 (第15図)

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T 12に切られる。また、上面には搅乱坑があり、遺構埋土内を掘削して下面にある大型礫の南西側に達し、脇にはプラスチックのキャップが落ちていた。

形状・方位 平面形は隅丸方形で長軸1.06m、短軸0.61m、深さ0.53m、主軸方向はN-44°-Wである。

集石状況 上面では集石と思われる礫は確認できなかったが、被葬者の遺骸の上から長軸36cm、幅27cm、厚さ13cmの大型礫が出土した。

掘方・埋土 掘方の壁面は垂直に立ち上がっている。底面はV層を0.12m掘り込む。2~4層内は砂質シルトの混じり土であるが、5~6層にはみられなかった。

遺物出土状況・埋葬状況 1層から土師質土器の小破片1点が出土した。骨片は6層に集中し、特定できた部位は北壁付近では頭骨(B61-1)1点、後頭部(B61-2)1点、内耳孔(B61-3)1点、頬骨(B61-4)1点、歯(B64-1)9点、長管骨(B65)1点があり、遺構中央では長管骨(B66-1)1点を確認した。このことから、被葬者は北西向きに埋葬されたと考えられる。なお、頭骨が壁面際で出土し直下の底面に平坦部分がないこと、大型礫の位置関係から考えると納棺しなかった可能性が高いと判断する。遺構中央やや東寄りでは4枚重ねの銭貨(18)が出土している。なお、出土骨片の総重量は57.3gであった。

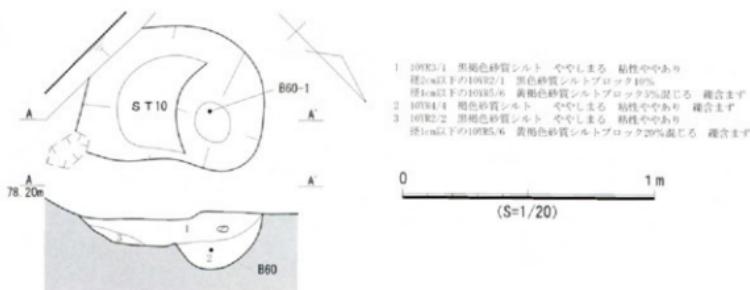
時期 銭貨(18)は判読できない。このため、時期が判断できる遺物が出土していないため不明であるが、やや大型で直立した壁面の掘方であることから、18世紀代に所属すると考えられる。

S T 12 (第16図)

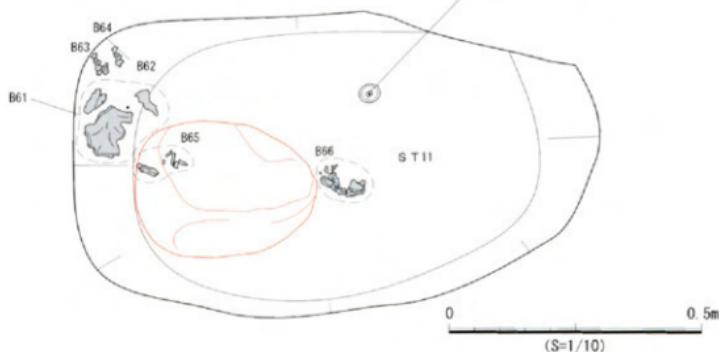
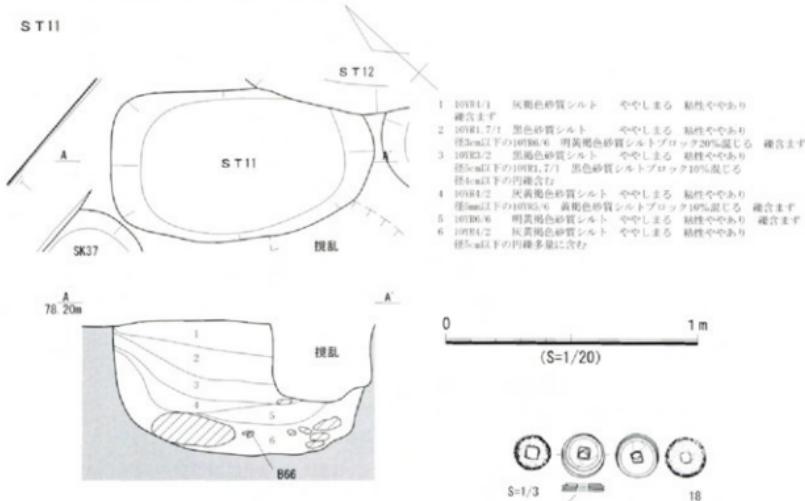
検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK38、SK40、SK41に切られ、S T 13を切る。検出時は南西側の橢円形の黄褐色砂質シルト範囲と北東側の黒褐色砂質シルトの範囲を別々に分け、前者を搅乱と想定して先に掘削した。黄褐色の埋土を完掘した後、底面に残る大量の大型礫が更に下面の黒褐色の埋土内に至ること、両遺構の幅が同じであることから同一遺構内の埋土と判断し掘削した。

形状・方位 平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.46m、短軸0.93m、深さ0.68m、主軸方向はN-52°-Wである。

ST 10



ST 11



第15図 遺構図6 (ST 10, 11)

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の埋土はほぼ垂直な立ち上がりである。底面は平坦でV層を0.22m掘り込む。埋土の5・6層は西に偏りながら4層は中央が窪む。骨片が出土した6層には上層でみられた黄褐色砂質シルトが混じらない单一の土層であった。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は5層から土師質土器の小破片5点が出土した。6層では遺構の南東から、裏面に円形の圧痕がある板状木製品(19)と、その下部から木片が付着した方を上にした銭貨1枚(20)と5枚が発見された銭貨(21)が出土した。また、骨片も出土し、判明した部位は頭骨(B67-1)、内耳孔(B67-2)であり、出土骨片の総重量は26.6gであった。骨片には被熱の痕跡がないため、上葬墓と判断した。

時期 出土した銭貨に「寛永通宝」(古寛永)(21)とともに「寛永通寶」(新寛永)(20)があるため、1778年以降と判断した。

S T 13 (第17図)

検出状況 B 4グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T 14、S T 15、S T 16、S K 46を切る。

検出時は南東側の平面形が梢円形を呈する黄褐色砂質シルト範囲(2層)と北西側の方形状を呈して内面に繊維が露出している黒褐色砂質シルト(1層)の範囲を分けたうえで、前者を擾乱と想定した。さらに後者は切られていると判断して掘削を始めた。1層を掘削すると擾乱と想定した埋土の下に、3・4層など同一遺構内と考えられる埋土が判明したため、両者を同一遺構と判断して掘削した。

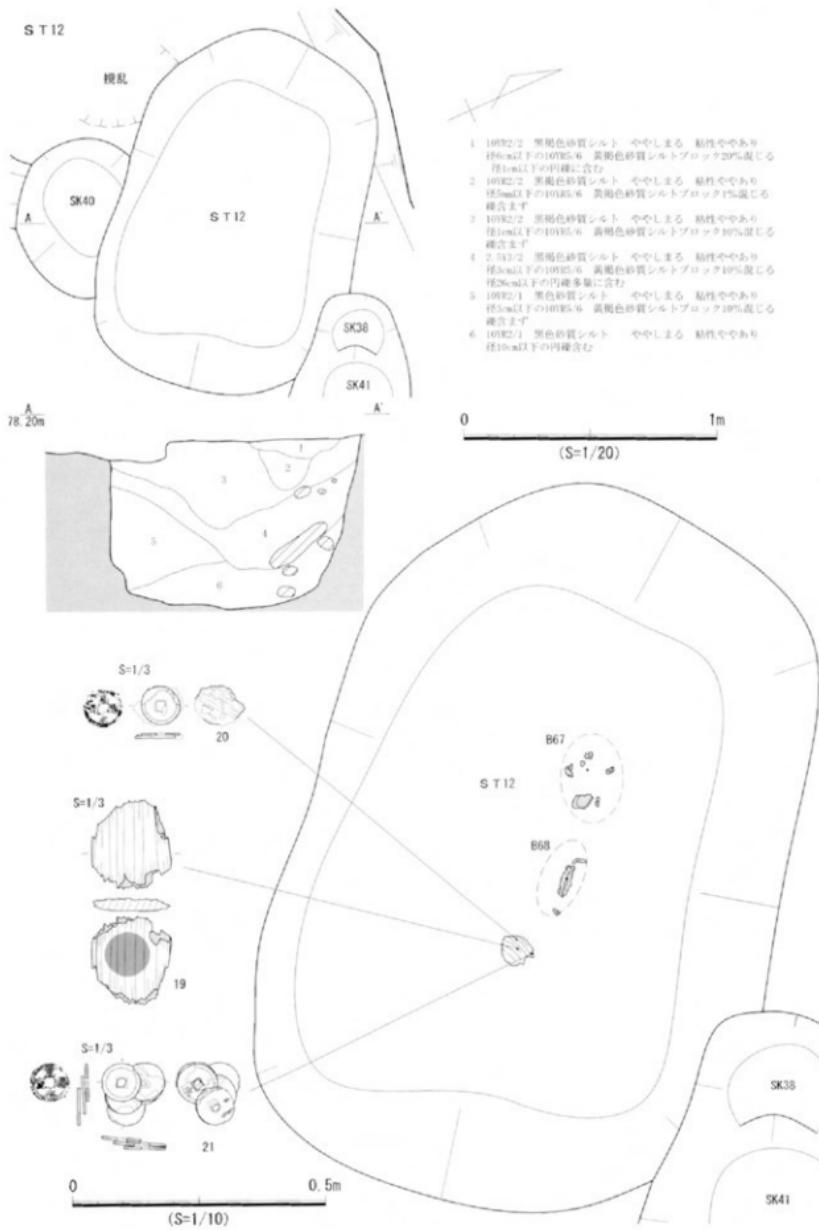
形状・方位 平面形は隅丸方形で、長軸1.31m、短軸1.07m、深さ0.83m、主軸方向はN-42°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の埋土は垂直に立ち上がる。底面は北西側に傾斜し、V層を0.13m掘り込む。埋土は南北方向から交互に埋めたような堆積で、そのうち上面の2層は埋土全体が黒褐色系であるのに対し、黄褐色系の埋土である。5~8層では各層内に砂質シルトの混じり土が含まれず、8層では繊維が混入しない。

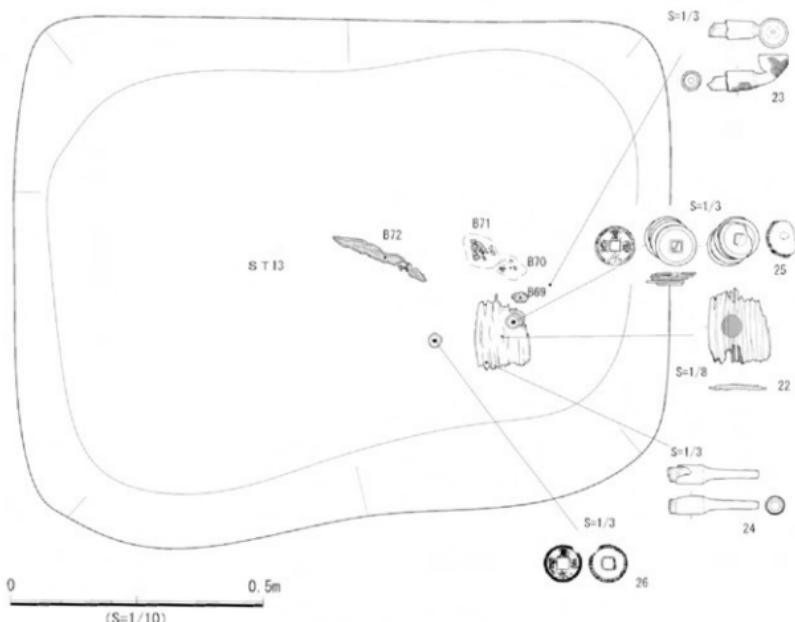
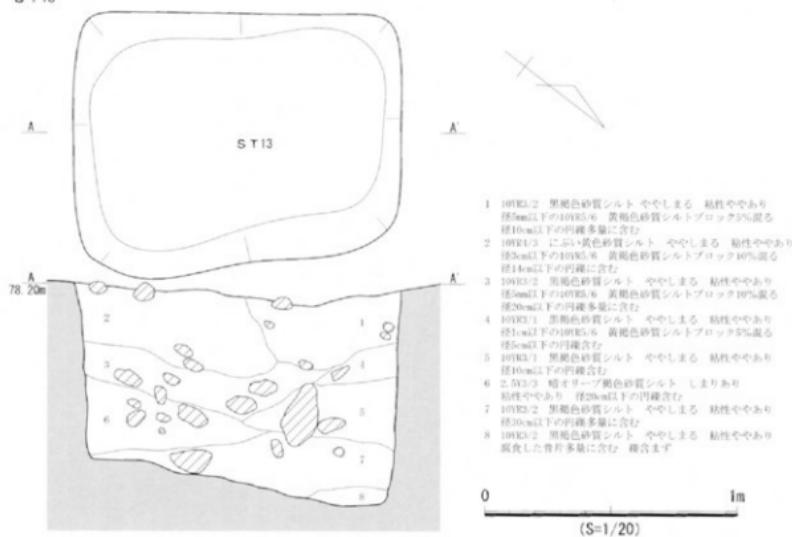
遺物出土状況・埋葬状況 遺物は1層から土師質土器の小破片1点、3層から脇の島期の白瓷系陶器碗片1点が出土した。7層で雁首(23)が、8層で板状木製品(22)、吸口(24)、銭貨1枚(25)と6枚重ねの銭貨(26)が出土した。骨片は北西側に集中し、判明した部位は頭骸骨の側頭骨底部(B69)1点、側頭骨(B70-1)1点、歯槽骨(B71-1)1点、歯(B71-2)6点、長管骨(B72)3点で、出土骨片の総重量は16.8gであった。すべて被熱の痕跡が認められなかったことから上葬墓と判断した。頭骸骨の脇には板状木製品があり、その上から銭貨(26)が出土した。また、吸口は出土時には木片が確認できず取り上げたが、煙管よりも6cm深い位置にあって板状木製品の脇から出土している。板状木製品の表面に円形の圧痕が認められ、銭貨(25)の痕跡の可能性が高い。

時期 出土した銭貨(25,26)で判読できたのが「寛永通宝」(古寛永)であるが、出土した煙管(23,24)の形態及びS T 12との遺構の共通性から18世紀以降と考えられる。



第16図 遺構図 7 (S.T.12)

S T 13



第17図 遺構図 B (S T 13)

S T14（第18図）

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T13に切られ、S K46を切る。検出時は北西側に分布する黄褐色砂質シルト系の埋土の範囲と、S T13に切られる南東側の黒褐色系の埋土の範囲で分けた上で、前者を搅乱と想定し先行して掘削した。黄褐色系埋土を取り除くと、下面から大量の大型礫が現れ、礫間には混じり上がありIVb層内の礫と明らかに異なる様相であった。隣接する後者の埋土を再度精査すると黄褐色系の埋土（1、3層）を確認できたので、想定していた搅乱と遺構が同一遺構と判断できた。前者を搅乱と考え、先行して掘削したため、長軸方向で土層断面の記録を作成できなかったため、短軸方向で記録した。

形状・方位 平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.18m、短軸1.14m、深さ0.72m、主軸方向はN-47°-Wである。

集石状況 2層と北西面の埋土内に礫が集中する状況を確認した。

掘方・埋土 掘方の壁面は、北西側がオーバーハングしたのち垂直に立ち上がり、南東側は垂直に立ち上がる。底面は平坦であり、V層を0.09m掘り込んで、S T13よりやや浅い。また、掘方掘削の際にIVb層内の円礫が多く抜き取られたことにより、底面が広がっている。埋土は黒褐色系の2層以外は黄褐色系の埋土が中心である。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は出土しなかった。遺構の特徴が隅丸方形で、壁面が垂直、底部までの掘削がV層に至るなどS T12やS T13と共に通する点から土葬墓と判断した。

時期 S T13に切られること、遺構内の一角に黄褐色系埋土と多量の礫が含まれる搅乱のような埋土を設定する点でS T12・S T13と共に通することから時期差は小さいと考えられ、18世紀以降と判断した。

S T15（第18図）

検出状況 B 4～5 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T13とS T17に切られ、S T16を切る。検出時は上面に礫が殆どない黒褐色系埋土の範囲で輪郭を決定した。

形状・方位 平面形は全体が検出できていないため、不明瞭であるが、円形に近い形状と考えられる。長軸1.40m、短軸1.00m、深さ1.17m、主軸方向はN-30°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は垂直な立ち上がりで、底面はV層を0.33m掘り込んでいるためS T15よりも深い。底面は平坦である。1～3層内には大型礫が多量に含まれていたが、下面の4～5層では1～3層に比べて少くなり、層内に砂質シルトの混り上もない。

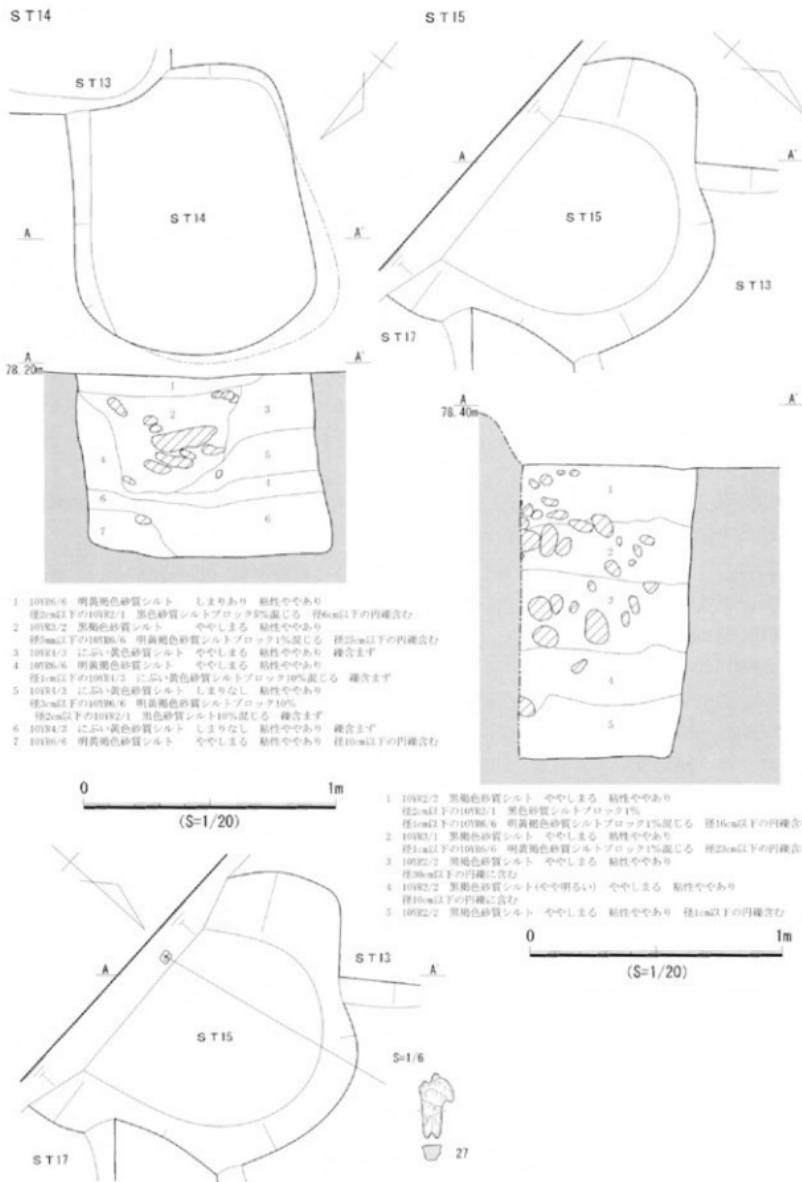
遺物出土状況・埋葬状況 遺物は1層から土師質土器の小破片2点と南側壁面で用途不明の木製品(27)が出土した。遺構の特徴が壁面が垂直で、底部までの掘削がV層に至るなどS T12やS T13と共に通する点から土葬墓と判断した。

時期 S T13とS T17に切られていることと、円形の平面形で深く直立した壁面の掘方であることから、18世紀中頃と判断した。

S T16（第19図）

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。S T13、S T15に切られる。検出時は上面の黒色砂質シルトの埋土が明瞭に確認できた。

形状・方位 S T13、S T15に切られているため全容は不明である。大半を失っているため、本来の



第18図 道構図9 (ST 14, 15)

形状はS T13と重複する可能性が高い。残存する法量は、長軸0.29m、短軸0.20m、深さ0.66m。主軸方向は一部しか残存していないため不明である。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は垂直な立ち上がりである。僅かに残存した底面は平坦で、IVb層下面まで掘り込んでいる。S T15などよりも浅い。埋土は1層の黒色系、3層の黄褐色系以外は黒褐色系埋土が中心である。下層の4～5層は礫が少ない。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は出土しなかった。S T14、S T15などと同様、壁面が垂直で火葬墓と比べても掘削が深い特徴から土葬墓と考えられる。

時期 S T15に切られること、掘方壁面が直立であるがやや浅いことから17世紀中頃から18世紀前半と判断した。

S T17（第19図）

検出状況 B 4～5グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。検出面から見える礫の一部とその周囲の暗褐色系の埋土の範囲とした。

形状・方位 円形に近い形状。長軸1.68m、短軸0.69m、深さ0.87m、主軸方向はN-40°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦でV層直上まで掘り込んでいる。1～3層上面までは大型礫が多量に含まれているが、3層は上面に比して下面から極端に少なくなる。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は3層内から、香炉（28）1点と金属製品（29）1点、先端が輪状の金属製品（30、31）が出土した。骨片は出土していないが、遺構の壁面が垂直、底部までの掘削がV層に至る点などS T12やS T13と共に共通する点から土葬墓と判断した。

時期 出土した香炉が江戸後期の美濃連房窯製であることから、18世紀中頃以降と判断した。

S T18（第20図）

検出状況 B 4～5グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。搅乱に遺構の約半分を削平される。検出では、搅乱の底面で確認した黒褐色系の埋土の範囲を遺構とした。

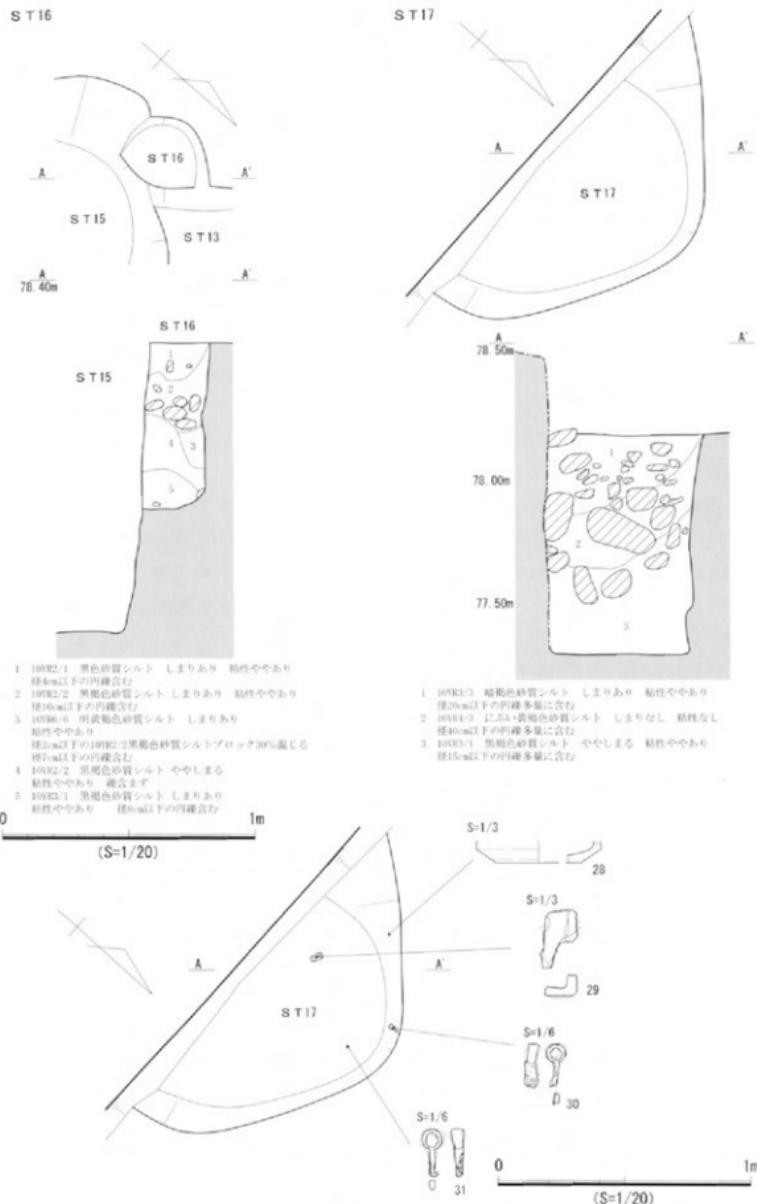
形状・方位 平面形はやや歪つな円形で、長軸1.11m、短軸1.01m、深さ0.82m、主軸方向はN-5°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

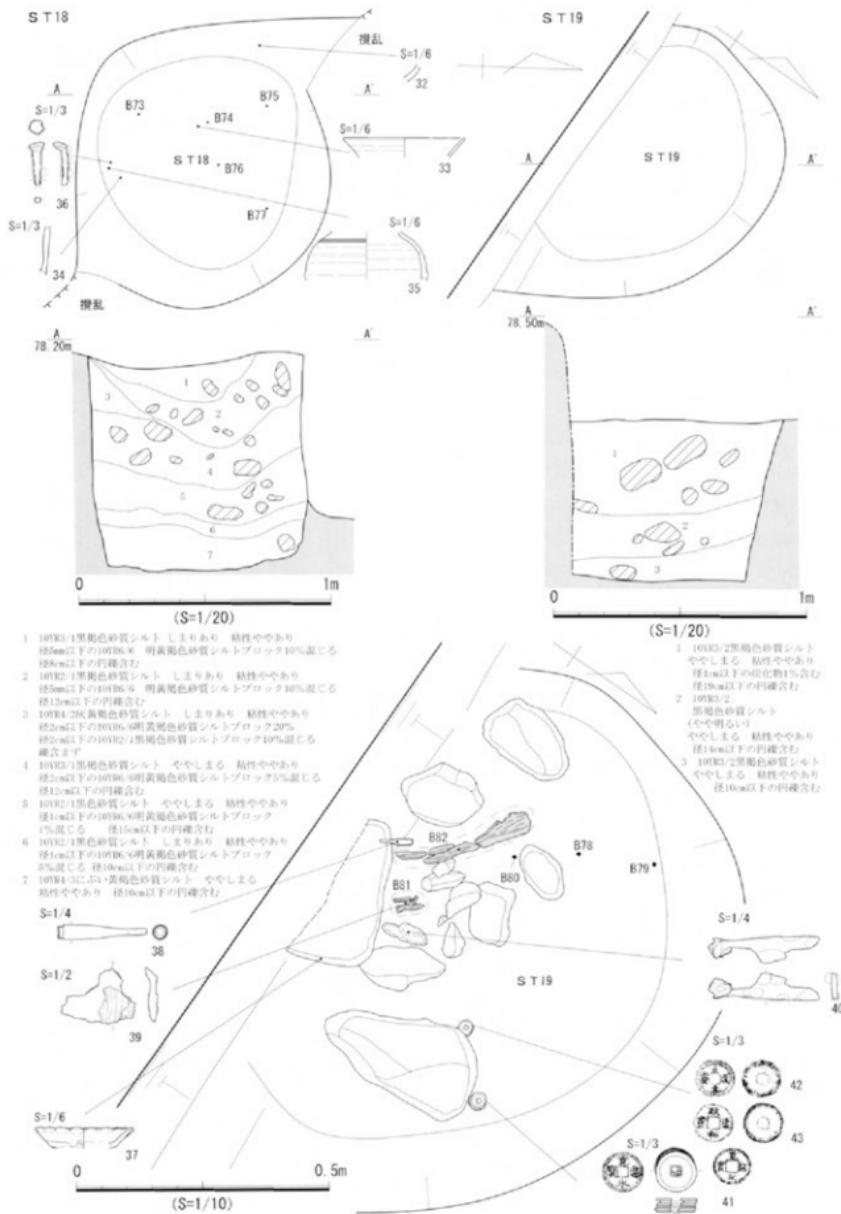
掘方・埋土 掘方の壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦でV層を0.11m掘り込んでいる。全体に中央が埋む堆積状況で上部に多くの礫があり、6～7層では上層に比して少なくなる。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は1層から近世の碗（32）、2～5層内で土師質土器の小破片8点、4層から連房式登窯第8小期の腰錆碗（34）と鉄釘（36）1点、7層から明和～大畠大洞期の白瓷系陶器碗（33）と古瀬戸後III～IV期の壺または瓶（35）が出土した。骨片は6～7層にて出土し、判明した部位は尺骨の上部（B73）、中部（B76）、下部（B74、B75）である。出土した骨片の総重量は9.7gで全て火葬骨であった。

なお、当遺構は壁面が垂直、底部までの掘削がV層に至るなどS T12やS T13と共に共通する点から土葬墓と考えられるが、この遺構から出土した骨片は火葬骨であることに課題がある。火葬骨が出土した原因については、元々火葬墓があった場所を掘削して土葬墓を造り、埋め戻しの際の埋土にした可能性がある。その傍証として出土土器は2時期以上が認められることがあげられる。このように考えると、誠失した火



第19図 遺構図10 (ST16、17)



第20図 造構図11 (ST 18, 19)

葬墓の年代については、骨片と併に出土した古瀬戸が関連するとして15世紀中頃の可能性が考えられる。

時期 S T18の年代については、出土した腰詰碗から18世紀中頃以降と判断した。

S T19（第20図）

検出状況 B 5 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。

形状・方位 検出範囲では平面形が円形に近い形状である。長軸1.19m、短軸0.89m、深さ0.65m、主軸方向はN-25°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は急な立ち上がりで上面がやや広がる。底面は平坦でV層を0.07m掘り込んでいる。土層は1～3層まで同一埋土と思えるほど差がなく、礫の大きさや含有率、僅かな色調の差で分層した。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物では1層から生田2号窯式の白瓷系陶器碗2点と大窯第3段階の反皿(37)1点、調査区壁面から突き出た礫の上から吸口(38)1点が出土した。2層上面からは骨片が出土した。判明した部位は外耳孔(B79)1点と歯(B78-1)1点である。骨片の総重量は19.5gであった。全て被熱していないことから土葬墓と判断した。また、骨片の中から用途不明の金属製品(39)1点が出土した。3層の遺構底面から火打金(40)1点と長さ33cm、幅18cmの大型礫の脇から、7枚組の錢貨(41)と2枚組の錢貨(42,43)が出土した。種類が判別できた錢貨(41)は「寛永通宝」(古寛永)と「寛永通宝」(新寛永)各1枚、42は「至道元寶」、43は「政和通寶」であった。

時期 S T19の年代は、出土した錢貨で最も新しい「寛永通宝」(新寛永)により18世紀後半以降と判断した。

S T20（第21図）

検出状況 B 5 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。検出時に西側に隣接する溝(近現代の搅乱)の埋土に類似し、遺構中央には砂礫が詰まった円形の搅乱があったため、当初は搅乱と想定した。半截後に土層断面を記録し、北側の掘削作業を進めると、骨片、錢貨が出土したため遺構と判断した。

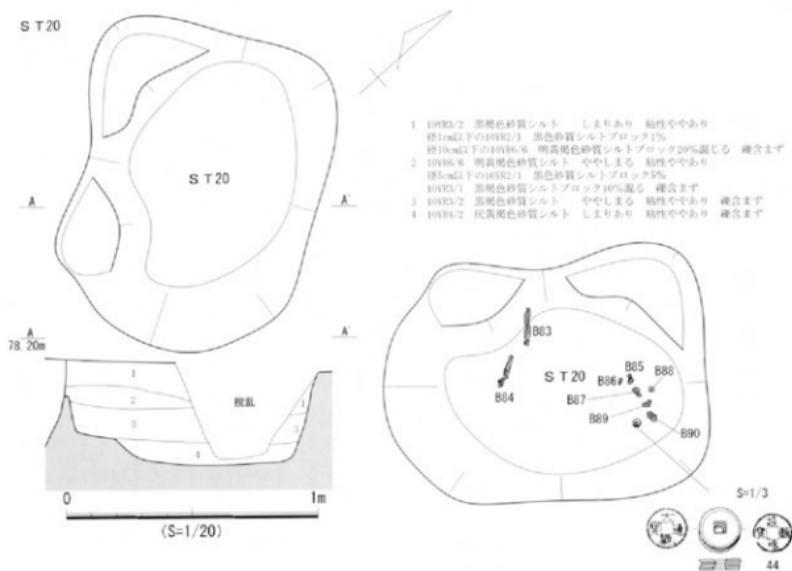
形状・方位 平面形は梢円形に近い橢丸方形である。長軸1.29m、短軸0.93m、深さ0.40m、主軸方向はN-35°-Wである。

集石状況 集石は確認できなかった。

掘方・埋土 掘方の壁面は急な掘り込みで上面が広がる。底面はIVb層を0.12m掘り込んでいる。底面からやや段差をもつて平坦面が、西側にのみ見られ、北東側では、IVb層内の礫が露出しているため底面に凹凸が認められる。上面は黒褐色砂質シルトが主体で、最下層の4層のみ灰黄褐色砂質シルトになる。

遺物出土状況・埋葬状況 遺物は4層から土師質土器の小破片1点と被熱の痕跡のない骨片が出土した。骨片のうち判明した部位について、歯ではB85-2が3点、B86が2点、B88が1点、B90が1点、下顎骨(歯槽)(B85-1、B89-1)で各1点、上腕骨(B83-2とB83-4)2点、肩甲骨(B83-1)1点、尺骨または桡骨(B84-1)1点である。底面の北東部からは6枚組の錢貨(44)が出土した。

時期 錢貨では12世紀前半の北宋錢「大觀通宝」、「政和通宝」と判読できるが、この錢貨は16世紀代の堺において模倣錢の型が出土しているため、そのまま年代として捉えることはできない。北宋錢が出土した他の土葬墓との遺構の特徴などからの年代も考えて、16世紀頃から「寛永通宝」が流通していない17世紀前半の可能性が高い。



第21図 遺構図12 (S T20)

2 溝状遺構 (SD) SD 1～SD 7 (図22、23)

SD 1 (第22図)

検出状況 B7～8グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK57を切り、SK59～62に切られる。検出時は、昭和58年度の発掘調査にて確認された南東から北西に平行して延びる2条の溝の東側の溝の続きと考えられる。

規模・方位 検出した長さ5.25m、幅1.14m、深さ0.26m、主軸方向はN-55°-Wである。

掘方・埋土 断面は半円形で底面は丸みを帯びる。埋土は黒褐色砂質シルトが主体で、下面ほど明黄褐色砂質シルトブロックの率が高くなる。なお、遺物は出土しなかった。

時期 昭和58年度の調査の記録によると、東西両溝の出土遺物を一括で取り上げている。この遺物を全て再検証したが近現代遺物や出土記録は存在しなかった。また江戸後期の遺物が最も多く、新しいものでは連房式登窓第3段階第10～11期の片口や鉢、端反皿などの江戸末期であることが確認できた。昭和58年度の調査の東側の溝は西側の溝の切られること、今回の調査で西側の溝が近現代溝であることが判明したことと、SD1出土遺物から少なくとも江戸後期まで遡れる可能性が高いと考えられる。

SD 2 (第22図)

検出状況 B12グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK111、SK116を切り、SK110、SK118に切られる。試掘確認調査TP3で確認された溝状遺構と明治時代に制作された地籍図の地割から検出位置は事前に確認できた。検出時のSD2は既に後世の整地等で上面は擾乱され、溝の底面が僅かに確認できる程度であった。

規模・方位 検出した長さ4.58m、幅0.66m、深さ0.06m、主軸方向はN -40° -Wである。

掘方・埋土 断面は逆台形で底面は平坦。埋土全体では黒褐色砂質シルトであるが、明黄褐色砂質シルトに黒褐色、黄褐色、黒色砂質シルトのブロックが混じる場所も見られる。

遺物出土状況 遺物は江戸前期の瀬戸産摺鉢(45)の破片1点が出土した。

時期 出土遺物から江戸前期以降と判断した。

S D 3 (第23図)

検出状況 A17グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。

規模・方位 確定した検出遺構の規模は、長さ2.05m、幅0.71m、主軸方向はN -37° -Eである。

断面は逆台形で底面は平坦、遺構北部が約2cm高い。検出面からの深さは0.11mで北部壁面では最大0.18mある。

埋土 埋土は中央が窪むように堆積し、黒褐色砂質シルトを中心に黒色や黄褐色砂質シルトがブロック状に混入していた。溝底面には基盤層に含まれる自然石上部が2箇所で露出しているもの、埋土そのものに疊は含まれていなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 明治時代の地籍図と位置・方位がほぼ一致することから、明治時代以前と考えられる。

S D 4 (第23図)

検出状況 A19～B19グリッドに位置する。SD 5を切る。IVa層上面で検出した。

規模・方位 長さ2.53m、幅0.58m、深さ0.04m、主軸方向はN -34° -Wである。

掘方・埋土 溝の底面はやや丸味があり、断面半梢円形に近い。底面は遺構北部が高い。断面は浅い台形で埋土は黒褐色土の単層であった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 明治時代の地籍図と位置・方位がほぼ一致することから、明治時代以前と考えられる。

S D 5 (第23図)

検出状況 A19～B19グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SD 4に切られる。

規模・方位 長さ2.55m、幅0.56m、深さ0.25m、主軸方向はN -37° -Wである。

掘方・埋土 断面は逆台形に近く底面に平坦部分がみられる。埋土は黒色土を中心に黒褐色土や黄褐色土がブロック状に混じっていた。SD 5はSD 3と断面形状や埋土などが類似しており、両者を北へ延長した場合に北西4m付近で直角に屈折して連続する同一の構の可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

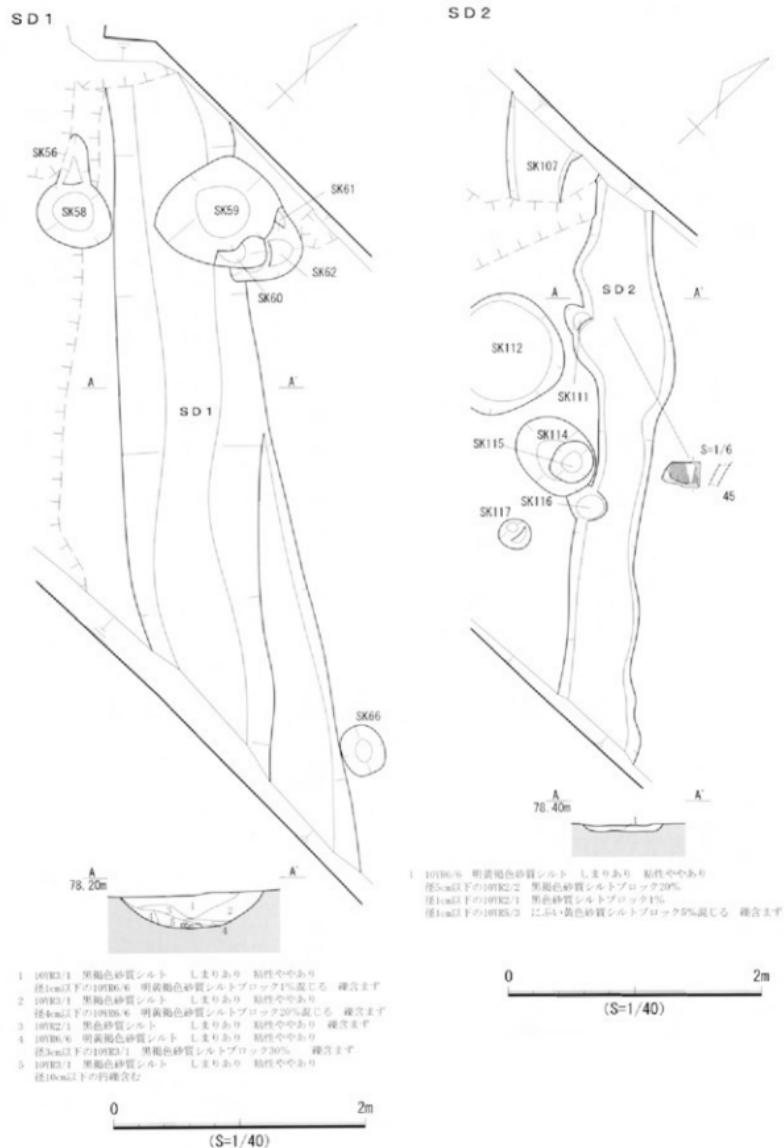
時期 明治時代の地籍図と位置・方位がほぼ一致することから、明治時代以前と考えられる。

S D 6 (第23図)

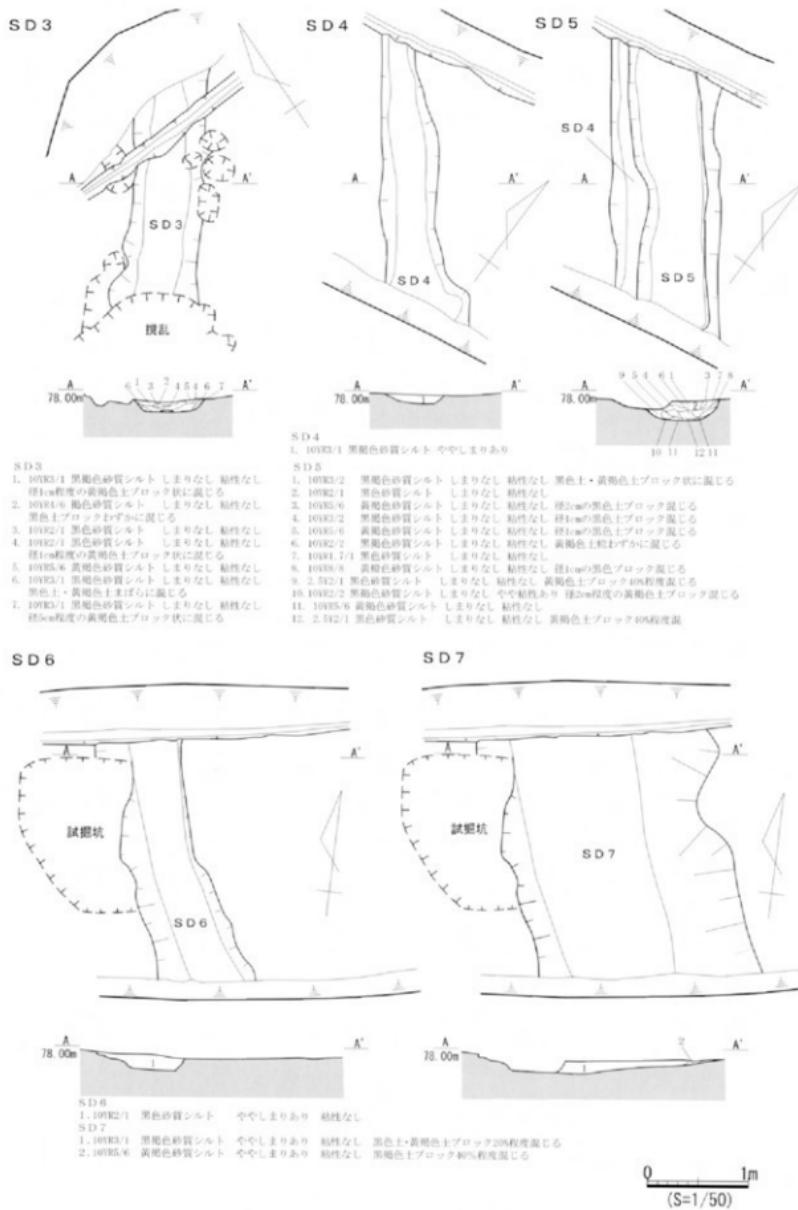
検出状況 A19～20グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SD 7を切る。後世の耕作による影響と、擁土等により埋土はわずかしか残らず、本来の上端は不明である。したがって検出は調査区北壁と南壁の状況及び検出面にわずかに残る遺構埋土により判断した。

規模・方位 検出した長さ2.47m、幅0.90m、深さ0.16m、主軸方向はN -20° -Wである。

掘方・埋土 西壁面は東壁面に比べ緩やかに傾斜する。埋土は単層で、溝底面にはIVb層に混入する自然石が多数露出する。



第22図 遺構図13(SD 1、2)



第23図 遺構図14 (SD 3~7)

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 明治時代の地籍図と位置・方位がほぼ一致することから、明治時代以前と考えられる。

S D 7（第23図）

検出状況 A20グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。西側をほぼ平行に延びるSD 6に切られる。

規模・方位 検出した長さ2.43m、幅2.10m、深さ0.13m、主軸方向はN-17°-Wである。

掘方・埋土 西部はSD 6に切られて不明であるが、東部は壁面が緩やかに傾斜し平坦な底面に連続する。南部の底面に窪みがあり、北部と比べて最大0.08m低い。調査区南側壁面で僅かにラミナ状の水平堆積の痕跡を確認した。SD 4・SD 5と比べると14~17度ほど方向が北へ向く。埋土は単層でSD 4に極めて近いが、黄褐色土ブロックを混入する点で異なる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 明治時代の地籍図と位置・方位がほぼ一致することから、明治時代以前と考えられる。

3 井戸（S E） S E 1（第24図）

検出状況 調査区B 3グリッドに位置する。ST 4、ST 5を切る。遺構上には幅約0.35m、深さ約0.4mの溝状の搅乱が南東から北西方向に貫く。搅乱底面で円形にまとまる集石を発見した。

掘方・埋土 搅乱の底面と同じレベルで円礫を検出した。集石は2層上面に集中し上面に大きめの礫、下面に従い小さくなる。2層下面から3層にかけて礫はほとんどみられなかった。円形の平面形で、堀方の壁面は南側壁面がややオーバーハングしてから垂直に立ち、北側壁面は急な立ち上がりである。底面はやや凹凸が認められるが基本的に平坦である。地下水脈が流れる層と考えられるV層を0.24m掘り込んでいることから井戸と判断した。集石については、地下水面上より上であるため浄化用ではなく、井戸を破壊した時に投入したものと考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 江戸前期のST 6を切っていることから、近世前期以降と考えられる。

4 構造（S A）

S A 1（第24図）

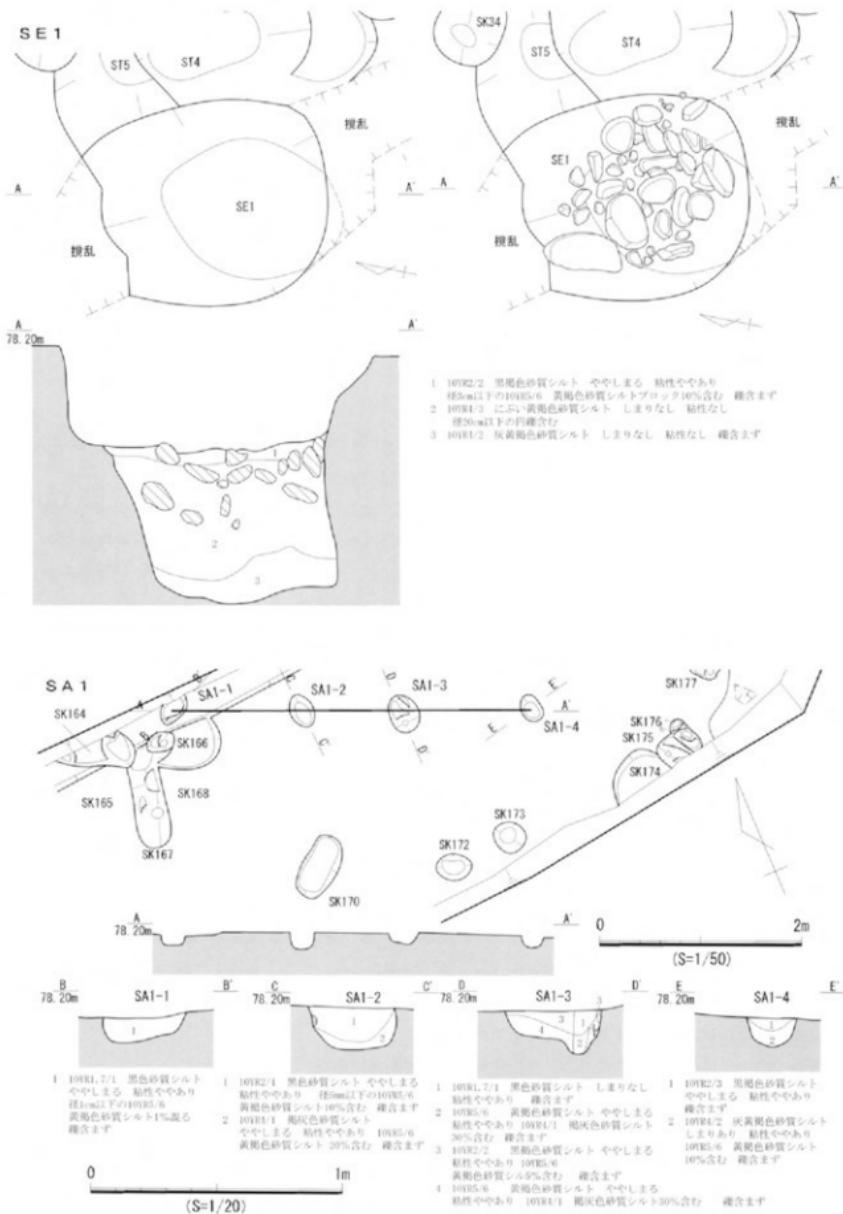
検出状況 A 15~B 16グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。個別の遺構掘削中、4基の小穴が一直線上に並んでいることを確認した。

形状・方位 SA 1-3の埋土にのみ柱痕跡がみられるが、それ以外には認められない。底面の柱あたりの痕跡もみられなかった。主軸方向はN-68°-Wである。また、SA 1は確認できた範囲で全長3.55mあり、SA 1-1からSA 1-2までが1.28m、SA 1-2からSA 1-3までが1.07m、SA 1-3からSA 1-4までが1.20mである。

埋土 埋土は単層~4層まであり、黒色砂質シルトが主体である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 当地域の地割りの方位より、やや東西方向に近い。時代的には新しい可能性も考えられる。



第24図 造構図15 (S E 1, S A 1)

5 土坑（SK）（第25・26図）

SK36（第25図）

検出状況 B 3 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。ST 6 に切られる。

形状 平面形は円形に近い。

掘方・埋土 掘方の壁面は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。埋土は単層で黒色砂質シルト層である。

出土遺物 遺構中央に円礫が1点埋設されていた。礫の側面下部から底面にかけて被熱の痕跡を確認した。

時期 ST 6 に切られるので、江戸時代前期以前である。

SK41（第25図）

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。ST 12 を切り、SK38に切られる。

形状 平面形は楕円形に近く、底面は平坦である。

掘方・埋土 緩やかな掘り込み、埋土は上層が黒褐色、下層は灰黄褐色砂質シルト層である。

出土遺物 1層上面から突き出た状態で銭貨（46）1点が出土した。

時期 出土した銭貨は11世紀前半の北宋錢で「天聖元宝」（1023）と判読できる。この銭貨も埠において模鉄錢の型が出土しているため、そのまま年代として捉えることはできない。18世紀代のST 12 を切ることから、それ以降と判断した。

SK43（第25図）

検出状況 B 4 グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。SK42に切られる。

形状 平面形は方形に近く、底面は平坦である。

掘方・埋土 掘方の壁面は急角度で立ち上がる。埋土は上層が黒褐色、下層は灰黄褐色砂質シルト層である。

出土遺物 江戸時代後期の筒型香炉（47）の破片が出土した。

時期 出土した遺物から江戸時代後期以降と判断したい。

SK53（第25図）

検出状況 B 5～6 グリッドに位置する。IVa層上面にて検出した。

形状 楕円形に近く、底面は平坦である。

掘方・埋土 掘方の壁面は急な角度で立ち上がる。埋土は上層が黒褐色、下層は褐色砂質シルト層である。

出土遺物 上層からロクロ挽きの土師器皿（48）が出土した。

時期 48が1層からの出土であるが、確証は低いが16世紀頃と判断したい。

SK179（第26図）

検出状況 B 16 グリッドに位置する。IVa層上面にて検出した。攪乱で東半が滅失しているが、検出は容易であった。

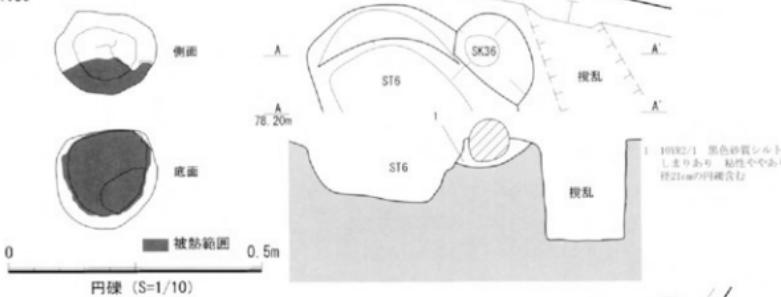
形状 方形に近く、底面は平坦である。

掘方・埋土 垂直に掘り込まれる。埋土は全体に黒褐色砂質シルト層が主体である。

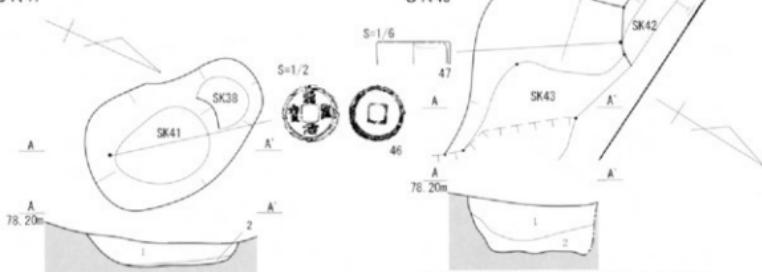
出土遺物 上面から脇之島2号窯式の白瓷系陶器碗の小破片が出土した。

時期 白瓷系陶器碗の小破片は混入と考えられ、時期は不明である。

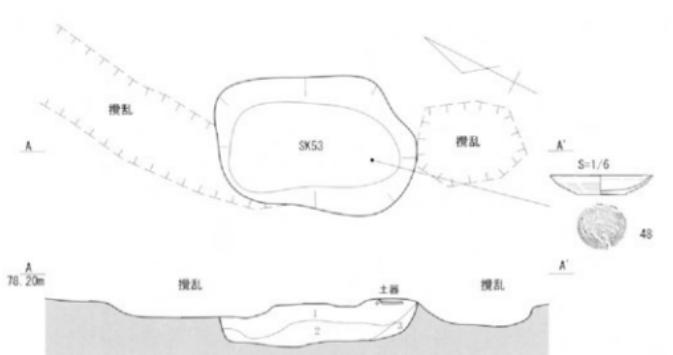
SK36



SK41



SK53



第25図 遺構図16 (SK①)

S K182（第26図）

検出状況 東部A18グリッドに位置する。遺構上面は耕作による搅乱を受けていたが、これを除去した上で検出した。

形状 平面形は隅丸方形を呈する。長軸方位はN-37°-Eで、隣接するSD3とほぼ同じ方向である。

掘方・埋土 遺構壁面が僅かに検出面より抉られ、壁面から底部へは丸味をもち、底面は平坦である。1層が黒褐色土、2層は黒色土と黄褐色土の混土で堆積が南側に偏る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 不明である。

S K187（第26図）

検出状況 A18・B18グリッドに位置する。

形状 平面形は梢円形である。

掘方・埋土 掘方の壁面は北東方向が緩やかで、南西方向は急な立ち上がりである。埋土は黒褐色砂質シルトのほぼ単層で、中央部に黄褐色砂質シルト層が若干堆積する。

出土遺物 遺構検出面から登窯Ⅸ～Ⅹ期の柳茶碗底部（49）1点が出土した。

時期 1層から出土した柳茶碗から、江戸時代後期と判断する。

S K203（第26図）

検出状況 C3グリッドに位置する。IVa層上面にて検出した。ST2・3の検出面拡張に伴って検出したが掘削範囲の限度であったため、これ以上拡張はできず全容は不明である。

形状 検出部分の平面形が直線的であるため、隅丸方形の可能性がある。

掘方・埋土 掘方の西側壁面は緩やか、東側は急な立ち上がりで、底面はIVa層下面まで達する。2層から5～10%の焼土ブロックを確認した。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 ST3と同様の焼土ブロックを埋土に含むことから、ST3と比較的近い時期の15世紀後半の可能性がある。

S K204（第26図）

検出状況 調査区B3グリッドに位置する。IVa層上面で検出した。南側のSK19を切る。検出面から大型礫が突出し、黒褐色の埋土で検出は容易であった。しかし、近似する埋土のSK19との先後関係の判断を誤り、後者を先行して掘削した。

形状・方位 窒んだ梢円形で、主軸方向はN-30°-Wである。

集石状況 遺構外周と中央部に礫が充填されない部分が見られる。また、北側の集石は下面に小礫があり、その上に大型礫が積まれる。南側は大型礫が並んでいる。

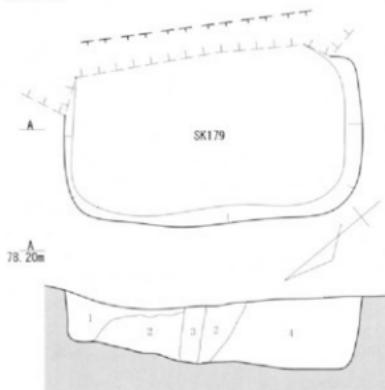
掘方・埋土 壁面は急な掘り込みで中央が大きく座む。埋土は黒褐色系が主体で、最下層のみ褐灰色砂質シルトが充填されている。

出土遺物 埋土から遺物は出土しなかった。

時期 不明であるが主軸方向が地割の影響を受けているため、17世紀代の土坑墓の可能性もある。

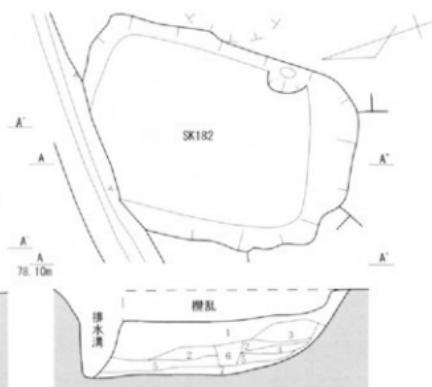
1) 今渡では、「鳩吹山(七田城跡、南西方向)の天候状況を見ることで先の天候を予測する」というほど、常に西(南西)風が吹く。

SK179



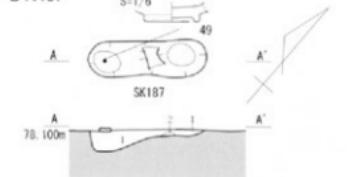
1. 10R1.7/1 黒色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり
厚さ6cm以下の10R1.6 黄褐色砂質シルト5%混じる 緯合ます
2. 10R1.7/1 黒色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり
厚さ5mm以下の10R1.6 黄褐色砂質シルト40%混じる 緯合ます
3. 10R1.7/1 黒褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
4. 10R1.7/6 黄褐色砂質シルト粒子多くて混じる 緯合ます
5. 10R1.7/1 黒色砂質シルト しまりなし 粘性ややあり
厚さ6cm以下の10R1.6 黄褐色砂質シルト構成比で30%混じる 緯合ます

SK182



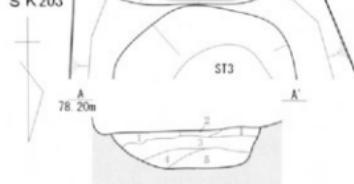
1. 10R1.7/1 黒褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし 側面全体で黄褐色砂質シルトプロックを含む
2. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりなし 粘性なし
3. 10R1.7/2 黑褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし
4. 10R1.7/1 黑褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし
5. 10R1.7/2 黑褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし
6. 10R1.7/1 黑褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし
側面から下にかけて黄褐色砂質シルトプロック多量に混じる
7. 10R1.6 黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし

SK187



1. 10R2.2/2 黄褐色砂質シルト ややしまるあり 粘性なし
2. 10R1.6 黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし

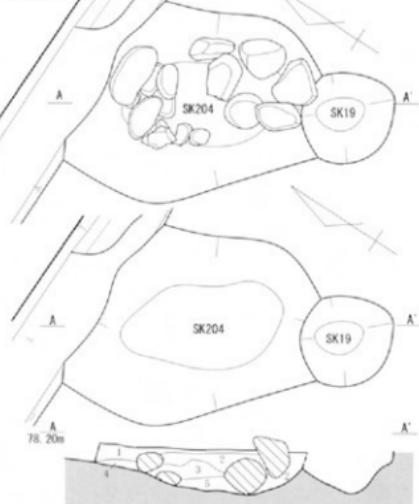
SK203



1. 10R1.6 黄褐色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
厚さ3cm以下の10R2.1 黑色砂質シルトプロック10%混じる 緯合ます
2. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
厚さ5mm以下の10R1.6 明赤褐色土ブロック(地土)10%混じる 緯合ます
3. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
明赤褐色土ブロック(地土)10%混じる 緯合ます
4. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
長さ5cm以下幅10cm以下の10R1.6 黄褐色砂質シルトプロック30%混じる 緯合ます
5. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりあり 緯合ます

0 1m
(S=1/20)

SK204



1. 10R2.2 黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり 緯合ます
2. 10R2.2 黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり
明赤褐色土の10R1.6 黄褐色砂質シルトプロック5%混じる 緯合ます
3. 10R1.7/1 黑色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
明赤褐色土ブロック(地土)10%混じる 緯合ます
4. 10R2.7 黑色砂質シルト しまりあり 粘性ややあり
厚さ2-6cm以下の10R1.6 黄褐色砂質シルトプロック10%混じる 緯合ます
5. 10R1.1 黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性ややあり 緯合ます

第26図 遺構図17 (SK-2)

第4節 遺物

1 遺構内出土遺物（第27～29図）

S T 1 （第27図）

1は丸皿で大窯3段階後半期に生産された完形品である。内面の釉薬が一方に厚くたまり、底面には輸トチを剥がした痕跡が残る。16世紀後半と考えられる。2は篆書による北宋錢「元豐通寶」(1078)で裏面は無文である。文字の磨滅も少なく錢厚が極めて薄い特徴から、16世紀に多量に生産された堺型模鈔錢の可能性が考えられる。

S T 2 （第27図）

3は錢貨の6枚組みの銅錢が癒着した状態のものである。表裏とも裏面であるため、種類は不明である。積み重ね状態は整っているが、紐の痕跡は確認できなかった。

S T 3 （第27図）

4と5は白瓷系陶器碗で、生田2号窯式である。4は口縁部から体部まで的小破片である。5の内面は灰かぶり部分と自然釉が付着する部分が半分ずつある。

S T 4 （第27図）

6は美濃窯登窯の耳付水注である。頸部付近から肩部までの小破片で内外面に鉄釉が掛かる。江戸時代前期と考えられる。7は土鍋で底部から体部下のみで外面全体に煤が付着する。底面には尖足の剥がれた痕跡が残る。

S T 6 （第27図）

8は白瓷系陶器碗の口縁部の小破片で焼成は良好、薄手である。大洞東～脇之島2号窯式に比定できる。

S T 9 （第27図）

9は白瓷系陶器小皿で底部付近の小破片である。底部内面から体部に至る間に小さな屈曲がみられる。脇之島2号窯式に比定できる。10は古瀬戸の壺または瓶である。体部中央からやや上部付近と考えられる小破片で、外面は鉄釉が掛かり、内面下部には回転ナデ調整による段が見られる。古瀬戸後III～IV期に比定できる。

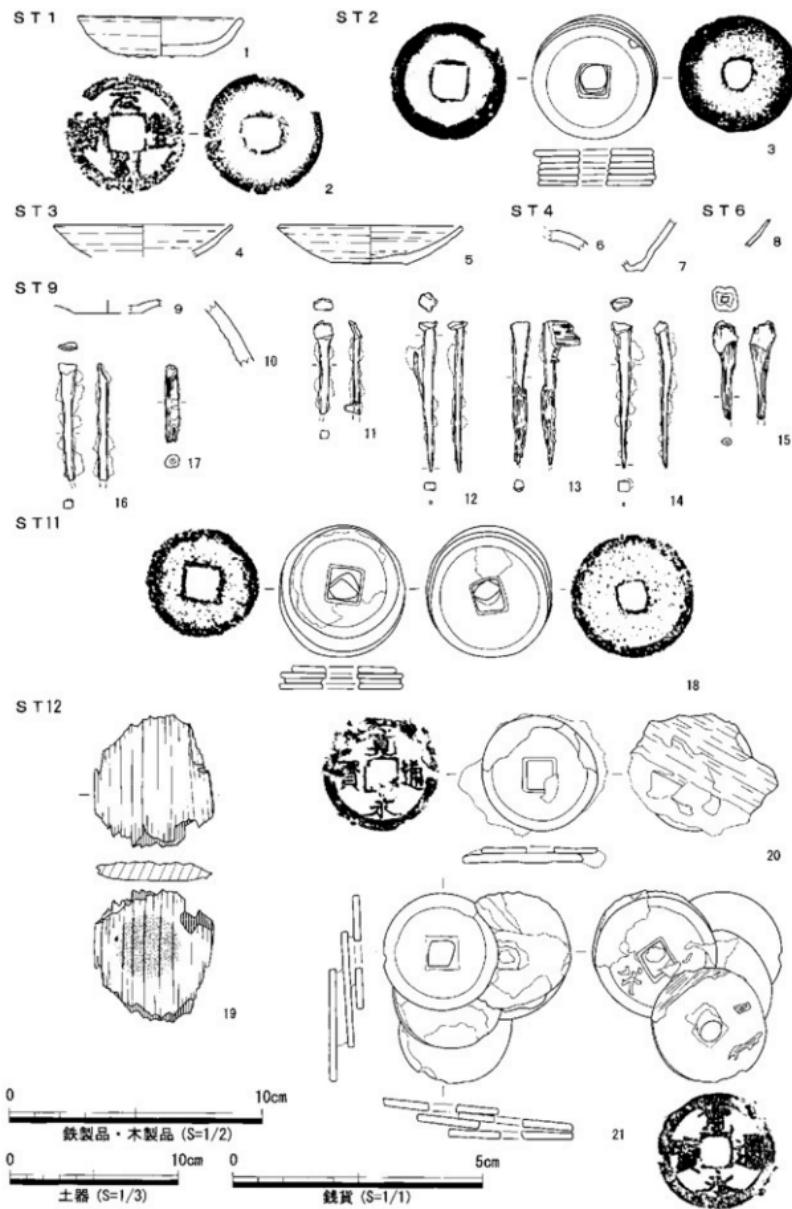
11～17は鉄釘である。S T 9の四隅から出土した。11は平らに延ばした釘頭の屈折が弱く、12の釘頭は皿状を呈する。13は釘頭と釘中央から先までに木質が残存し、14は釘頭が皿状を呈する。15は釘全面に木質が付き、先端まで腐食による中抜けで空洞化している。16は釘頭が皿状、17は全体を木質が覆い、上下端部が欠損している。断面形は、11～16が角型で、17は円形に近い。

S T 11 （第27図）

18は錢貨4枚組の銅錢が癒着した状態のものである。裏面であるため錢種不明である。なお紐の痕跡は確認できなかった。

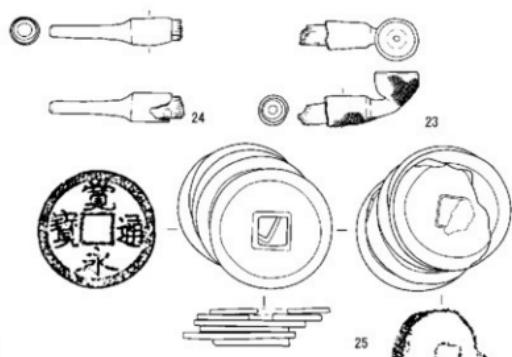
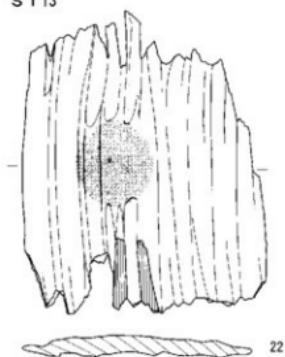
S T 12 （第27図）

19は板状木製品で周辺が破損しているため元の形状は不明で、裏面には錢貨の痕跡と考えられる凹形の圧痕が認められる。20は錢貨で表面には鋸がないため「寛永通寶」(新寛永)と判読できる。僅かに磁石に反応する。裏面は鋸で覆われ木質が付着している。21は5枚重ねの錢貨で、1枚のみ「寛永通寶」(古寛永)

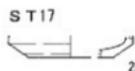


第27図 遺構出土遺物 1 (ST)

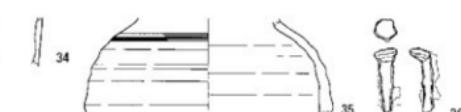
S T 13



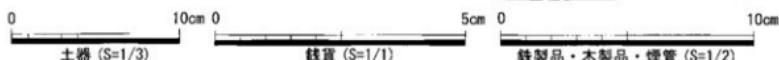
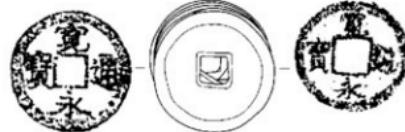
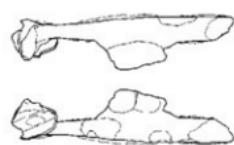
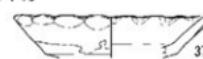
S T 15



S T 18



S T 19



第28図 遺構出土遺物2 (S T)

S T 13 (第31図)

22は板状木製品で、表面に銭貨の痕跡と考えられる円形の圧痕が見られる。23は雁首、24は吸口で一体と考えられる煙管である。内側に竹製の羅宇も残存する。雁首の外面に布目が確認でき、袋状の入れ物に収納されていたと考えられる。雁首と吸口は肩の段差が明瞭でなく一体化に近い形状から18世紀代と判断した。25は銭貨で、6枚の重なりが少し崩れた状態で接着する。銭貨の穴からは紐の痕跡は確認できなかった。26は25より一回り小さい銭貨である。2点とも「寛永通寶」(古寛永)である。

S T 15 (第31図)

27は全面の腐食が進んで製品の特定はできないため、用途不明木製品とした。木取りは板目で、長さ7.8cm、厚さは4.2cmある。

S T 17 (第31図)

28は美濃産登窯の香炉である。底部から体部下までの破片で、底部から直線的に広がり、体部で垂直に立ち上がる。体部にのみ施釉する。江戸時代後期と考えられる。29はし字に曲がる形状で用途不明の金具である。30、31は一枚の板状の鉄板から製作されたもので、一方に輪を作りつつ先端同士を貼り合わせている。30は先端の合わせ目がずれる。31は釘のように打ち付けて先端を折り曲げて返りを付けたと考えられる。2点とも金輪から下に木質が残り、その板の厚さは金具の形状から約2cmと考えられる。同規格の金具と考えられ、2つ一组で使用したならば、長持本体と取手を繋ぐ金具の可能性が考えられる。

S T 18 (第31図)

32は美濃産登窯の碗である。33は白瓷系陶器碗の口縁部から体部にかけての破片で扁平気味である。明和1号窯式～大畑大洞4号窯式に比定できる。34は美濃登窯第8小期の腰錆碗の体部片である。35は肩部の破片で壺または瓶であり、古瀬戸後III～IV期に比定できる。36は先端部が欠損している釘で、釘頭は平らに延ばして折り曲げてある。

S T 19 (第31、32図)

37は反皿である。底部と体部の間に明瞭な屈曲があり、体部から口縁部まで直線的に立ち上がる器形である。口縁端部は内側から指で押し出して波状に成形し、内面全面と外面の体部上半まで鉄軸が掛かる。大窯第3段階後半期に比定できる。38は吸口で咥える部分上面が平坦になっている。内部に竹製の羅宇が残存する。肩の部分が一体化する特徴から18世紀中頃以降に比定できる。39は骨片の中から出土した用途不明の金属製品で、形状は凸形、板状で薄い。40は火打金で全体が錫で覆われている。41は7枚組の銭貨で表裏面は「寛永通寶」「(古寛永)」と「寛永通寶」「(新寛永)」である。重なりは崩れておらず、紐の痕跡は確認できなかった。42、43は銭貨で2枚重なって出土し、接着していなかった。42は草書による「至道元寶」(995)、43は篆書による「政和通寶」(1111)である。

S T 20 (第32図)

44は6枚組の銭貨である。両面の状態は、篆書による「大觀通寶」(1107)と「政和通寶」(1111)の北宋銭である。重なりは崩れておらず、紐の痕跡は確認できなかった。

S D 2 (第32図)

45は瀬戸産登窯の擂鉢で、体部片である。内面には11本単位の櫛目を施す。櫛目の中央部分には横位に使用痕が観察できる。江戸時代前期に比定される。

S K41 (第29図)

46は銭貨である。篆書による「天聖元寶」(1023)である。

S K43 (第29図)

47は美濃窯登窯の筒形香炉で、口縁部から体部上面までの小破片である。口縁上面は平坦で、内側のみ丸身を帶びた突起が形作られる。体部内面以外を施釉する。

S K53 (第29図)

48は士師器皿で全体をロクロ挽きで成形したものである。底面に回転糸切痕が残る。内外面ともナデ調整するが、外面はヘラ削りをしているため複数の段がみられる。底部と体部との境は明瞭で体部中程で器壁が内傾し、口縁部は僅かに外反する。東濃地方では中世後半の15世紀からロクロ挽き上師器皿が出現する。具体的な時期は不明だが、15世紀以降と考えられる。

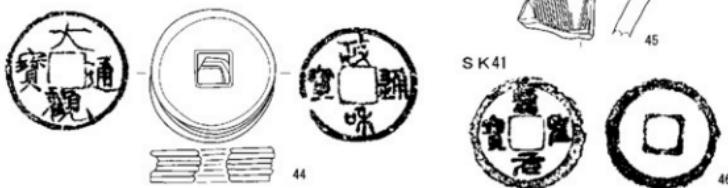
S K187 (第29図)

49は柳茶碗である。底部の1/3と僅かに体部端が残る破片である。器形は半円形である。底部の高台は削出で端部の角を調整している。内面全面に灰釉を施す。連房式登窯第3段階第8～9小期に比定できる。

S T19



S T20



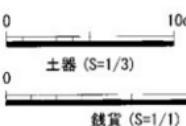
S K43



S K53



S K187



銭貨 (S=1/1)

第29図 遺構出土遺物3 (S T・S D・S K)

2 挖乱坑・遺物包含層出土遺物（第30～32図 図版9～11）

須恵器（第30図）50

50は須恵器の甕で体部の細片である。表面に叩き目が見られる。

土師器皿（第30図）51～53

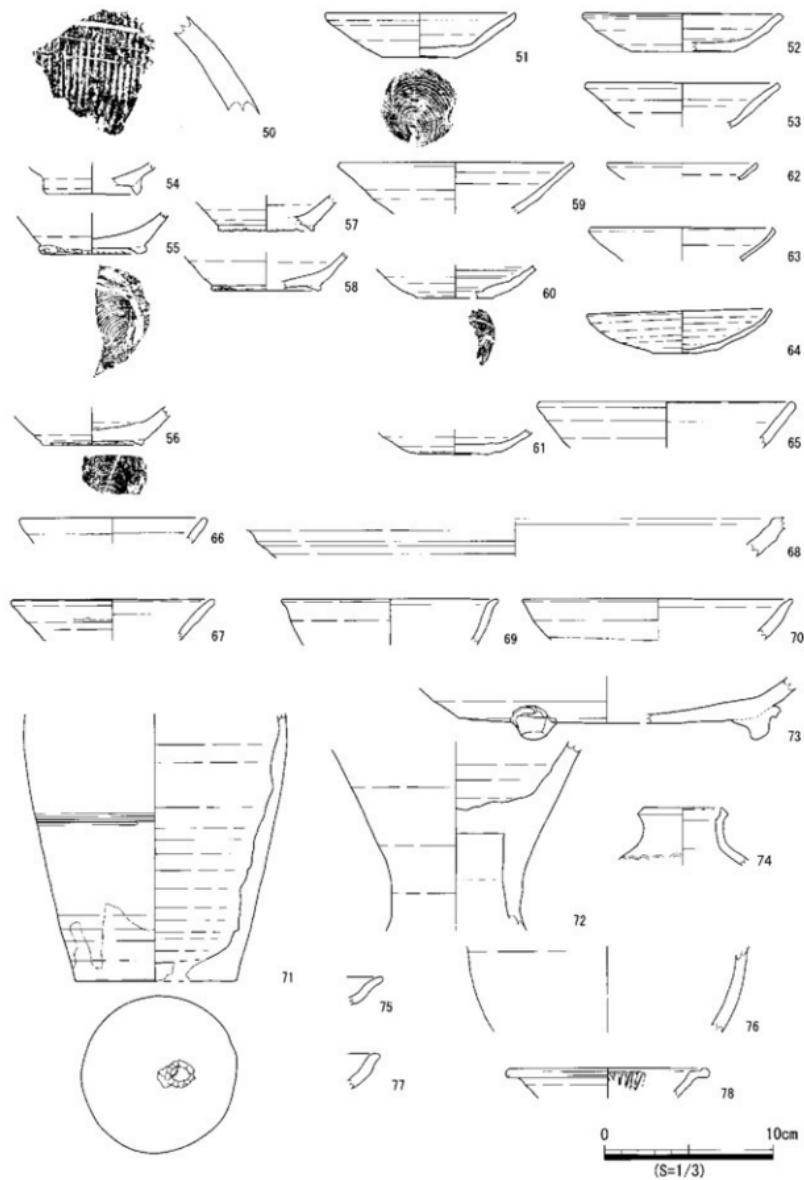
51～53は土師器皿で全体をロクロ挽き成形したものである。内外面ともナデ調整される。51、52の底面には回転糸切痕が残る。形状は底部から体部へ直線的に伸び、口縁部先端は丸身を帯びる。52は底部内面と体部との境はなだらかで、51と53には屈曲が見られる。時期は不明である。

白瓷系陶器（第30図）54～65

54は底部端の高台付近の一部のみ残存する碗である。高台は底面端部をややはみ出しながら直立気味に付く。体部と底部の器厚はほぼ同じである。浅間窯下1号窯式に比定できる。55は底部1/2に体部の一部が残存する碗で、底部は中央がやや薄いが全体的に扁平で厚手である。高台は少し外へ張り出すなど接合面積が広い。外面には体部にナデ調整痕と底部に回転糸切痕、内面にナデ調整痕がある。56は底部1/5に体部の一部が残存する碗で、底部は扁平で厚手である。高台はやや慣れて外へ少し張り出している。内面の底部から体部の境に僅かに突起が見られる。体部の外面にナデ調整痕、底部には回転糸切痕と板目状压痕、内面にはナデ調整痕がある。丸石3号窯式に比定できる。57は底部端の高台付近の一部が残存する碗で、高台は接合面が広く、やや外面へ張り出す。窯洞1号窯式に比定できる。58は碗底部端の高台付近の一部で外面に自然釉が付く。高台はやや外に張り出し、底面の器厚は中央に向かって薄くなる。内面には静止ナデの痕跡が残る。白土原1号窯式に比定できる。59は口縁部から体部までが残存する碗で、内外面に僅かにコテナデ痕が認められ、器厚は全体に薄い。60は底部から体部の一部が残存する碗で、内面の体部と底部の境には明瞭な瘤みがある。内外面にコテナデ痕が認められる。高台はない。61は底部全面と体部が一部残存する碗で、高台の痕跡はなく、底面内面の体部との境に僅かな瘤みが見られる。59～61は脇之島2号窯式に比定できる。62は口縁部から体部が残存する小皿で、器厚は口縁部の肥厚に対して底部近辺の体部が極端に薄い。63は口縁部約1/6と体部が残存する碗で、口縁部内面にコテナデ痕が見られる以外は全体に滑らかである。口縁端部にナデ調整がある。64は碗のほぼ完形である。全体に丸みを帯び、内外面にロクロ目が顕著に付く。口縁部内面には明瞭な一段の屈曲が見られ、底面内面の中央が瘤む。62～64は生田2号窯式に比定できる。65は口縁部から体部までの碗の小破片である。口縁部から体部までは一定の厚みがあり、東濃産に比べ厚みがあり胎土が粗い。内面にのみ自然釉が付着する。南部系第5型式に比定できる。

古瀬戸（第30図）66～75

66は縁釉の小皿で、口縁部の細片である。口縁部に灰釉の漬掛けがあり、体部から口縁部へ緩やかに開く器形である。古瀬戸後III期に比定できる。67は直線中皿の口縁部片で、内外面に鉄釉を施す。古瀬戸後III期～後IV期古期に比定できる。68は折縁深皿の口縁部片で、口縁端部が欠損しているが折り返しによる影響で、内面に膨らみと外面上に小さなくびれが確認できる。内外面には灰釉を施す。古瀬戸後III～IV期に比定できる。69は端反碗の口縁部片で、口縁端部が外反し、体部は丸みを帶びて底部に至る。内外面に灰釉を施す。古瀬戸後IV期古期に比定できる。70は平碗で、口縁付近の細片である。体部の屈曲部分まで灰釉を施す。口縁は肥厚し口縁直下がわずかに折れる。古瀬戸後IV期古期に比定できる。71は底部から体部上面まで残存する梅瓶（瓶子II類）で、古瀬戸後IV期古期に比定でき



第30圖 撥亂坑・遺物包含層出土遺物 1

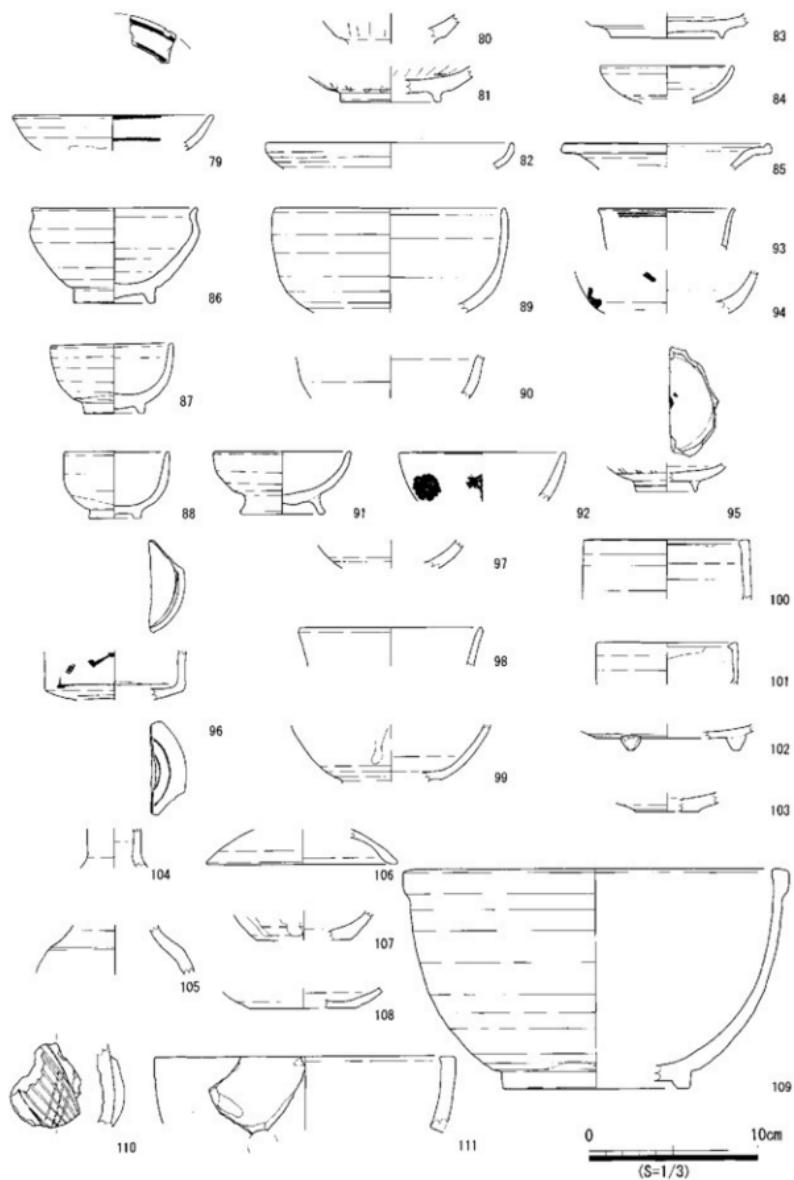
る。体部中程には3条1組の沈線が横位に巡る。外面にのみ釉薬を掛け流す。底面に外部から細かく突きながら穿った径1.5cmの穴がみられ、この影響で内面は器厚の中程から全体の半分が剥離している。穿孔があることから骨壺に転用した可能性が高い。72は縊腰形瓶子である。上・下部分が欠損し腰部のみ残存する。底部内面以外に鉄釉を施す。古瀬戸後IV期古期に比定できる。73は底部に3つの脚が付く盤類で、古瀬戸後IV期に比定される。74は片口小瓶の口縁部から肩部までの破片である。肩部から頸部までは直線的であるが口縁部から屈曲して外反し、先端部分は尖る。肩部には波状文を施す。古瀬戸後期に比定できる。75は腰折皿で、口縁部の破片である。底部から体部まで直線的で口縁部でゆるやかに外反する。古瀬戸後IV期新期に比定できる。

大窯（第30、31図）76～78

76は天目茶碗の体部から口縁付近までの小片である。器厚は体部から口縁にかけて薄くなる。内外面に鉄釉を施す。口縁部や高台がないため細分できないが、大窯第1～2段階に比定できる。77は志野皿の口縁部の破片である。全面に長石釉が掛かる。大窯4期後半期に比定できる。78は折縁皿で、底部から体部まで直線的に開きながら口縁部は直角に屈曲した上で口唇部を丸めている。内面は屈曲した位置から皿中心に向かって円棒状の工具で沈線を全面に施す。大窯4期前半期に比定できる。

登窯（第31図）79～91、93～109

79は鉄絵皿で口縁から体部が残存する。内面にのみ鉄釉による二重の圓線を描く。全面に長石釉が認められる。登窯第1段階第2小期に比定できる。80は菊皿の体部のみの細片である。内面と外側の文様部分まで施釉し、外側には縦位の刻み沈線を引く。81は菊皿の高台から体部下までの破片である。削出し高台の端部は内面から外側へ向けて丸く仕上げる。底部内面は僅かに窪み、体部境から外側に菊の花弁をあしらった文様を施す。80、81は登窯第1段階第4小期に比定できる。82は摺絵皿の口縁部の細片で、口縁先端部で内側に曲げる。施釉は内面全面と外側の口縁部端にある。外側の無釉部分にヘラ削りの痕跡が残る。登窯第2段階第6～7小期に比定できる。83は反皿で高台から底部が残存する。高台は削出高台で外側は深く掘り込み、内面は浅く仕上げる。全面に施釉するため、内外面にトチンが剥離した痕跡が残る。登窯第2段階第5～6小期に比定できる。84は摺絵皿で欠損しているが底面には高台が付き、内面には摺絵が描かれた皿である。登窯第2段階第7小期に比定できる。85は鉄絵皿で、美濃産登窯前期に比定できる。86は天目茶碗である。削出し高台で体部は内彌し口縁部でくびれて外反する。体部外側と内面全面に鉄釉を濁け掛けする。登窯第1段階第4小期に比定できる。87と88は小碗である。美濃産登窯第7小期と第8小期に比定できる。89は尾呂茶碗で登窯第2段階6～7小期に比定できる。90は丸碗で体部下部片である。内外面に鉄釉を施すが、外側下部に無釉との境がある。登窯第2段階第5～7小期に比定できる。91、93は登窯の小碗である。94は碗で登窯第3段階第11小期に比定できる。95は碗類で時期は不明であるが、登窯製品と考えられる。96は箱状湯呑みで体部下半の破片である。底部は下方へ緩やかな丸みを帯び、底部端部から体部へ直角に立ち上がる筒状の器形である。底部高台の痕跡があるが、ほぼ欠損している。呉須絵は底面の内外面に同心円、体部外側には文様を施す。登窯第3段階第9～10小期に比定できる。97は丸碗で体部下部片である。内面に緩やかな丸みを持ち、内外面全面に鉄釉を施す。98は碗の口縁部片で、口縁部端部の外側がやや膨らむ。内外面には灰釉を施釉する。登窯第3段階第8～11小期に比定できる。99は登窯の丸碗で江戸時代中期と考えられる。100、101は筒形香炉である。100は口縁部から体部上半の



第31図 搅乱坑・遺物包含層出土遺物 2

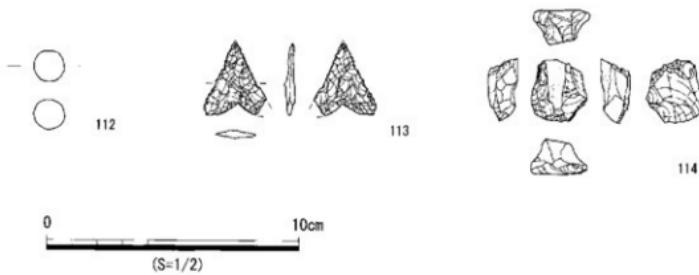
破片で、直線的な形状で口縁部内部に小さな返りが付く。口縁部上面から外面にかけて施釉する。登窯第2段階第7小期に比定できる。101も登窯の製品で江戸時代後期と考えられる。102は香炉で底部の小破片である。無釉で底面には三脚の1つが確認できる。登窯の製品と考えられる。103は瀬戸の灯明皿である。底部内面の輪の突起に特徴がある。江戸時代前期に比定できる。104は徳利の頸部の細片である。鉄釉の縞状の濃淡により、頸部外周には数条のロクロ引きによる産みが確認できる。登窯第3段階第8～11小期に比定できる。105は徳利肩部の細片。外面に灰釉を施釉する。登窯第3段階第10～11小期に比定できる。106は瀬戸美濃の蓋である。107は耳付水注で底部から体部の一部が残存する。底部内面は体部にかけて丸みを持つ。無高台で底部に同軸糸切り痕が残る。外面は銷釉を基調とし、その上から掛けた鉛釉で頼れと釉露ができる。内面も全面に鉛釉を施す。登窯第1段階第1～4小期に比定できる。108は土瓶で、時期等が不明であるが瀬戸美濃産と考えられる。109は片口鉢で、底部から口縁部まで一部が残存する。底部は削出し高台で、底部外面以外の内外面に自然釉が認められる。登窯第3段階第8～9小期に比定できる。

その他（第31図）92、110、111

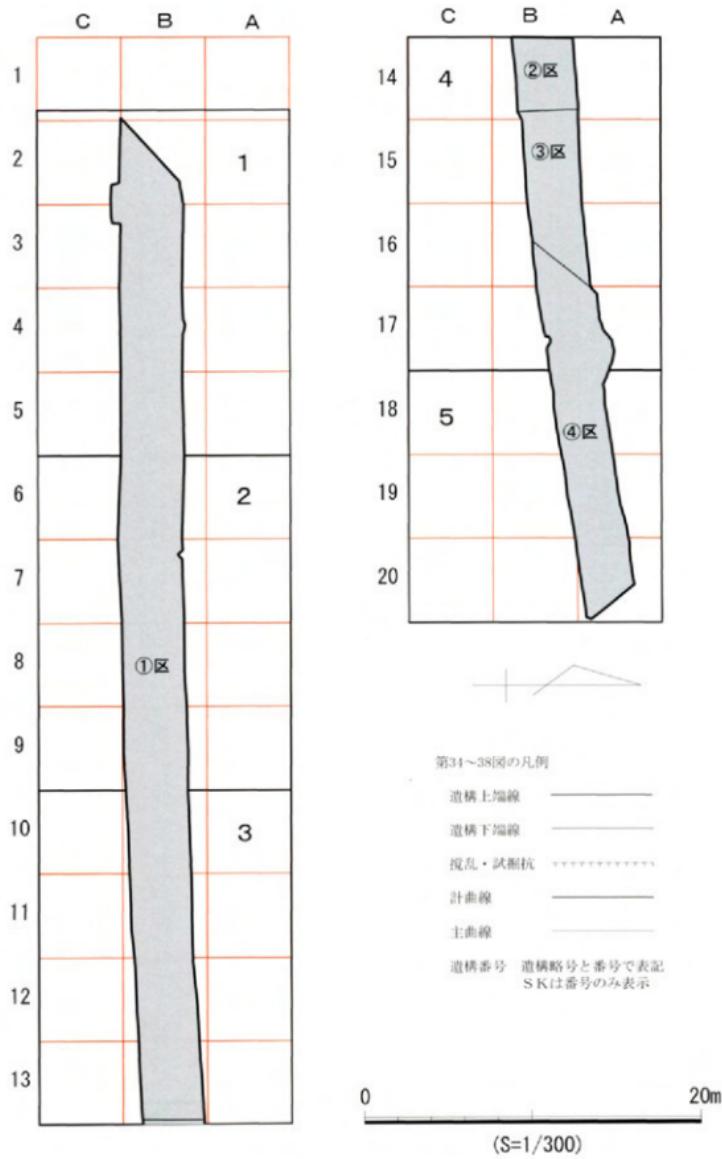
92は江戸時代中期の肥前の小碗である。110は小破片であるため器形は不明であるが、外面の文様から鳥の翼を模した焼き物と考えられる。外面に綠釉を施す。産地、時代は不明である。111は口縁部から体部までの小破片である。口縁部～体部まで器厚は一定であるが、口縁端部の内側に小さな返りが認められる。体部には径2cm程度の風口の穴があり、内面全面に煤が付着する。産地は不明であるが、近世～近代墳の火鉢と考えられる。

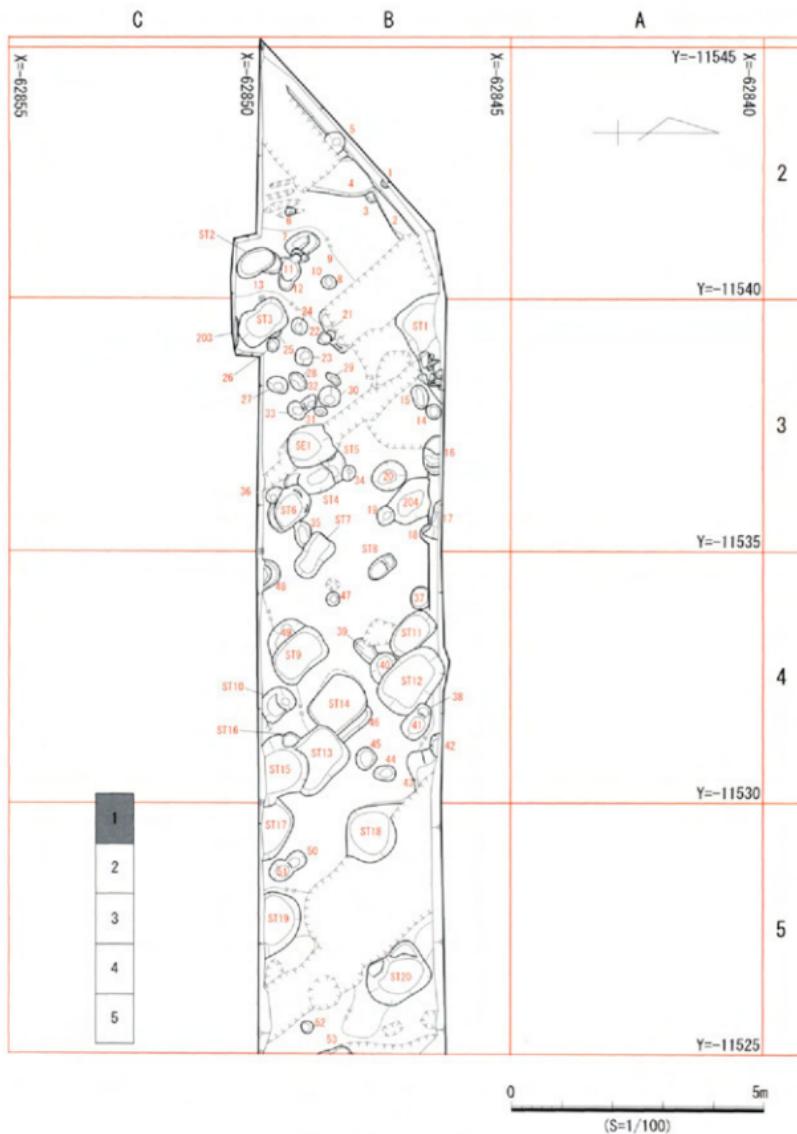
金属製品・石器類（第32図）112～114

112は直径12mmの金属球で重量8.6gある。球体には鋳型の痕跡と思われる帶状の凸部がある。磁石に反応がなく全体に白色の銷が認められることから、火縄銃用の鉛玉であると考えられる。113はチャート製の凹基無茎の石鏃で、両面剥離調整する。114は赤色チャートを呈する石核である。微細な剥離面があり、背面には帯状に自然面が残る。

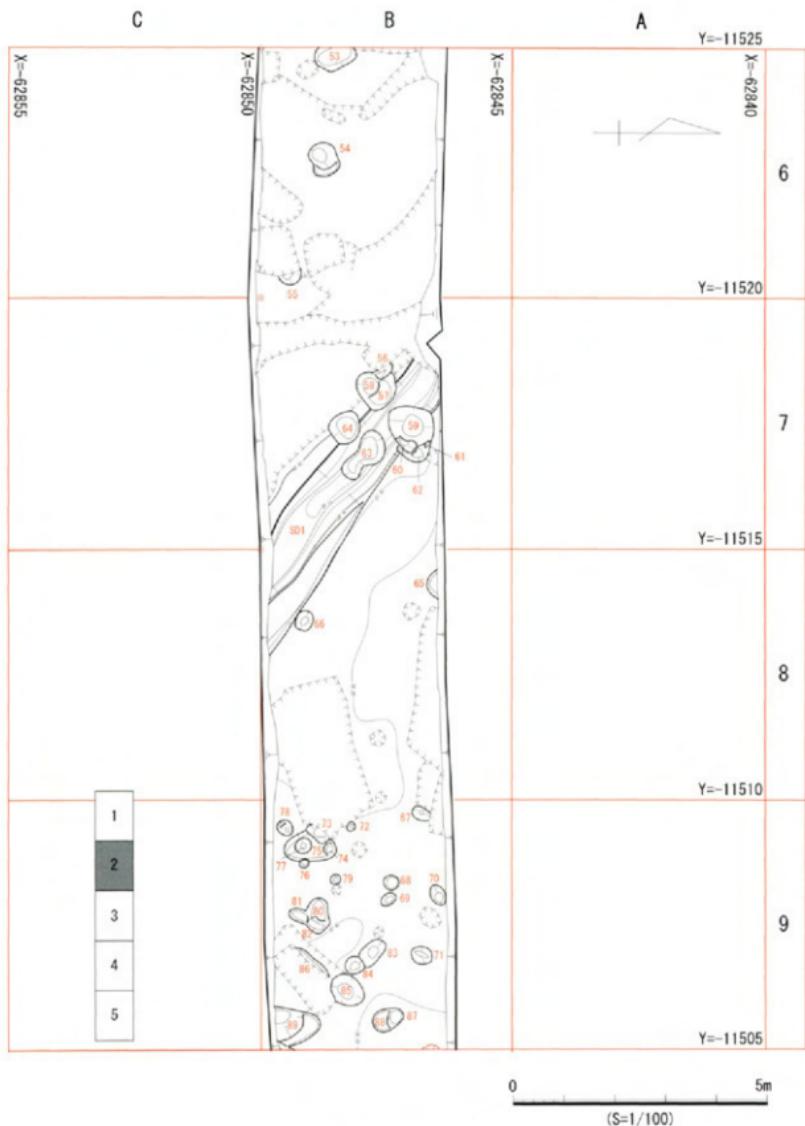


第32図 遺物包含層出土遺物（金属製品・石器）

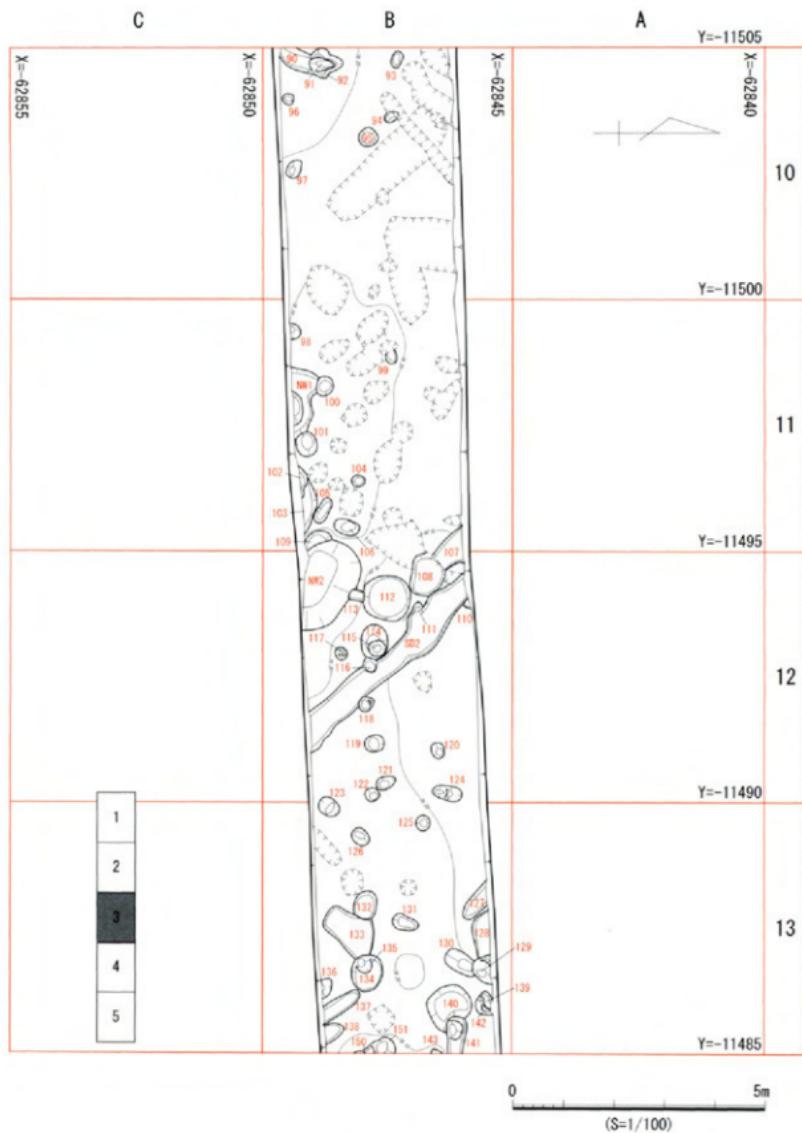




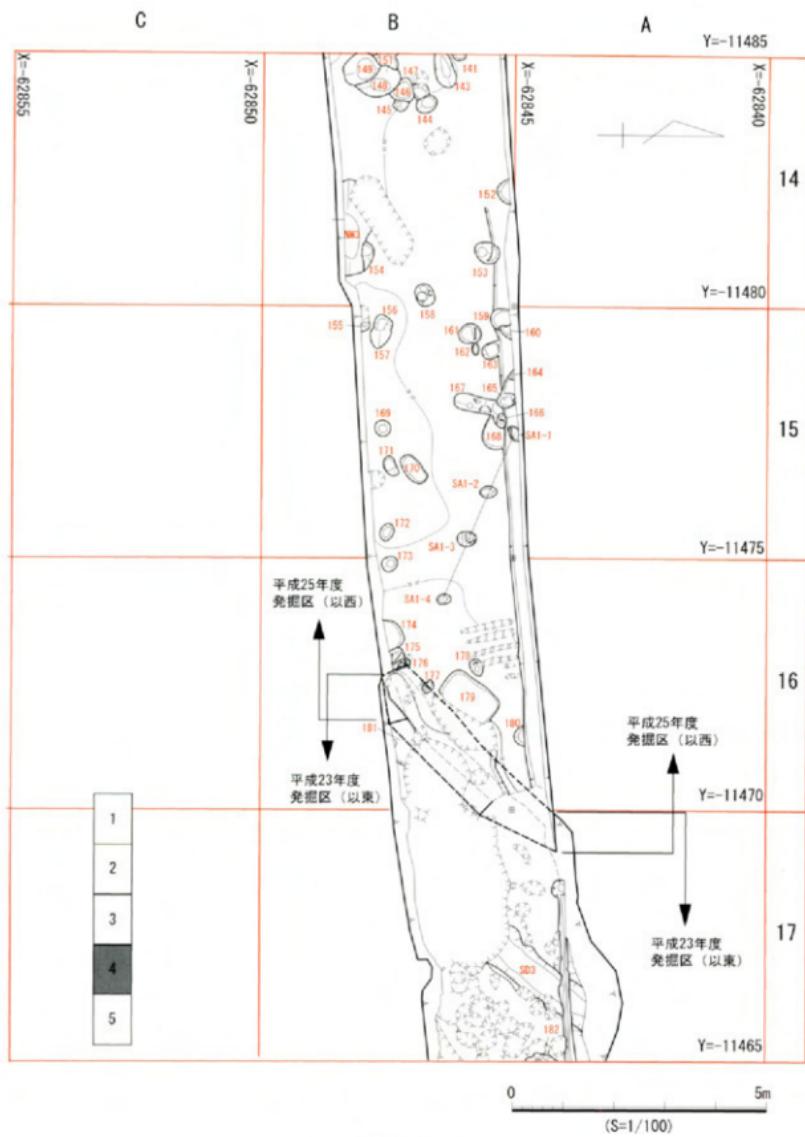
第34図 遺構全体図分割図1



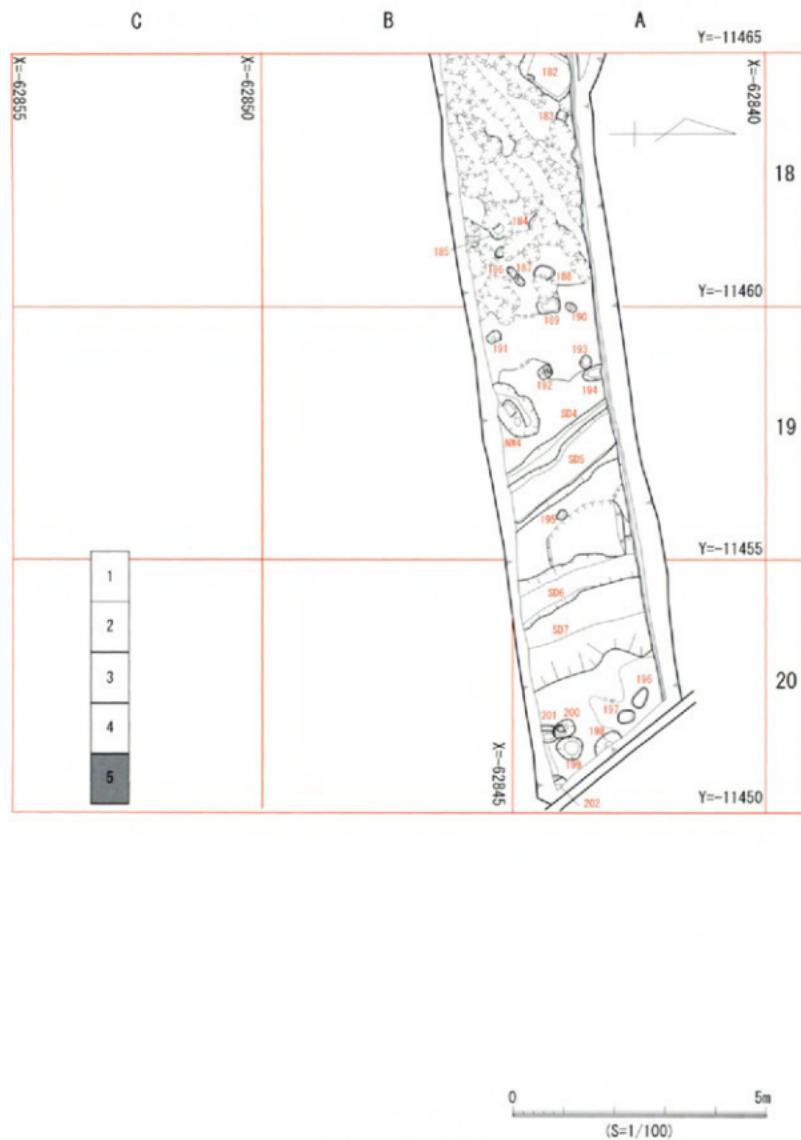
第35図 遺構全体図分割図2



第36図 造構全体図分割図 3



第37図 遺構全体図分割図4



第38図 造構全体図分割図5

第9表 遺構観察表1 (S T)

遺構番号	グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	直面	< (切られる)	> (切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	田柵場番号	備考
ST1	B - 2-3	IV b層上面	a	B	b	b			(1.49)	(1.11)	(0.77)	(0.73)	0.90	5240	土師瓦
ST2	B-C 2-3	IV a層上面	d	B	a	a	SK13		0.92	0.49	0.70	0.39	0.32	5476	土師瓦
ST3	B-C 2-3	IV a層上面	d	I	a	a	SK25		1.04	0.67	0.78	0.58	0.14	5219	火葬墓
ST4	B 3	IV a層上面	d	I	a	a	SE1	ST15, ST26	1.02	0.66	0.43	(0.25)	0.25	5242	火葬墓
ST5	B 3	IV a層上面	c	I	c	c	ST4, SE1, SK34		(0.50)	(0.35)	(0.23)	(0.14)	0.17	5230	火葬墓
ST6	B 3	IV a層上面	c	VI	a	a	ST4, SK35	SK36	0.96	0.74	0.62	0.41	0.31	5279	土師瓦
ST7	B 3-4	IV a層上面	d	B	b	b	SK35		0.93	0.67	0.78	0.31	0.34	5307	土師瓦
ST8	B 4	IV a層上面	d	I	a	a			0.63	0.38	0.54	0.26	0.05	5243	火葬墓
ST9	B 4	IV a層上面	d	B	b	b		SK49	1.19	0.82	0.99	0.60	0.31	5249	火葬墓設・火葬墓
ST10	B 4	IV a層上面	d	VI	a	a			0.72	0.52	0.15	0.14	0.23	5300	土師瓦
ST11	B 4	IV a層上面	d	B	b	b	ST12		1.06	0.61	0.81	0.51	0.53	5275	土師瓦
ST12	B 4	IV a層上面	d	B	b	b	SK39, SK40, SK41	ST111	1.46	0.63	1.00	0.89	0.68	5273	土師瓦
ST13	B 4	IV a層上面	d	B	b	b		ST14, ST15, ST16	1.31	1.07	1.15	0.83	0.83	5256	土師瓦
ST14	B 4	IV a層上面	d	B	b	b	ST13	SK46	1.18	1.04	1.14	0.95	0.72	5259	土師瓦
ST15	B 4-5	IV a層上面	b	B	b	b	ST13, ST17	ST16	1.40		0.83	(0.71)	1.17	5258	土師瓦
ST16	B 4	IV a層上面	d	B	b	b	ST13, ST18		(0.29)	(0.20)	(0.26)	(0.15)	0.66	5302	土師瓦
ST17	B 4-5	IV a層上面	d	B	b	b		ST15	1.68	0.65	0.65	(0.56)	0.87	5247	土師瓦
ST18	B 4-5	IV a層上面	c	B	b	b			(1.11)	(1.01)	(0.85)	(0.78)	0.82	5266	土師瓦
ST19	B 5	IV a層上面	b	B	a	a			(1.10)	(0.89)	(0.84)	(0.61)	0.65	5290	土師瓦
ST20	B 5	IV a層上面	b	B	b	b			1.29	0.93	0.81	0.66	0.40	5277	土師瓦

第10表 遺構観察表2 (SD)

遺構番号	グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	直面	< (切られる)	> (切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	田柵場番号	出土遺物・時期
SD1	B - 7-8	IV a層上面	c	I	-		SK83 ~ 86, SK98 ~ 100, SK105, SK111, SK116		(0.25)	1.14	(4.83)	0.43	0.26	5329	江戸後期以前
SD2	B 12	IV a層上面	a	IV	-		SK39, SK61, SK110, SK118,							櫻鉢(梵盆)出土	
SD3	A 17	IV a層上面	d	IV	-										江戸初期以前
SD4	A-B 19	IV a層上面	a	I	-										5096
SD5	A-B 19	IV a層上面	d	I	-		SD4								5091
SD6	A 19-20	IV a層上面	a	I	-										5002
SD7	A 20	IV a層上面	d	III	-		SD6								5012

第11表 遺構観察表3 (SE)

遺構番号	グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	直面	< (切られる)	> (切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	田柵場番号	出土遺物・時期
SE1	B 3	IV a層上面	b	II	b	a		ST4, ST5	L.61	0.83	0.74	0.59	1.03	5229	

第12表 遺構観察表4 (SA)

遺構番号	グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	直面	< (切られる)	> (切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	田柵場番号	出土遺物・時期
SA1-1	A-B 15	IV a層上面	a	B	a	c			(0.20)	(0.20)	(0.26)	(0.14)	0.10	5167	
SA1-2	B 15	IV a層上面	c	B	a	a			0.35	0.23	0.24	0.13	0.16	5172	
SA1-3	B 15	IV a層上面	c	B	a	c			0.38	0.29	0.06	0.05	0.18	5173	
SA1-4	B 16	IV a層上面	c	I	a	a			0.28	0.20	0.16	0.13	0.12	5140	

第13表 遺構観察表5 (SK①)

遺構番号	グリッド	検出面	堆積状況	断面形状	平面形状	直面	< (切られる)	> (切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	田柵場番号	出土遺物・時期
SK1	B 2	IV a層上面	a	I	a	a			0.18	0.08	0.11	(0.04)	0.04	5204	
SK2	B 2	IV a層上面	a	II	a	a	SK4	SK3	(1.26)	(0.32)	(1.25)	(0.28)	0.03	5195	
SK3	B 2	IV a層上面	a	I	a	a		SK2, SK4	0.22	0.22	(0.17)	(0.15)	0.05	5194	
SK4	B 2	IV a層上面	a	I	c	c	SK2	SK3	(1.30)	(0.78)	(1.20)	(0.73)	0.09	5192	
SK5	B 2	IV a層上面	d	I	a	a			0.41	(0.34)	0.17	0.14	0.18	5205	
SK6	B 3	IV a層上面	a	VI	a	a			0.21	0.16	0.10	0.04	0.07	5206	
SK7	B 2	IV a層上面	d	VI	b	b	SK9		0.70	0.46	0.32	0.15	0.04	5203	土師器皿出土
SK8	B 2	IV a層上面	c	II	a	a			0.30	0.26	0.18	0.13	0.11	5197	土師器皿出土
SK9	B 2	IV a層上面	a	I	a	a	SK10	SK7	0.28	0.23	0.16	0.07	0.05	5199	
SK10	B 2	IV a層上面	a	I	a	a		SK9, SK11	0.28	0.20	0.19	0.14	0.04	5198	
SK11	B 2	IV a層上面	a	I	a	a	SK10, SK13	SK12	0.82	0.43	0.43	0.31	0.04	5201	
SK12	B 2	IV a層上面	a	I	a	a	SK11		0.31	(0.20)	0.30	0.26	0.04	5202	
SK13	B 2	IV a層上面	a	I	a	a		ST2	0.45	(0.41)	(0.20)	0.36	0.04	5200	江戸時代(16C)以前
SK14	B 3	IV a層上面	d	I	a	a			0.22	0.20	0.21	0.17	0.11	5227	
SK15	B 3	IV a層上面	d	I	a	a			0.49	0.32	0.38	0.15	0.12	5226	
SK16	B 3	IV a層上面	d	IV	a	a			0.79	(0.33)	(0.30)	0.12	0.39	5479	

第14表 遺構観察表6 (SK②)

遺構番号	グリッド	発掘面	地質	断面	表面	形状	底面	<(切られる)	>(切る)	上端長軸	上端短軸	下端長軸	下端短軸	深さ	出土地・時期
SK17	B 3	S228 下面	a	I	c	c	SK18			0.78	(0.29)	0.32	(0.14)	0.06	5238
SK18	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a		SK17		0.41	(0.19)	0.37	(0.14)	0.07	5228
SK19	B 3	IV-a層上面	a	VI	a	a	SS 1		0.42	0.37	0.19	0.13	0.18	5235	
SK20	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a			0.71	0.60	0.38	0.25	0.17	5226	
SK21	B 3	IV-a層上面	a	VI	b	b	SK22		0.91	(0.24)	0.20	(0.11)	0.19	5207	
SK22	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a	SK21		0.31	0.26	0.20	0.17	0.07	5208	
SK23	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a			0.39	0.37	0.21	0.16	0.07	5210	
SK24	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a			0.38	0.32	0.19	0.15	0.08	5209	
SK25	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a	SK26	ST3	0.64	0.36	0.55	0.30	0.06	5218 室町時代(16C)以前	
SK26	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a	SK25		0.28	0.24	0.17	0.14	0.03	5220	
SK27	B 3	IV-a層上面	c	III	a	a			0.43	0.33	0.19	0.16	0.18	5217	
SK28	B 3	IV-a層上面	b	II	a	a			0.42	0.30	0.33	0.13	0.09	5216	
SK29	B 3	IV-a層上面	b	VI	c	c			0.34	0.18	0.18	0.08	0.09	5211	
SK30	B 3	IV-a層上面	d	I	a	a			0.44	0.43	0.22	0.18	0.18	5212	
SK31	B 3	IV-a層上面	b	I	a	a			0.27	0.19	0.11	0.07	0.12	5213	
SK32	B 3	IV-a層上面	b	I	c	c	SK33		0.37	0.26	0.17	0.11	0.11	5214 土師器片出土	
SK33	B 3	IV-a層上面	b	I	a	a	SK32		0.39	0.31	0.21	0.14	0.09	5215	
SK34	B 3	IV-a層上面	b	I	a	a	ST5		0.32	0.29	0.12	0.07	0.14	5229	
SK35	B 3	IV-a層上面	b	I	a	a	ST7		0.56	0.33	0.37	0.18	0.20	5244 江戸時代(16C)	
SK36	B 3	IV-a層上面	a	I	a	a	ST6		0.39	(0.27)	0.15	0.12	0.12	5308 被熱成のある繩	
SK37	B 4	IV-a層上面	a	II	a	a			0.48	(0.34)	0.39	0.33	0.04	5277	
SK38	B 4	IV-a層上面	c	I	a	a	ST12, SK41		0.33	0.28	0.20	0.20	0.14	5268	
SK39	B 4	IV-a層上面	a	I	c	c	SK40		0.02	0.39	0.45	0.24	0.04	5271	
SK40	B 4	IV-a層上面	a	I	a	a	ST12, SK39		0.87	0.54	0.40	0.33	0.12	5266 江戸時代(16C)以降	
SK41	B 4	IV-a層上面	b	I	a	a	SK38	ST12	0.75	0.48	0.38	0.29	0.10	5269 黒鉛「天宝元寶」1枚出土 江戸時代(17C)以降	
SK42	B 4	IV-a層上面	a	I	b	b	SK43		0.55	(0.15)	0.37	0.10	0.13	5301 土師器片出土	
SK43	B 4	IV-a層上面	d	II	c	c	SK42		0.92	(0.57)	0.75	(0.26)	0.24	5265 天日系陶「吉原戸後期	
SK44	B 4	IV-a層上面	c	I	a	a			0.45	0.30	0.26	0.19	0.16	5264	
SK45	B 4	IV-a層上面	a	I	a	a			0.45	0.42	0.33	0.25	0.11	5263	
SK46	B 4	IV-a層上面	a	II	b	b	ST14		0.85	(0.20)	(0.78)	(0.12)	0.13	5262 江戸時代(17C)以前	
SK47	B 4	IV-a層上面	c	I	a	a			0.28	0.26	0.16	0.14	0.10	5247	
SK48	B 4	IV-a層上面	a	VII	a	a			0.64	(0.33)	0.27	(0.08)	0.08	5245	
SK49	B 4	IV-a層上面	d	II	b	b	ST9		0.94	(0.34)	0.47	(0.27)	0.24	5253 田町時代(16C)以降	
SK50	B 5	IV-a層上面	a	I	a	a	SK51		0.35	0.34	(0.21)	0.17	0.14	5477	
SK51	B 5	IV-a層上面	c	I	a	a	SK50		0.49	0.43	0.27	0.22	0.36	5269	
SK52	B 5	IV-a層上面	c	I	a	a			0.25	0.25	0.19	0.15	0.09	5292	
SK53	B 6-6	IV-a層上面	b	II	b	b			0.81	0.56	0.68	0.36	0.19	5310 石器の削片	
SK54	B 6	IV-a層上面	c	IV	c	c			0.67	0.54	0.32	0.25	0.27	5314 山茶碗「大開東一輪之鳥」出土 田町時代(18世紀後半～末)	
SK55	B 6	IV-a層上面	a	I	a	a			0.42	(0.23)	0.23	(0.10)	0.12	5321	
SK56	B 7	IV-a層上面	b	I	c	c	SD1, SK57, SK58		0.69	0.27	(0.22)	0.15	0.16	5370	
SK57	B 7	IV-a層上面	c	I	c	c	SD1	SK56, SK58	0.84	(0.37)	0.51	(0.29)	0.25	5371	
SK58	B 7	IV-a層上面	b	I	a	a	SD1, SK57	SK56	0.63	0.53	0.33	0.30	0.17	5343 鉄片出土	
SK59	B 7	IV-a層上面	b	I	a	a	SK64	SD1, SK60, SK61	1.01	0.82	0.45	0.42	0.35	5342 土師器片出土 江戸時代(19C)以前	
SK60	B 7	IV-a層上面	a	I	c	c	SD1, SK59, SK62		0.39	(0.25)	0.18	(0.10)	0.13	5366 江戸時代(19C)以降	
SK61	B 7	IV-a層上面	d	I	a	a	SK59, SK62		0.66	0.34	0.52	0.19	0.13	5322 土師器片出土 江戸時代(19C)以前	
SK62	B 7	IV-a層上面	b	I	c	c	SD1, SK52, SK61	SK60	0.65	(0.34)	(0.19)	0.15	0.15	5365 江戸時代(19C)以前	
SK63	B 7	IV-a層上面	d	I	c	c	SD1		1.08	0.55	0.81	0.36	0.14	5367 江戸時代(19C)以前	
SK64	B 7	IV-a層上面	c	I	a	a	SD1		0.65	0.60	0.45	0.36	0.21	5369 江戸時代(19C)以前	
SK65	B 8	IV-a層上面	a	I	a	a			0.61	(0.21)	0.42	(0.16)	0.16	5336	
SK66	B 8	IV-a層上面	d	III	a	a			0.49	0.34	0.19	0.13	0.13	5324	
SK67	B 9	IV-a層上面	c	I	a	a			0.38	0.26	0.10	0.09	0.09	5356	
SK68	B 9	IV-a層上面	c	I	a	a			0.33	0.39	0.25	0.24	0.09	5351	
SK69	B 9	IV-a層上面	d	I	a	a			0.34	0.23	0.19	0.12	0.10	5362	
SK70	B 9	IV-a層上面	a	I	a	a			0.44	0.39	0.21	0.18	0.10	5353	
SK71	B 9	IV-a層上面	c	I	a	a			0.45	0.38	0.30	0.09	0.09	5355	
SK72	B 9	IV-a層上面	c	I	a	a			0.21	0.16	0.09	0.07	0.18	5484	
SK73	B 9	IV-a層上面	c	I	c	c	SK75		0.50	(0.32)	0.26	(0.19)	0.13	5346	
SK74	B 9	IV-a層上面	d	I	a	a	SK75		0.28	0.26	0.17	0.14	0.08	5428	
SK75	B 9	IV-a層上面	c	I	c	c	SK73	SK76, SK77,	1.03	0.64	0.94	0.50	0.14	5347	

第15表 遺構観察表7 (SK③)

遺構 番号	グリッド	検出面	遺構・物至 次段・形状		平面 形状	前面 (切られる)	< (切り)		上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸	端部 端部	日進境 番号	出土物・時期
			次段	形状			<	>							
SK76	B - 9	IV a 壁上面	c	I	a	SK75			0.20	0.16	0.12	0.11	0.11	5426	
SK77	B - 9	IV a 壁上面	d	I	a	SK76			0.34	0.22	0.12	0.11	0.12	5427	
SK78	B - 9	IV a 壁上面	d	I	a				0.34	0.20	0.09	0.07	0.14	5369	
SK79	B - 9	IV a 壁上面	e	VII	a				0.21	0.29	0.11	0.09	0.08	5453	
SK80	B - 9	IV a 壁上面	e	I	c	SK82			0.51	(0.44)	(0.90)	0.29	0.12	5367	
SK81	B - 9	IV a 壁上面	d	I	a	SK82, SK83			0.38	0.25	(0.34)	0.15	0.09	5425	
SK82	B - 9	IV a 壁上面	e	I	c	SK83			0.56	0.41	0.33	0.14	0.19	5360	
SK83	B - 9	IV a 壁上面	e	I	a				0.64	0.38	0.22	0.19	0.18	5358	
SK84	B - 9	IV a 壁上面	e	I	a	SK83			0.39	0.35	0.21	0.17	0.08	5359	
SK85	B - 9	IV a 壁上面	e	I	a				0.72	0.60	0.24	0.27	0.24	5362	
SK86	B - 9	IV a 壁上面	d	IV	c				1.55	(0.132)	0.79	(0.09)	0.28	5369	
SK87	B - 9	IV a 壁上面	a	I	a	SK88			0.55	0.39	0.49	0.30	0.09	5367	
SK88	B - 9	IV a 壁上面	a	I	c	SK87			0.41	(0.30)	(0.39)	0.26	0.09	5368	
SK89	B - 9	IV a 壁上面	d	IV	c	SK80			0.60	0.81	(0.29)	0.27	0.27	5364	
SK90	B - 9~10	IV a 壁上面	e	IV	c	SK91, SK92			1.28	0.65	(1.15)	0.28	0.24	5363	
SK91	B - 10	IV a 壁上面	e	IV	c	SK90			0.60	(0.44)	0.41	(0.26)	0.16	5391	
SK92	B - 10	IV a 壁上面	e	IV	a	SK90, SK91			0.22	0.16	0.25	0.14	0.06	5390	
SK93	B - 10	IV a 壁上面	d	I	a				0.34	0.28	0.23	0.17	0.04	5424	
SK94	B - 10	IV a 壁上面	a	I	a				0.36	0.23	0.29	0.15	0.08	5375	
SK95	B - 10	IV a 壁上面	e	I	a				0.39	0.37	0.26	0.21	0.06	5374	
SK96	B - 10	IV a 壁上面	e	I	a				0.23	0.21	0.14	0.12	0.06	5372	
SK97	B - 10	IV a 壁上面	d	I	a				0.40	0.28	0.17	0.10	0.19	5373	
SK98	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.30	(0.19)	0.12	(0.09)	0.16	5383	
SK99	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.26	0.22	(0.21)	0.19	0.06	5398	
SK100	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.34	0.28	0.23	0.17	0.04	5424	
SK101	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.60	0.42	0.30	0.23	0.19	5409	
SK102	B - 11	IV a 壁上面	d	I	a				0.59	(0.16)	0.32	(0.09)	0.25	5413	
SK103	B - 11	IV a 壁上面	d	IV	a	SK102			0.69	(0.20)	(0.52)	0.19	0.19	5414	
SK104	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.21	0.22	0.26	0.24	0.05	5418	
SK105	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.63	0.24	0.46	0.12	0.04	5412	
SK106	B - 11	IV a 壁上面	a	I	a				0.50	0.29	0.30	0.20	0.09	5415	
SK107	B - 11~12	IV a 壁上面	a	IV	c				0.77	0.67	(0.77)	0.12	0.05	5420	
SK108	B - 12	IV a 壁上面	a	IV	a	SK107			0.86	0.70	0.74	0.59	0.06	5475	江戸時代(16C)以前
SK109	B - 11~12	IV a 壁上面	d	I	c				0.62	0.55	0.43	0.40	0.29	5422	
SK110	B - 12	IV a 壁上面	d	I	c	SD 2			0.25	(0.15)	(0.20)	(0.12)	0.10	5426	江戸時代(16C)以前
SK111	B - 12	IV a 壁上面	a	IV	c	SD 2			0.47	0.24	0.33	0.15	0.06	5426	江戸時代(16C)以前
SK112	B - 12	IV a 壁上面	d	I	a	SK113			1.00	0.92	0.89	0.72	0.22	5432	土器器部出土
SK113	B - 12	IV a 壁上面	a	I	b	SK112			0.41	0.24	(0.35)	0.16	0.06	5433	半身羽根(不規)
SK114	B - 12	IV a 壁上面	d	I	a	SK115, SK116			0.70	0.54	0.29	0.31	0.20	5439	
SK115	B - 12	IV a 壁上面	a	I	a	SK114			0.36	0.33	0.17	0.16	0.23	5448	
SK116	B - 12	IV a 壁上面	d	IV	a	SK114			0.32	0.36	0.23	0.19	0.05	5450	江戸時代(16C)以前
SK117	B - 12	IV a 壁上面	a	I	c				0.26	0.25	0.16	0.08	0.15	5447	
SK118	B - 12	IV a 壁上面	d	I	a	SD 2			0.34	0.29	0.21	0.19	0.08	5447	江戸時代(16C)以前
SK119	B - 12	IV a 壁上面	a	I	a				0.41	0.34	0.27	0.22	0.08	5448	
SK120	B - 12	IV a 壁上面	d	I	a				0.34	0.35	0.16	0.14	0.12	5445	
SK121	B - 12	IV a 壁上面	a	I	a				0.43	0.26	0.22	0.16	0.09	5444	
SK122	B - 12~13	IV a 壁上面	d	I	w				0.31	0.29	0.14	0.18	0.22	5449	
SK123	B - 12~13	IV a 壁上面	w	I	a				0.44	0.35	0.27	0.12	0.14	5450	
SK124	B - 12	IV a 壁上面	d	I	c				0.60	0.31	0.22	0.09	0.18	5446	
SK125	B - 13	IV a 壁上面	d	I	a				0.31	0.29	0.17	0.16	0.10	5433	
SK126	B - 13	IV a 壁上面	a	I	a				0.39	0.31	0.22	0.12	0.14	5452	
SK127	B - 13	IV a 壁上面	d	I	a				0.60	0.36	(0.60)	0.21	0.08	5454	
SK128	B - 13	IV a 壁上面	d	IV	b	SK129			0.92	(0.25)	(0.87)	(0.29)	0.05	5467	
SK129	B - 13	IV a 壁上面	d	IV	c	SK130			0.63	(0.37)	0.19	0.16	0.31	5466	
SK130	B - 13	IV a 壁上面	d	I	a	SK129			0.73	0.39	0.23	0.20	0.08	5465	
SK131	B - 13	IV a 壁上面	a	I	c				0.54	0.39	0.37	0.18	0.10	5455	
SK132	B - 13	IV a 壁上面	a	I	a	SK133			0.61	0.45	0.48	0.37	0.06	5467	
SK133	B - 13	IV a 壁上面	a	I	c	SK132, SK134			1.16	0.82	1.11	0.70	0.04	5469	
SK134	B - 13	IV a 壁上面	d	IV	a	SK133, SK135			0.76	0.62	0.65	0.51	0.12	5458	
SK135	B - 13	IV a 壁上面	b	I	a	SK134			0.36	0.32	0.18	0.16	0.11	5474	
SK136	B - 13	IV a 壁上面	d	IV	a				0.39	(0.21)	0.15	0.05	0.14	5460	
SK137	B - 13	IV a 壁上面	a	IV	a				0.83	0.31	(0.81)	0.21	0.08	5461	
SK138	B - 13	IV a 壁上面	a	IV	c				0.42	0.37	(0.24)	0.27	0.07	5462	
SK139	B - 13	IV a 壁上面	d	IV	a	SK142			0.31	(0.24)	0.27	(0.21)	0.08	5468	
SK140	B - 13	IV a 壁上面	c	III	c	SK141			0.89	0.79	0.66	0.51	0.15	5471	
SK141	B - 13~14	IV a 壁上面	c	III	c				0.95	0.42	0.28	0.12	0.10	5470	
SK142	B - 13~14	IV a 壁上面	b	III	c	SK139			0.46	(0.39)	0.06	0.05	0.29	5469	土器器部出土
SK143	B - 13~14	IV b 壁上面	c	III	c				0.82	0.39	0.44	0.17	0.27	5469	
SK144	B - 14	IV b 壁上面	c	I	a	SK147			0.34	0.29	0.13	0.09	0.15	5467	
SK145	B - 14	IV b 壁上面	c	I	a	SK146			0.32	0.28	0.12	0.08	0.13	5458	

第16表 遺構観察表8 (SK④)

遺構 番号	グリッド	検出面	堆積・断面 状況	半径 形状	範囲 形状	< (切られる)	> (切る)	上端 高さ	上端 距離	下端 高さ	下端 距離	深さ	掘削 番号	出土物・時期
SK146	B-14	IV b 墓上面	d	IV	a	a	SK145, SK146	0.49	0.48	0.36	0.31	0.11	5492	
SK147	B-14	IV b 墓上面	a	II	c	c	SK144, SK146	0.35	0.34	0.31	0.19	0.11	5493	
SK148	B-14	IV b 墓上面	d	I	c	c	SK145, SK149	0.89	0.57	0.59	0.23	0.11	5480	
SK149	B-14	IV b 墓上面	c	IV	a	a	SK148, SK150	0.84	0.70	0.62	0.36	0.19	5473	
SK150	D-17-14	IV b 墓上面	c	IV	c	c	SK148, SK150	0.73	0.689	0.61	0.49	0.10	5490	
SK151	B-13-14	IV b 墓上面	c	IV	a	a	SK150	0.45	0.39	0.34	0.16	0.14	5472	
SK152	B-14	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.50	0.292	0.41	0.18	0.12	5499	
SK153	B-14	IV b 墓上面	c	VI	n	n		0.50	0.31	0.19	0.18	0.13	5179	
SK154	B-14	IV b 墓上面	c	IV	c	c	SK153	0.59	0.233	0.22	0.20	0.10	5382	
SK155	B-14	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.16	0.14	0.14	0.06	0.06	5384	
SK156	S-15	IV b 墓上面	a	III	a	a	SK157	0.58	0.49	0.29	0.20	0.20	5159	
SK157	H-15	IV b 墓上面	a	II	a	a	SK156	0.44	0.40	0.17	0.04	0.18	5160	
SK158	S-15-17	IV b 墓上面	d	I	c	c		0.44	0.35	-	-	0.05	5180	
SK159	B-15	IV b 墓上面	a	IV	a	a	SK160	0.39	0.377	0.38	0.35	0.12	5178	
SK160	B-15	IV b 墓上面	b	II	c	c	SK159	0.31	0.213	0.183	0.18	0.12	5175	
SK161	B-16	IV b 墓上面	a	IV	a	a		0.46	0.36	0.23	0.24	0.04	5162	
SK162	B-15	IV b 墓上面	d	IV	a	a		0.22	0.14	0.16	0.10	0.06	5163	
SK163	B-15	IV b 墓上面	d	IV	b	b		0.34	0.29	0.27	0.25	0.19	5163	
SK164	A-B-14	IV b 墓上面	d	II	c	c	SK165	0.623	0.35	0.26	0.19	0.19	5186	
SK165	B-16	IV b 墓上面	c	I	a	a	SK164	0.49	0.27	0.28	0.16	0.10	5164	
SK166	B-14	SK167, S168 上面	a	I	a	a	SK165, SK167, SK168	0.29	0.26	0.07	0.06	0.09	5185	
SK167	B-15	IV b 墓上面	a	III	c	c	SK166	0.013	0.33	0.12	0.10	0.23	5165	
SK168	D-15	IV b 墓上面	c	IV	a	a	SK166	0.70	0.40	0.65	0.40	0.08	5166	
SK169	B-15	IV b 墓上面	c	IV	a	a		0.22	0.34	0.18	0.15	0.17	5188	
SK170	B-15	IV b 墓上面	b	IV	b	b		0.63	0.35	0.68	0.25	0.08	5171	
SK171	B-15	IV b 墓上面	d	II	a	a		0.46	0.24	0.25	0.20	0.18	5170	
SK172	B-16	IV b 墓上面	d	IV	a	a		0.26	0.27	0.21	0.21	0.14	5174	
SK173	B-16-15	IV b 墓上面	d	III	a	a		0.32	0.29	0.15	0.15	0.15	5177	
SK174	B-16	IV b 墓上面	d	IV	a	a	SK173	0.60	0.36	0.09	0.30	0.04	5178	
SK175	B-16	IV b 墓上面	d	IV	c	c	SK174	0.30	0.33	0.05	0.04	0.20	5147	
SK176	R-16	IV b 墓上面	a	III	c	c	SK175	0.39	0.11	0.19	0.06	0.16	5146	
SK177	R-16	IV b 墓上面	d	IV	c	c		0.28	0.18	0.07	0.06	0.19	5144	
SK178	B-16	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.36	0.24	0.16	0.09	0.19	5141	
SK179	B-16	IV b 墓上面	E	b	b	b		0.18	0.67	1.07	0.64	0.29	5143	古事記(編之終)出土 奈良時代(1SC)東山 井筒
SK180	A-16	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.43	0.26	0.26	0.23	0.15	5142	
SK181	B-16	IV b 墓上面	b	IV	d	b		0.57	0.52	0.57	0.49	0.13	5114	
SK182	A-19	IV b 墓上面	b	IV	c	b		0.077	0.80	0.90	0.80	0.34	5070	
SK183	A-18	IV b 墓上面	b	-	-	-		0.24	0.17	0.13	0.17	0.16	5067	
SK184	A-18	IV b 墓上面	a	IV	b	a		0.57	0.203	0.46	0.14	0.14	5057	
SK185	R-18	IV b 墓上面	a	I	b	a		0.34	0.27	0.29	0.10	0.15	5052	
SK186	R-18	IV b 墓上面	a	IV	a	a		0.21	0.21	0.14	0.14	0.06	5054	
SK187	A-B-18	IV b 墓上面	c	IV	n	c		0.47	0.14	0.10	0.09	0.07	5068	
SK188	A-18	IV b 墓上面	b	IV	w	a		0.4	0.24	0.34	0.22	0.05	5027	
SK189	A-18-19	IV b 墓上面	c	IV	a	a		0.45	0.27	0.32	0.15	0.11	5028	
SK190	A-18-19	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.25	0.15	0.09	0.09	0.08	5029	
SK191	B-19	IV b 墓上面	c	IV	a	a		0.30	0.21	0.08	0.08	0.15	5028	
SK192	A-19	IV b 墓上面	c	I	a	c		0.29	0.24	0.06	0.04	0.10	5020	
SK193	A-19	IV b 墓上面	c	IV	d	a		0.32	0.27	0.28	0.24	0.06	5023	
SK194	A-19	IV b 墓上面	c	IV	b	a		0.24	0.24	0.16	0.16	0.04	5022	
SK195	A-19	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.24	0.17	0.15	0.09	0.06	5033	
SK196	A-20	IV b 墓上面	c	IV	a	a		0.43	0.26	0.38	0.23	0.05	5017	
SK197	A-20	IV b 墓上面	c	IV	a	a		0.34	0.25	0.29	0.21	0.06	5016	
SK198	A-20	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.61	0.237	0.16	0.08	0.14	5015	
SK199	A-20	IV b 墓上面	c	I	a	a		0.52	0.49	0.36	0.29	0.19	5018	
SK200	A-20	IV b 墓上面	d	IV	a	a	SK201	0.44	0.5	0.38	0.23	0.50	5014	
SK201	A-20	IV b 墓上面	d	IV	a	a	SK200	0.20	0.36	0.20	0.25	0.10	5094	
SK202	A-20	IV b 墓上面	d	I	a	a		0.30	0.39	0.12	0.12	0.16	5013	
SK203	C-2	IV b 墓上面	d	I	-	-		0.63	0.072	0.53	0.07	0.19	5081	
SK204	B-3	IV b 墓上面	d	I	a	a	SK19	1.09	0.26	0.65	0.34	0.21	5027	土師漆片出土

第17表 遺構観察表9 (NW)

遺構 番号	グリッド	検出面	堆積・断面 状況	半径 形状	底面 形状	< (切られる)	> (切る)	上端 高さ	上端 距離	下端 高さ	下端 距離	深さ	掘削 番号	出土遺物・時期
SW1	B-11	IV b 墓上面	d	IV	c	c	SK101, SK100	1.45	0.532	0.48	0.11	0.09	5411	
SW2	B-12-11	IV b 墓上面	d	IV	a	a	SK109, SK113	1.93	0.109	1.18	0.580	0.51	5434	土師漆片出土
SW3	B-14	IV b 墓上面	d	IV	c	c	SK3	1.91	0.143	0.85	0.29	0.35	5483	
SW4	A-B-19	IV b 墓上面	d	I	c	c		1.29	0.73	0.16	0.12	0.43	5020	

第18表 土器觀察表 1

規範番号	種別	器種	遺構名	層位	座地	分類・時期等	口径(cm)	径深(cm)	器高(cm)	備考	神社因縁番号
1	大室	丸皿	ST1	1	戸戸美濃	第3段階後半期	9.6	4.2	2.4	内外面回転型 [†] 壁部に輪トナ板	27 10
4	白安系陶器	碗	ST2	2	戸戸美濃	生田	(10.5)	—	—	内外面回転型 [†]	27 9
5	白安系陶器	碗	ST2	1	戸戸美濃	生田	10.3	4.9	2.3	内外面回転型 [†] 壁部に輪竹高台	27 9
6	登案	河井水注	ST4	1	戸戸美濃	江戸前期	—	—	—	全面に鉄輪	27 10
7	土師質土器	土鍋	ST4	1	不明	中・近世	—	—	—	内外面指付 [†] 内面指付 [†] 外面に保形	27 9
9	白安系陶器	碗	ST6	1	戸戸美濃	大和東～鶴之島	—	—	—	内外面回転型 [†]	27 9
10	古戸戸	便盆	ST9	4	戸戸美濃	後～江戸期	—	—	—	内外面回転型 [†]	27 9
28	登案	香炉	ST17	3	戸戸美濃	江戸後期	—	(5.1)	—	内外面回転型 [†] 全面に鉄輪	26 10
32	登案	碗	ST18	1	戸戸美濃	近世	—	—	—	—	26 10
33	白安系陶器	碗	ST18	7	戸戸美濃	明治～大正大昭	(14.5)	—	—	内外面回転型 [†]	26 9
34	登案	埋納罐	ST18	4	戸戸美濃	第3段階第8小期	—	—	—	内外面回転型 [†] 全面に鉄輪	26 9
35	古戸戸	便盆	ST18	6	戸戸美濃	後～江戸期	—	—	—	内外面回転型 [†] 壁部に波紋	26 10
37	大室	反皿	ST19	1	戸戸美濃	第3段階後半期	(12.0)	—	2.5	内外面回転型 [†] 外面回転型 [†] 内・外間に鉄輪	28 10
45	登案	杯	SD2	1	戸戸美濃	江戸前期	—	—	—	内外面回転型 [†]	29 10
47	登案	簡削骨器	SK43	2	戸戸美濃	江戸後期	(4.5)	—	(2.7)	内外面回転型 [†]	29 10
48	土師器皿	皿	SK53	1	不明	中世 15世紀以降	(12.0)	5.7	2.3	内外面回転型 [†] ロクロ焼き土師器	29 9
49	登案	漆茶碗	SK187	a	戸戸美濃	第3段階第8～9小期	—	4.2	—	直然内面回転型 [†] 刃引出窓台 内外面施釉(灰釉)	29 -
50	乳頭器	甕	包含層	II	不明	—	—	—	内外面 [†] 外面叩き底	30 -	
51	土師器	皿	埋	—	不明	中世	(11.3)	4.6	2.7	内外面回転型 [†] ロクロ焼き土師器	30 9
52	土師器	皿	埋	—	不明	中世	11.5	6.6	2.3	内外面回転型 [†] ロクロ焼き土師器	30 9
53	土師器	皿	埋	—	不明	中世	(11.3)	—	—	内外面回転型 [†] ロクロ焼き土師器	30 9
54	白安系陶器	碗	包含層	II	戸戸美濃	浅第3下	—	5.3	—	内外面回転型 [†] 肩引高台	30 9
55	白安系陶器	碗	包含層	II	戸戸美濃	丸石	—	5.4	—	内外面回転型 [†] 肩引高台	30 9
56	白安系陶器	碗	包含層	II	戸戸美濃	丸石	—	5.8	—	内外面回転型 [†] 肩引高台	30 9
57	白安系陶器	碗	包含層	II	戸戸美濃	深削	—	(5.7)	—	内外面回転型 [†] 肩引高台	30 9
58	白安系陶器	碗	包含層	I	戸戸美濃	白土原	—	(6.1)	—	内外面回転型 [†]	30 9
59	白安系陶器	碗	埋	—	戸戸美濃	輪之島	—	—	—	内外面回転型 [†]	30 9
60	白安系陶器	碗	埋	—	戸戸美濃	輪之島	—	4.5	—	内外面回転型 [†]	30 9
61	白安系陶器	碗	包含層	II	戸戸美濃	輪之島	—	5.4	—	内外面回転型 [†]	30 9
62	白安系陶器	小皿	包含層	II	戸戸美濃	生田	8.5	—	—	内外面回転型 [†]	30 -
63	白安系陶器	碗	包含層	I	戸戸美濃	生田	10.8	—	—	内外面回転型 [†]	30 -
64	白安系陶器	碗	包含層	III	戸戸美濃	生田	10.8	3.6	2.6	内外面回転型 [†]	30 9
65	白安系陶器	碗	埋	—	戸戸美濃	第5型式	(16.0)	—	—	内外面回転型 [†]	30 9
66	古戸戸	陳跡小皿	包含層	II	戸戸美濃	後～江戸期	10.8	—	—	内外面回転型 [†] 口縁部内外面施釉	30 -
67	古戸戸	直絶中皿	包含層	III	戸戸美濃	後～後齊古期	(11.8)	—	—	内外面回転型 [†]	30 -
68	古戸戸	折縁深皿	包含層	II	戸戸美濃	後～江戸期	(30.0)	—	—	内外面回転型 [†] 内外圈施釉(灰釉)	30 -
69	古戸戸	埋	埋	—	戸戸美濃	後齊古期	(13.0)	—	—	内外面回転型 [†]	30 10
70	古戸戸	平鍋	包含層	II	戸戸美濃	後齊古期	—	—	—	内外面施釉(灰釉)	30 -
71	古戸戸	海瓶	包含層	II	戸戸美濃	後齊古期	—	(16.0)	—	内外面回転型 [†] 深皿回転 [†] 口縁部内外面に灰釉	30 10
72	古戸戸	破壊形瓶子	埋	—	戸戸美濃	後齊古期	—	—	—	[11.4] 内外面回転型 [†]	30 10
73	古戸戸	盤	埋	—	戸戸美濃	後齊古期	—	—	—	内外面回転型 [†] 外面回転 [†] 口縁部内外面に灰釉	30 10
74	古戸戸	片口小瓶	埋	—	戸戸美濃	後齊古期	(4.6)	—	—	内外面回転型 [†] 波紋状	30 10
75	古戸戸	腰突法	包含層	II	戸戸美濃	後齊古期	—	—	—	内外面回転型 [†] 外面 [†] 口縁部内外面に灰釉	30 -
76	大室	天日茶碗	埋	—	戸戸美濃	第5階	—	—	—	内外面造形(輪縫)	30 -
77	大室	天日茶碗	包含層	II	戸戸美濃	第3段階後半期	—	—	—	—	30 10
78	大室	折縁皿	包含層	III	戸戸美濃	第4段階の半期	(11.4)	—	—	内外面回転型 [†]	30 10
79	登案	鉄輪皿	包含層	I	戸戸美濃	第1段階後2小期	11.8	—	—	内外面回転型 [†] 内外面施釉(灰釉) 内面鉄輪	31 -
80	登案	菊皿	埋	—	戸戸美濃	第1段階後4小期	—	—	—	内外面回転型 [†] 黄斑皿	31 -
81	登案	菊皿	包含層	II	戸戸美濃	第1段階後4小期	—	(6.0)	—	内外面回転型 [†] 逆面回転 [†]	31 10
82	登案	折縁皿	包含層	III	戸戸美濃	第2段階第6～7小期	14.6	—	—	内外面回転型 [†] 内外圈施釉	31 -
83	登案	皿	埋	—	戸戸美濃	第2段階第5～6小期	—	(6.6)	—	内外面回転型 [†] 内外面施釉(灰釉) 内面に灰釉	31 10
84	登案	埋	包含層	II	戸戸美濃	第2段階第7小期	(7.6)	—	—	内外面回転型 [†]	31 10
85	登案	鉄輪皿	埋	—	戸戸美濃	江戸前期	(12.0)	—	—	内外面回転型 [†] 全面に灰釉	31 10
86	登案	天日茶碗	埋	—	戸戸美濃	第1段階第4小期	(8.6)	(4.7)	5.7	内外面回転型 [†] 全面に波紋状(輪縫) 前り出しし高台	31 10
87	登案	小皿	埋	—	戸戸美濃	第2段階第7小期	7.1	3.5	4.1	内外面回転型 [†] 先端 [†] 口縁部切り出し高台	31 -

第19表 土器観察表2

番号	種別	器種	遺構名	層位	地質	分類・時期等	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考	博団 番号	国版 番号
88	甕窯	小瓶	瓦砾	—	美濃	第3段階第8小期	6.2	3.1	4.0	内外面凹凸付 外面凹凸付	31	-
89	甕窯	尾呂茶碗	包含層	I	美濃	第2段階第6～7小期	(13.7)	—	—	内外面凹凸付 内外面凹凸付	31	16
90	甕窯	丸瓶	白合層	II	瓶戸美濃	第2段階第5～7小期	—	—	—	内外面凹凸付 (縫隙、縫隙)	31	-
91	甕窯	小瓶	瓦砾	—	美濃	古世	8.0	(4.9)	3.8	内外面凹凸付 瓶戸付付	31	16
92	甕窯	小瓶	瓦砾	—	肥前	江戸中期	(9.6)	—	—	外表面付	31	-
93	甕窯	小瓶	包含層	I	瓶戸美濃	古世	7.9	—	—	瓶頭の内外面凹凸、内外面塗付	31	-
94	甕窯	付付瓶	白合層	II	瓶戸美濃	第3段階第11小期	—	—	—	—	31	16
95	甕窯	瓶	包含層	III	瓶戸美濃	近世	—	3.5	—	瓶頭の内外面凹凸、内外面塗付・貼付内台	31	-
96	甕窯	葛刷湯呑	包含層	II	瓶戸美濃	第3段階第9～10小期	—	—	—	内外面凹凸付、瓶頭の内外面凹凸、内外面塗付	31	-
97	甕窯	丸瓶	白合層	II	瓶戸美濃	第2段階第5～7小期	—	—	—	内外面凹凸付 (縫隙)	31	-
98	甕窯	瓶	白合層	II	瓶戸美濃	第3段階第8～11小期	10.8	—	—	内外面凹凸付	31	-
99	甕窯	丸瓶	白合層	II	美濃	江戸中期	—	—	—	内外面凹凸付 外面凹凸付	31	-
100	甕窯	瓶刷香炉	包含層	II	美濃	第2段階第7小期	(9.6)	—	—	内外面凹凸付 全面に灰釉	31	16
101	甕窯	瓶刷香炉	包含層	II	美濃	江戸後期	(8.2)	—	(2.5)	内外面凹凸付	31	16
102	甕窯	香炉	包含層	II	瓶戸美濃	近世	—	(8.4)	—	内外面凹凸付	31	16
103	甕窯	豆明皿	包含層	II	瓶戸	江戸初期	—	(3.7)	—	内外面凹凸付	31	-
104	甕窯	焼利	瓦砾	—	瓶戸美濃	第3段階第8～11小期	—	—	—	内外面凹凸付 内面灰釉	31	-
105	甕窯	拂利	包含層	III	瓶戸美濃	第10～11小期	—	—	—	内外面凹凸付 外面灰釉	31	-
106	甕窯	瓶	白合層	II	瓶戸美濃	近世	(11.4)	—	—	内外面凹凸付 全面に灰釉	31	16
107	甕窯	喜水付注	瓦砾	—	瓶戸美濃	第1段階第1～4小期	—	5.5	—	体部内外面凹凸付 内外面塗付 (縫隙)	31	-
108	甕窯	土瓶	包含層	II	瓶戸美濃	不明	—	6.3	—	内外面凹凸付 外面灰釉付	31	-
109	甕窯	片口鉢	白合層	II	美濃	第3段階第8～9小期	(21.6)	(10.9)	(13.3)	内外面凹凸付 外面凹凸付	31	16
110	陶器	馬形製品	包含層	II	不明	不明	—	—	—	内部凹凸付 馬の頭。全面に縫隙	31	16
111	陶器	火鉢	包含層	II	瓶戸美濃	近世～近代	17.8	—	—	内外面凹凸付 火鉢身付	31	-

第20表 石器観察表

番号	器種	遺構名	層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	博団 番号	国版 番号
113	石鏡	包含層	II	チャート	2.2	1.9	0.2	0.7	—	32	11
114	石鏡	包含層	II	チャート	2.4	2.2	1.1	6.8	—	32	11

第21表 木製品観察表

番号	器種	遺構名	層位	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	博団 番号	国版 番号
19	板状木製品	ST12	6	不明	(5.3)	(4.6)	0.8	9.5	軽黄を帯びた痕跡あり	27	11
22	板状木製品	ST13	8	不明	(12.0)	(9.5)	0.8	45.9	軽黄を帯びた痕跡あり	28	11
22	用途不明木製品	ST15	3	不明	(7.8)	4.2	1.9	32.9	—	28	11

第22表 金属製品観察表1

番号	器種	遺構名	層位	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	博団 番号	国版 番号
2	鍔	ST1	3	銅	2.2	2.2	0.1	1.8	元は通貫	27	11
3	鍔	ST2	4	銅	2.6	2.6	0.7	19.5	6枚継ぎ 素種不明	27	11
11	釘	ST9	1	銅	(3.7)	0.7	0.4	1.5	—	27	11
12	釘	ST9	1	銅	6.9	0.7	1.3	2.1	木質行材	27	11
13	釘	ST9	4	銅	(5.7)	0.8	0.3	2.4	木質行材	27	11
14	釘	ST9	4	銅	(8.8)	1.3	0.4	1.8	—	27	11
15	釘	ST9	4	銅	(3.9)	1.0	0.4	1.6	木質行材	27	11
16	釘	ST9	1	銅	(4.7)	1.1	0.8	2.2	—	27	11
17	釘	ST9	4	銅	(3.1)	0.6	0.5	1.6	木質行材	27	11
18	鍔	ST11	6	銅	2.6	2.9	0.5	11.3	4枚継ぎ 文字不明	27	11
20	鍔	ST12	0	銅	3.9	2.4	0.4	3.7	圓に穴質 空水通貫 (古見水)	27	11
21	鍔	ST12	0	銅	3.2	3.8	0.6	16.2	6枚継ぎ 斧に木質	27	11
23	懷鏡	ST13	2	銅	(4.7)	1.1	1.2	6.7	複数、形状の細縫が付着	28	11
24	懷鏡	ST13	2	銅	(8.2)	1.2	1.2	3.2	複数	28	11
25	鍔	ST13	8	銅	2.6	2.6	0.5	16.2	6枚継ぎ 空水通貫 (古見水)	28	11
26	鍔	ST13	8	銅	2.3	2.3	0.1	1.7	空水通貫 (古見水)	28	11
29	用途不明金具	ST17	3	銅	(3.4)	2.0	2.0	0.6	L字型	28	11
30	金具	ST17	3	銅	4.5	0.6	1.2	7.9	側面に木質付着	28	11
31	金具	ST17	3	銅	4.9	2.5	1.0	4.2	側面に木質付着	28	11
36	釘	ST18	4	銅	(2.6)	0.6	0.3	1.6	—	28	11

第23表 金屬製品觀察表 2

品名	器種	遺物名	層位	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	測定 品番	測定 品番
39	鐵質	ST19	2	圓	7.1	1.2	1.2	7.3	匁口	29	11
39	圓周不明金屬製品	ST19	2	鉢	2.9	2.2	0.4	1.9	凸面	29	11
40	大打金	ST19	3	鉢	8.8	2.2	0.4	14.9		28	11
41	鐵質	ST19	3	圓	2.7	2.5	0.8	20.8	7粒附着 水更泡實(六面水)(新規水)	28	11
42	鐵質	ST19	3	圓	2.4	2.5	0.4	2.1	半通透實	29	11
43	鐵質	ST19	3	圓	2.4	2.4	0.4	2.5	半通透實	29	11
44	鐵質	ST20	5	圓	2.2	2.5	0.7	17.0	6粒附着, 大圓泡實, 薄短泡實	29	11
46	鐵質	SK41	1	圓	2.3	2.3	0.4	2.7	大型云霞	29	11
112	鉛玉	留念	■	鉢	1.2	1.2	1.2	8.6		32	11

第24表 遺構内出土人骨一覧表 1

品目	取扱番号	取扱番号	枝番	層番	規範遺物番号	重量(g)	判明した部位
ST2	5476	835	4	81		0.9	
ST2	5476	834	1	8	82	1	1.0
ST2	5476	834	2	8	82	2	2.2
ST2	5476	836	2	8	83	1	3.4 内耳孔
ST2	5476	836	1	8	83	2	9.8 齧歛18点
ST2	5476	836	3	8	83	3	2.0
小計						19.3	
ST3	S282	513	1	6	84	-1	24.1 上腕骨
ST3	S282	513	2	6	84	-2	4.5
ST3	S282	513	3	6	84	-3	1.3
ST3	S282	515	2	6	85	-1	1.4 尺骨
ST3	S282	515	1	6	85	-2	5.5
ST3	S282	514	3	6	86	-1	7.5 橋骨
ST3	S282	514	1	6	86	-2	3.8
ST3	S282	514	2	6	86	-3	1.1
ST3	S282	514	4	6	86	-4	2.0
ST3	S282	516	1	6	87	-1	1.4
ST3	S282	516	2	6	87	-2	3.7
ST3	S282	517	1	6	88	-1	3.2
ST3	S282	517	2	6	88	-2	6.0
ST3	S282	518	6	89		8.3	
ST3	S282	519	1	6	B10	-1	1.3
ST3	S282	519	2	6	B10	-2	15.9
ST3	S282	519	3	6	B10	-3	2.5
ST3	S282	520	6	811		6.6	
ST3	S219	386	1	6	B12	-1	3.6
ST3	S219	386	2	6	B12	-2	12.2
ST3	S219	387	6	813		5.5	
ST3	S219	391	1	6	B14	-1	1.8
ST3	S219	391	2	6	B14	-2	1.6
ST3	S219	388	6	815		15.4	
ST3	S219	390	1	6	B16	-1	2.4
ST3	S219	390	2	6	B16	-2	5.1
ST3	S219	389	6	817		3.8	
ST3	S219	385	5	6	B18	-1	28.3 頸骨片
ST3	S219	385	3	6	B18	-2	1.9 内耳孔
ST3	S219	385	6	6	B18	-3	2.0 頸骨片
ST3	S219	385	2	6	B18	-4	0.3 齧歛2点
ST3	S219	385	1	6	B18	-5	4.0 左下顎骨
小計						165.6	
ST7	S287	756	3	5	B31	-1	4.6 内耳孔
ST7	S287	756	8	5	B31	-2	0.6 下顎骨

第25表 構内出土人骨一覧表2

埋藏遺構番号	旧遺構番号	墓上番号	検査番号	部位	埋藏遺物番号	重量(g)	判明した部位
ST2	5397	756	2 5	B31	- 3	3.5	
ST2	5397	756	1 5	B31	- 4	6.5	
ST2	5397	756	4 5	B31	- 5	2.9	
ST2	5397	756	5 5	B31	- 6	1.2	
ST2	5397	756	6 5	B31	- 7	1.1	
ST2	5397	756	7 5	B31	- 8	1.9	
ST2	5397	756	9 5	B31	- 9	0.8	
ST2	5397	756	19 5	B31	- 10	3.5	
ST2	5397	756	11 5	B31	- 11	1.5	
ST2	5397	755	1 5	B32	- 1	1.4	歯2点
ST2	5397	755	2 5	B32	- 2	2.2	
ST2	5397	754	1 5	B33	- 1	2.9	内耳孔
ST2	5397	754	2 5	B33	- 2	0.7	
ST2	5397	753	1 5	B34	- 1	2.6	歯4点
ST2	5397	753	5	B34	- 2	3.6	下顎骨
ST2	5397	742	2 5	B35	- 1	9.9	上腕骨
ST2	5397	742	1 5	B35	- 2	3.0	(試算3.4±1.2分母27被除)
ST2	5397	743	1 5	B36	- 1	20.9	上腕骨
ST2	5397	743	2 5	B36	- 2	2.8	
ST2	5397	743	3 5	B36	- 3	1.0	
小計					64.2		
ST9	5243	480	2 1	B37	1	1.5	長管骨
ST9	5243	480	1 1	B37	- 2	1.0	
ST9	5243	479	1 1	B38	- 1	6.3	
ST9	5243	479	2 1	B38	- 2	2.9	
ST9	5243	479	3 1	B38	- 3	4.6	
ST9	5243	478	1	B39		0.3	
ST9	5243	477	1 1	B40	- 1	2.3	(試算1.1±0.2分母27被除)
ST9	5243	477	2 1	B40	- 2	0.5	
ST9	5243	477	3 1	B40	- 3	1.0	
ST9	5243	477	4 1	B40	- 4	0.3	
ST9	5243	476	1	B41		0.4	
ST9	5243	475	1 1	B42	- 1	1.2	
ST9	5243	475	2 1	B42	- 2	0.7	
ST9	5243	475	3 1	B42	- 3	3.1	
小計					25.6		
ST9	5249	592	1 5	B43	- 1	2.5	
ST9	5249	592	2 5	B43	- 2	2.0	
ST9	5249	592	3 5	B43	- 3	1.5	
ST9	5249	592	4 5	B43	- 4	2.0	
ST9	5249	592	5 5	B43	- 5	17.2	
ST9	5249	592	6 5	B43	- 6	2.6	
ST9	5249	592	1 5	B44	- 1	3.0	
ST9	5249	592	2 5	B44	- 2	7.8	
ST9	5249	593	1 5	B45	- 1	15.4	
ST9	5249	593	2 5	B45	- 2	7.9	
ST9	5249	593	3 5	B45	- 3	8.2	
ST9	5249	593	4 5	B45	- 4	3.6	
ST9	5249	593	5 5	B45	- 5	0.8	
ST9	5249	593	6 5	B45	- 6	3.0	
小計					85.6		
ST9	5249	590	7 5	B45	- 7	19.2	
ST9	5249	590	8 5	B45	- 8	2.0	
ST9	5249	595	1 5	B46	- 1	2.5	
ST9	5249	595	2 5	B46	- 2	5.9	
ST9	5249	594	1 5	B47	- 1	18.9	鎖骨
ST9	5249	594	2 5	B47	- 2	5.1	鎖骨
ST9	5249	594	3 5	B47	- 3	2.5	
ST9	5249	594	4 5	B47	- 4	1.2	
ST9	5249	594	5 5	B47	- 5	2.9	
ST9	5249	596	2 5	B48	- 1	12.0	大脛骨
ST9	5249	596	1 5	B48	- 2	9.6	
ST9	5249	596	3 5	B48	- 3	4.5	
ST9	5249	596	4 5	B48	- 4	1.5	
ST9	5249	596	5 5	B48	- 5	2.6	
ST9	5249	596	6 5	B48	- 6	13.2	
ST9	5249	596	7 5	B49	- 7	6.7	
ST9	5249	597	1 5	B49	- 1	2.2	
ST9	5249	597	2 5	B49	- 2	2.1	
ST9	5249	597	3 5	B49	- 3	4.5	
ST9	5249	597	4 5	B50	- 1	2.9	
ST9	5249	597	2 5	B50	- 2	1.0	
ST9	5249	597	3 5	B50	- 3	7.7	
ST9	5249	597	4 5	B51	- 1	2.3	闊頭孔
ST9	5249	597	2 5	B51	- 2	0.4	
ST9	5249	591	4	B52		1.9	
ST9	5249	593	2	B53		1.6	
ST9	5249	594	2	B54		2.1	
ST9	5249	545	2	B55		1.5	
ST9	5249	546	1	B56		2.0	
ST9	5249	559	1 2	B57	- 1	0.8	
ST9	5249	600	2	B58		3.3	鎖骨3点
ST9	5249	551	4	B59		1.7	
小計					215.7		
ST10	5200	534	1 2	B60	- 1	3.7	歯7点
ST10	5200	534	2 2	B60	- 2	1.0	
ST10	5200	534	3 2	B60	- 3	0.4	
小計					5.1		
ST11	5225	581	1 6	B61	- 1	14.2	鎖骨
ST11	5225	581	2 6	B61	- 2	6.1	鎖骨後側面
ST11	5225	581	3 6	B61	- 3	3.7	内耳孔
ST11	5225	581	4 6	B61	- 4	2.3	頸突起
ST11	5225	581	5 6	B61	- 5	0.9	
ST11	5225	581	6 6	B61	- 6	4.2	
ST11	5225	565	6	B62		0.7	
ST11	5225	582	1 6	B63	- 1	4.0	
ST11	5225	582	2 6	B63	- 2	1.0	
ST11	5225	583	2 6	B64	- 1	7.9	歯9点
ST11	5225	583	1 6	B64	- 2	0.8	
ST11	5225	583	3 6	B64	- 3	0.4	
ST11	5225	585	6	B65		1.8	鎖骨

第26表 遺構内出土人骨一覧表 3

発掘遺物 番号	田邊構 造番号	出土上 番号	技 番	種 別	開 拓 遺 物 番 号	量 度 (g)	判明した 部位
ST11	S275	586	1	6	B66	1	6.5 頭骨
ST11	S275	586	2	6	B66	2	2.8
							小計
							26.9
ST12	S273	589	1	6	B67	1	6.2 頭骨
ST12	S273	589	3	6	B67	2	1.7 内耳孔
ST12	S273	589	2	6	B67	3	3.9
ST12	S273	589	4	6	B67	4	0.8
ST12	S273	589	5	6	B67	5	2.2
ST12	S273	589	1	6	B68	1	3.7
ST12	S273	589	2	6	B68	2	2.2
ST12	S273	589	3	6	B68	3	6.0
							小計
							26.6
ST13	S256	558		6	B69		1.3 頭骨骨部
ST13	S256	559	1	6	B70	1	3.4 頭顎骨
ST13	S256	559	2	6	B70	2	0.8
ST13	S256	560	1	6	B71	1	1.5 頭顎骨
ST13	S256	560	2	6	B71	2	3.2 頭顎骨
ST13	S256	560	3	6	B71	3	1.1
ST13	S256	560	1	6	B71	4	0.9
ST13	S256	561		6	B72		4.7 頭骨骨弓部
							小計
							16.8
ST18	S286	708		7	B73		2.9 元骨(上部)
ST18	S286	709		7	B74		3.1 元骨(下部)
ST18	S286	710		7	B75		1.4 元骨(下部)
ST18	S286	711		7	B76		1.0 元骨(中部)
ST18	S286	712		7	B77		1.3
							小計
							9.7
ST19	S290	655	2	2	B78	1	0.2 頭骨
ST19	S290	655	1	2	B78	2	0.6
ST19	S290	687		2	B79		6.8 頭顎骨
ST19	S290	688		2	B80		0.2
ST19	S290	689	1	2	B81	1	1.7
ST19	S290	689	2	2	B81	2	1.8
ST19	S290	727	1	2	B82	1	4.6
ST19	S290	727	2	2	B82	2	2.1
ST19	S290	727	3	2	B82	3	1.1
							小計
							19.5
ST20	S297	678	3	9	B83	1	5.6 上腕骨
ST20	S297	678	4	9	B83	2	1.8 上腕骨
ST20	S297	679	1	9	B83	3	2.1
ST20	S297	678	2	9	B83	4	8.2 上腕骨
ST20	S297	679	2	9	B84	1	7.6 ③左上腕骨
ST20	S297	679	1	9	B84	2	2.2
ST20	S297	680	1	9	B85	1	3.1 ④左上腕骨
ST20	S297	680	3	9	B85	2	4.6 肩3点
ST20	S297	680	2	9	B85	3	1.0
ST20	S297	681	5	9	B86		1.9 肩2点
ST20	S297	682	1	9	B87	1	1.3
ST20	S297	682	2	9	B87	2	2.6
ST20	S297	682	3	9	B87	3	1.2

第4章 自然科学分析

1 はじめに

当遺跡では今回の調査で土葬墓と火葬墓を20基検出し、今渡地区における墓制の変遷について副葬品や遺構の先後関係から時代の特定を進めた。上面に配石する特徴をもつ土葬墓ST2、ST6、ST7の3基について、ST4の切り合い関係から江戸時代前期以降という結果が得られたが、時代の特定する根拠に乏しい。そこで、土葬墓ST7と火葬墓ST8の出土人骨を試料として加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定し、年代決定の詳細な材料を得ることとした。分析は中村賢太郎(株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第27表のとおりである。土葬墓ST7は下層の褐色砂質シルト層内に埋葬されていた人骨のうち長骨破片を採取した。この骨片は被熱の痕跡がない生の状態であった。火葬墓ST8は黒色砂質シルト層内に炭化物と共に出土した人骨の部位不明破片を採取した。ST8の骨片は高い焼成温度で焼かれたため白色を呈していた。

第27表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24665	調査区: 13IW グリッド: B3・4 遺構: ST7(旧S307) 層位: 5 遺物 No. 742 その他: 土葬墓	種類: 生の骨(ヒト, 長骨) 状態: dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出
PLD-24666	調査区: 13IW グリッド: B4 遺構: ST8(旧S243) 層位: 1 遺物 No. 477-1 その他: 火葬墓	種類: 烧骨(ヒト, 部位不明 破片, 白色) 状態: dry	超音波洗浄 次亜塩素酸ナトリウム溶液洗浄(1.5%) 酢酸洗浄(1M) サルフィックス処理

土葬墓ST7の人骨片を、超音波洗浄し、その後コラーゲンを抽出した。コラーゲン抽出での収率は第28表に示した。抽出したコラーゲンは、炭素窒素比(C/N比)測定用と¹⁴C年代測定用に分割した。C/N比用のコラーゲンは、Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific社製)を用いて、炭素含有量と窒素含有量を測定した(第28表)。¹⁴C年代測定用のコラーゲンは燃焼させ、CO₂ガス化した。CO₂ガスを精製後、水素還元によりグラファイト化した。

第28表 コラーゲンの収率と炭素窒素比

測定番号	骨重量(mg)	コラーゲン重量(mg)	コラーゲン収率(%)	炭素含有量(%)	窒素含有量(%)	C/N
PLD-24665 (土葬墓)	2987.3	13.8	0.5	23.9	4.3	6.5

火葬墓ST8の人骨片は、白色になるまで良く焼けており、コラーゲンの抽出が望めなかつたため、骨を構成する無機質に含まれる炭酸塩を測定の対象とした。火葬墓ST8の人骨片を、超音波洗浄し

た後、Lantingほか(2001)の方法に従って、1.5%の次亜塩素酸ナトリウム溶液と1Mの酢酸で洗浄し、リン酸との反応でCO₂ガス化した。CO₂ガスを精製後、水素還元によりグラファイト化した。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3 結果

第29表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第39図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

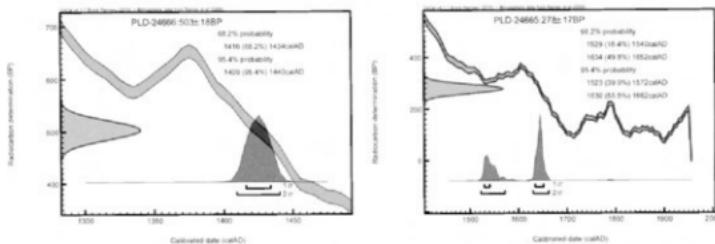
¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:IntCal09)を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

第29表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代 (yrBP ± 1 σ)	¹⁴ C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-24665 (土葬墓)	-21.43 ± 0.17	278 ± 17	280 ± 15	1529AD(18.4%) 1540AD 1634AD(49.8%) 1652AD	1523AD(39.9%) 1572AD 1630AD(55.5%) 1662AD
PLD-24666 (火葬墓)	-26.51 ± 0.16	503 ± 18	505 ± 20	1416AD(68.2%) 1434AD	1409AD(95.4%) 1440AD

4 考察

まず、土葬墓S T 7から出土した土坑墓の人骨(PLD-24665)について述べる。コラーゲンのC/N比は、コラーゲンの保存状態を評価する指標として用いられる。一般的に骨コラーゲンのC/N比は2.9~3.6の間に収まる(DeNiro, 1985)。土葬墓S T 7出土人骨から抽出したコラーゲンのC/N比は6.5であり、一般的なC/N比の範囲より高い。また、土葬墓S T 7出土人骨のコラーゲン収率0.5%は遺跡出土骨としても比較的低い。さらに、一般的に骨コラーゲンの炭素含有率は40%程度であるが、土葬墓S T 7出土人骨は23.9%と低い。以上から、土葬墓S T 7出土人骨のコラーゲンは、汚染や劣化が起きている可能性がある。コラーゲンの汚染や劣化が起きているとすると、¹⁴C年代にも影響が表れていると考えるべきである。したがって、土葬墓S T 7出土人骨の年代は、16世紀あるいは17世紀であった。



第39図 历年較正結果

測定結果で示された2つの値のうち最も確率の高い17世紀とした場合、江戸前期以降と判断したST6と年代が一致する。よって、上面に配石のある土葬墓が江戸前期前後の形態であると考えられる。また、形状が隅丸方形で深い掘り込みをする大形土葬墓が18世紀代であるため、当地域での墓の形態の変遷を伺い知ることができよう。

火葬墓ST8から出土した焼けた人骨(PLD-24666)は、2σ歴年代範囲が1409–1440 cal AD (95.4%)で、15世紀前半であった。骨の炭酸塩は生前にゆっくりではあるが一定の速度で置換するため、炭酸塩は10~20年程度の期間に体内に取り込まれた炭素を含む。したがって、焼骨の¹⁴C年代は死亡する10~20年程度前から死亡時までの期間の平均と考えられる。この分を考慮しても、火葬墓ST8出土人骨は15世紀前半と考えられる。ST3、ST9、梅瓶(骨壺)が火葬墓でその時期が15世紀中葉であることから、測定結果を検討するとST8は最も古い火葬墓の可能性がある。年代的にも差がなく、この頃の埋葬には火葬が主流であった、といえよう。

5 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337–360.
- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem Preservation and Alteration of in vivo Bone Collagen Isotope Ratios in Relation to Palaeodietary Reconstruction. *Nature*, 317, 806–809.
- Lanting, J. N., Aerts-Bijima, A. T. and van der Plicht (2001) Dating of Cremated Bones. *Radiocarbon*, 43 (2A), 249–254.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P. J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111–1150.

第5章 総括

1 地割と溝状遺構

今渡遺跡は、小字「大清水」に所在し、この周辺の今渡地区内には「町」、「後路田」、「野市場」、「大門先」、「住吉浦」、「金屋」の小字名がある。近年の開発によって景観は大きく変貌し、かつての土地利用を推察することは困難な状況である。そこで、明治時代の地籍図¹⁾（以下、「地籍図」という）を用い、過去の地割を検討することとした。資料は小字「大清水」周辺を中心に選定し、小字ごとに編集された地籍図をつなぎ合わせ、第40図に地割を表記した。また、当遺跡周辺の地形の起伏を表すために、第41図に等高線を併せて表記した。²⁾

その結果、今渡地区では、木曽川に近く中山道に近接した平坦地にある「町」「後路山」と、緩傾斜地にある「野市場」、「大清水」、「大門先」、「住吉浦」、「金屋」と、大きく2種の地割方位があることがわかった。前者は中山道の線形に依拠しつつ南北方向を基軸とした地割であり、後者は木曽川が形成した河岸段丘氶に沿って東北から南西に直線的に延びる方向性である。今渡遺跡は後者の地割の中に所在する。

今回の調査及び昭和58年度発掘調査によって発見したSD 1～7は、位置、方向ともに明治時代の地割と一致し、これらの溝状遺構は地割にかかわるものであるといえる。とりわけSD 1は地籍図の「墓地」と表記された区域の東側を画する位置にあり、当遺跡で検出した土坑墓もこの区画の西側に密集する。土坑墓平面形の長軸方向の方位は、SD 1の方位と一致させており、SD 1は墓域の東側を区画する区画溝であり、この区画と方向性に規制されて土坑墓群が長期にわたって造られたと考える。今回発見した土坑墓の始まりは15世紀であり、この地域の地割が15世紀までさかのぼる可能性を提示するものといえる。

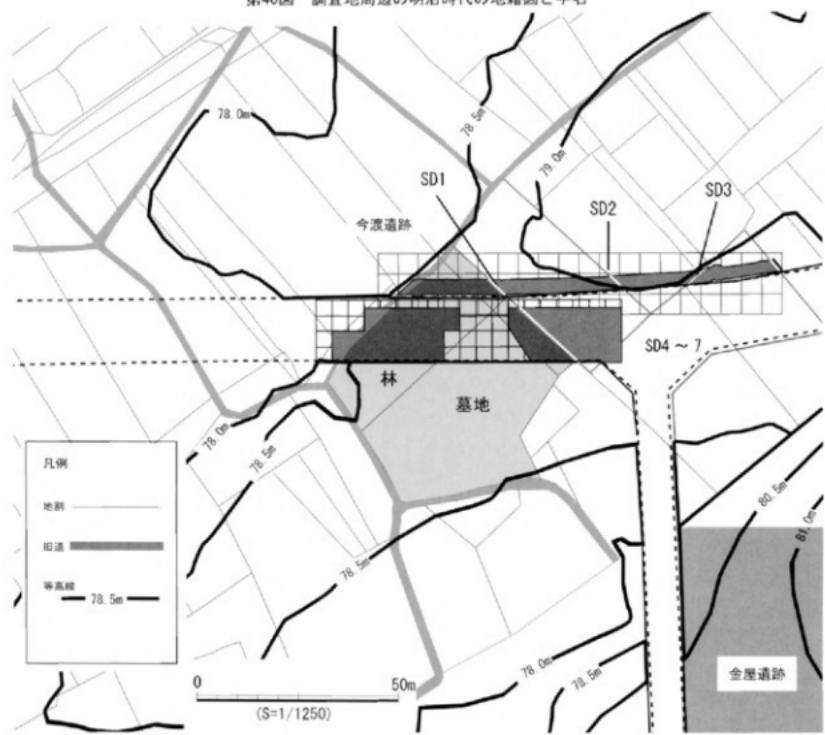
2 土坑墓の変遷

今渡遺跡で検出した土坑墓は、今回調査した20基（火葬墓5基、上葬墓15基）、昭和58年度発掘調査時の86基（火葬墓29基、土葬墓57基）を合わせて106基（火葬墓34基、土葬墓72基）となる。発掘調査範囲は、墓域と考えられる区域の北側であり、南側にはさらに土坑墓が展開することが予想できる。

ここでは、昭和58年度調査を含めてこれまでに検出した土坑墓について、当地域における構造上の変遷を検討したい。その分布状況を第42図に示した。なお、時期区分については「岐阜県の中世墓」（小野木2006）で示された第1段階から第4段階の区分を基礎とし、当遺跡では第3段階をI期（15世紀代）、第4段階をII期（16世紀から17世紀代）、さらにそれに続く18世紀以降をIII期として、土坑墓の各期の特徴を以下に記す。

I期の土坑墓

15世紀代に所属する土坑墓で、放射性炭素年代測定で15世紀初めから中葉の値を示すST 8が最も古く、15世紀後半のST 3がそれに続く。掘方は、長軸1.04m～1.28mの楕円形を呈し、今渡遺跡の土坑墓では比較的小規模である。掘削深度は検出面から0.2m程度と浅く、掘方壁面はやや緩やかな立ち上がりである。土坑墓内部や上部には集石は認められない。被焼した人骨と炭化物の出土から、いずれも火葬墓であり、掘方内部に円礫を用いて火葬の火力を上げたと考えられるST 9のような火葬施設がこの時期に伴う。また、遺構には伴っていないが、古瀬戸後IV期古段階に属する底部穿孔の



第41図 遺跡周辺の地形と明治時代の地割

ある梅瓶（71）が出土していることから、藏骨器を伴う火葬墓も存在したことが推察できる。

当遺跡では、昭和58年度発掘調査を含めてこの期と確定できる火葬墓を7基検出しており、SD1で区画された墓域の内部に、散漫に重複なく分布する。

II期の土坑墓

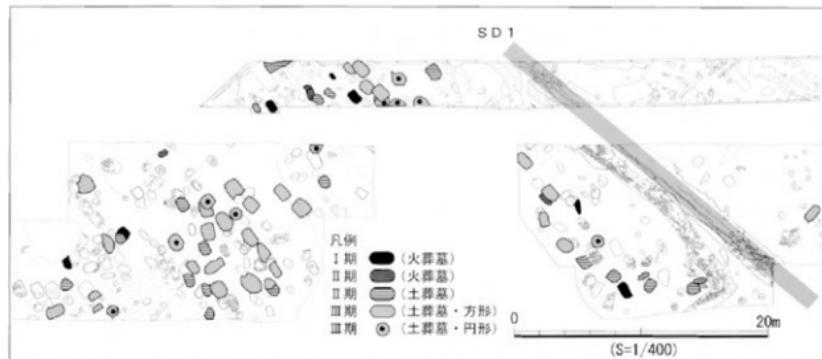
16・17世紀代の土坑墓で、当遺跡では16世紀代の事例が少なく、16世紀前半の事例は欠落する。17世紀代では、ST4を典型とする火葬墓と、ST7を典型とする小型の土葬墓及びST1を典型とするやや大型の土葬墓の3種が共存する。火葬墓は、長軸1mほどの楕円形の平面形を呈し、浅い掘方の壁面は緩やかに立ち上がり、掘方の上部や内部に集石を伴わずI期と同様の特徴をもつ。一方、小型の土葬墓は、火葬墓とほぼ同規模の楕円形の平面形を呈するが、掘方の深さが0.4m前後とやや深く、壁面はほぼ直立して土坑墓上部に入頭大の砾を複数置く。やや大型の土葬墓は長辺1.3mほどの隅丸方形で、掘方の壁面は直立てで0.5mほどの深さがある。

当遺跡では、II期の火葬墓を4基、小型の土葬墓を16基、やや大型の土葬墓を5基検出しており、火葬墓とやや大型の土葬墓が少なく、小型の土葬墓による造墓を主流としているように思われる。

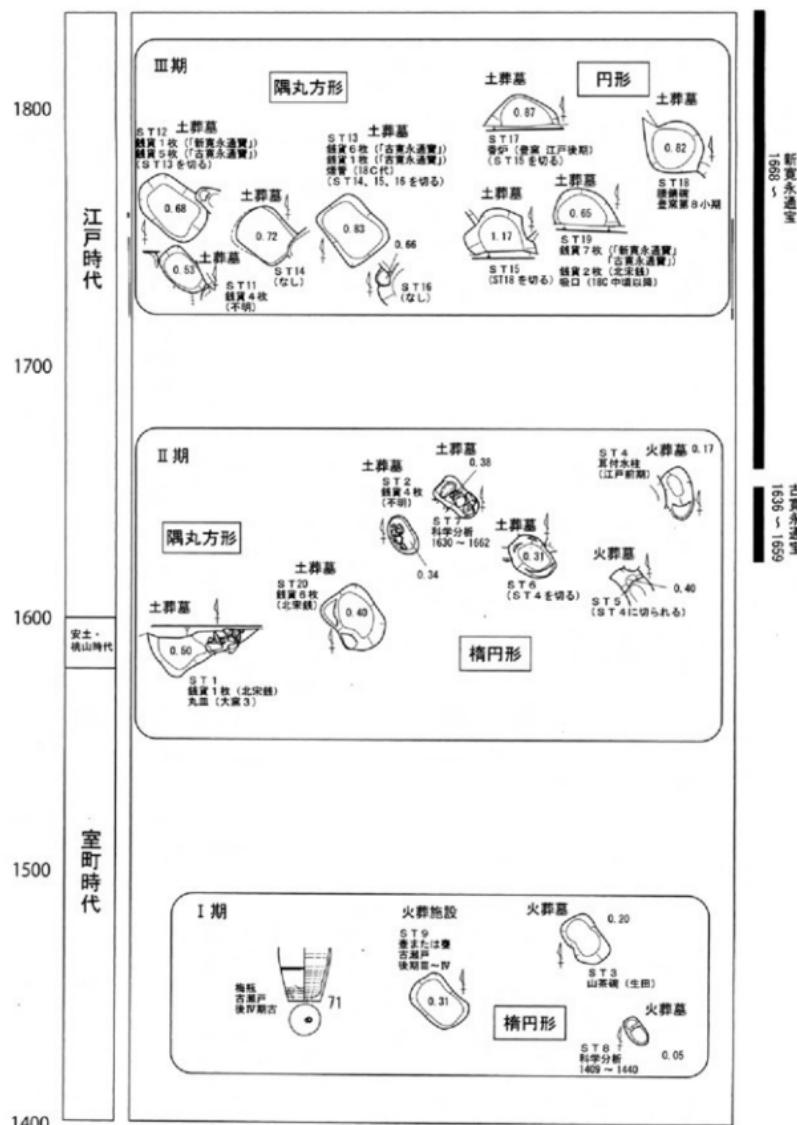
III期の土坑墓

18世紀代の土坑墓は、ST13に代表されるやや大型で隅丸方形の平面形と、ST18に代表される円形の平面形がある。共に掘方の壁面は直立し、底面はIVb層に内包する円礫を抜き取って掘り下げ、深さ0.7mを超える。掘削時に抜き取った円礫を埋め戻すためか、掘方の埋土上層には円礫を多く包含する。ST12・13では、銭貨や煙管の緑青の影響で残存したと思われる板材が土坑墓底面付近から出土しており、形状は不明であるが木棺が埋納された可能性がある。銭貨、煙管、火打金を埋葬者に削るのも、この期の特徴といえる。

当遺跡では、III期の土葬墓を39基（隅丸方形を29基、円形を10基）検出しており、この遺跡では18世紀に入って造墓が急増するようである。



第42図 火葬墓と土葬墓の分布



(注) 進度図は北を軸に統一 図面上の数字は漢き単位(m)を示す
第43図 土坑墓の変遷

3 まとめ

当遺跡の造墓活動は、15世紀にさかのぼる。この時期は平面形が橢円形の火葬墓が造られ、長軸方位は墓域の東側を画する溝（SD1）と一致し、墓域は区画の後に造墓が開始されたと考える。SD1の区画方位は、当遺跡が立地する木曽川河成段丘の段丘崖が延びる方位に左右されているようで、15世紀以降現代にいたるまで、この地での造墓はこの区画方位に合わせて展開する。

県内では14世紀後半から15世紀後半にかけて、集落が再編され火葬墓を主体とした集団墓が各所に形成される。当遺跡は、おそらく近隣の今渡地区内に形成された集落の集団墓としての役割を担うべく計画的に設置された墓域であり、I期七坑墓はその嚆矢といえる。

16世紀代になると、当遺跡の土坑墓の事例とともに大窯製品の絶対数も減少する傾向にある。これは墓域内のごく一部を調査したに過ぎないためともいえるが、造墓活動が沈滞化した可能性もある。当遺跡の南に連続する現在も利用されている墓地内には、墓石に記された近世の紀年銘がいくつ認められる。³⁾その中で「寛永元年」(1624年)が最も古く、それ以前の造墓の痕跡は現在のところ希薄である。

17世紀になって、II期土坑墓はI期の火葬墓を引き継ぎつつ土葬墓が新たに導入され、当遺跡での造墓が再度顕在化する。この背景には中山道の整備による今渡地区的活性化のほか、慶長14年(1609年)に今渡地区的中山道沿いに創建された本山臨済宗西京妙心寺末禪宗龍洞寺の存在とともに、17世紀後半の寺請制度の開始も看過できない。18世紀になってIII期土坑墓が土葬に齊一化するのも、民衆の掌握を担った寺院による一定の規制が働いた可能性がある。

一方で、当遺跡の南東約100mに所在する金屋遺跡は、中世末から近世の鉄物師集団に関連する遺跡であり、区画溝に囲まれた6棟の掘立住建物跡、15~17世紀の古瀬戸、大窯製品、中国陶磁などとともに多量の鉄滓や鉄型片が発見されている。金屋遺跡の出土遺物と比較して、当遺跡のI期・II期の遺物は庶民的である。鉄物師に直接かかわる遺物もないことから、現在のところ両遺跡の直接的な関係は認められないが、今後の周辺地の調査事例の増加による検討に期したい。

1) 岐阜地方法務局美濃加茂支所蔵

2) 可児市教育委員会 1969 『金屋遺跡』 摂圖-3 調査地域付近地形図をトレース

3) 岐阜県教育委員会 1984 『今渡遺跡発掘調査報告書』

参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別冊 窯業2 中世・近世 濑戸系』
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』
- 小野木学 2006 「岐阜県の中世墓」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム実行委員会
- 可児市教育委員会 1979 『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』 可児市埋文調査報告書11
- 可児市教育委員会 1989 『金屋遺跡』
- 可児市教育委員会 1994 『川合遺跡群』〈本文編〉「宮之脇遺跡A地点」
- 可児市教育委員会 1994 『川合古墳群』 可児市埋文調査報告書21
- 可児市教育委員会 1998 『広見 中川寺1号墳・中世墓群』 可児市埋文調査報告書28
- 可児市教育委員会 1998 『徳野遺跡(A地点)』 可児市埋文調査報告書27
- 可児市教育委員会 1999 『清水経塚』 可児市埋文調査報告書29
- 可児市教育委員会 2001 『大森新田古墳群』 可児市埋文調査報告書33
- 可児市教育委員会 2006 『可児市内遺跡発掘調査報告書』 西山古墳
- 可児市教育委員会 2008 『可児市内遺跡発掘調査報告書』 今渡金屋遺跡
- 可児市 2005 『可児市史』第1巻 通史編 考古・文化財
- 可児市 2007 『可児市史』第4巻 自然編 民俗編
- 可児町 1978 『可児町史』資料編
- 岐阜県教育委員会 1984 『今渡遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜県文化財保護センター 2000 『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2003 『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
- 多治見市 1976 『多治見市史』窯業史料編
- 谷畑美帆・鈴木隆雄 2004 『考古学のための古人骨調査マニュアル』 学生社
- 中世窯資料集成研究会 2005 『中世窯資料集成』一中部・東海編一 岐阜県
- 所三男 1989 『岐阜県の地名』 日本歴史地名体系第21巻 平凡社
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭』一出土銭の調査と分類一 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 『中世の出土銭』補遺 兵庫埋蔵銭調査会

写 真 図 版

図版1 発掘区遠景・近景



平成25年度発掘区 ①区遠景（西から）



平成25年度発掘区 ②区近景（東から）



平成25年度発掘区 ③区近景（東から）

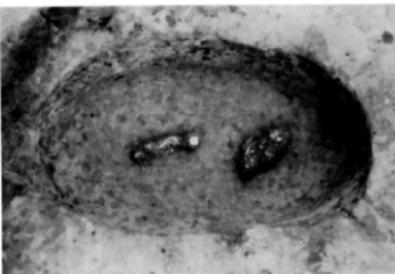


平成23年度発掘区 ④区近景（東から）

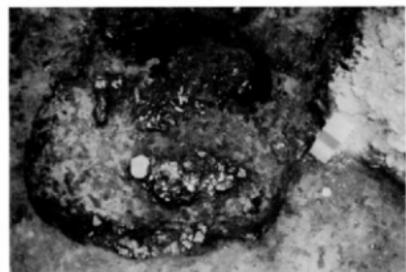
図版3 ST (1)



ST 1 完掘状況（南西から）



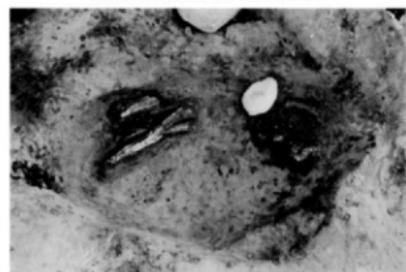
ST 2 遺物出土状況（北西から）



ST 3 遺物出土状況（北西から）



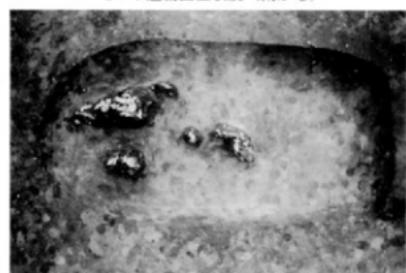
ST 3 遺物出土状況（北西から）



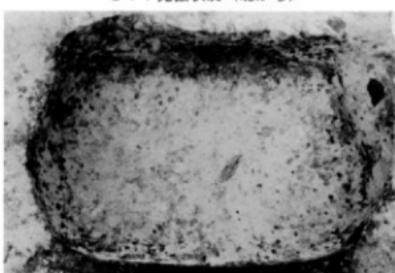
ST 6 遺物出土状況（南から）



ST 7 完掘状況（北から）



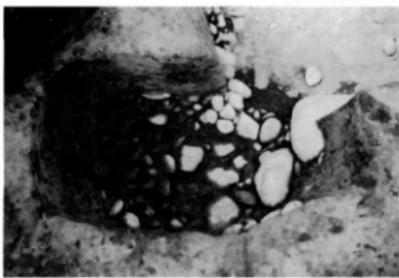
ST 8 遺物出土状況（北から）



ST 9 完掘状況（南西から）



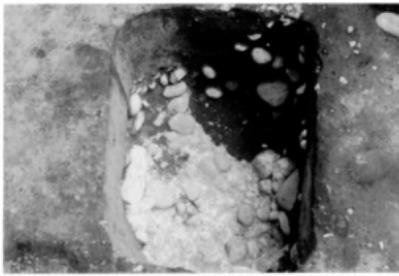
S T 9遺物出土状況（南西から）



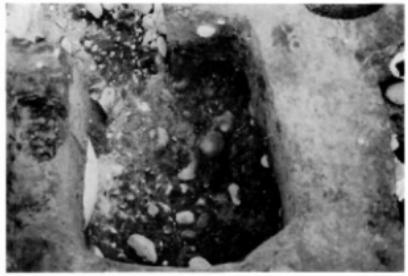
S T 11遺物出土状況（西から）



S T 12遺物出土状況（北西から）

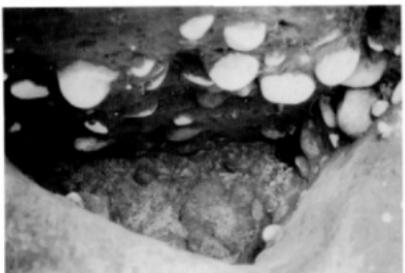


S T 13完掘状況（北西から）

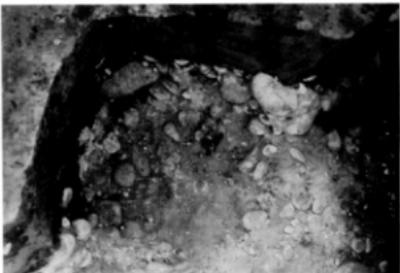


S T 14完掘状況（北西から）

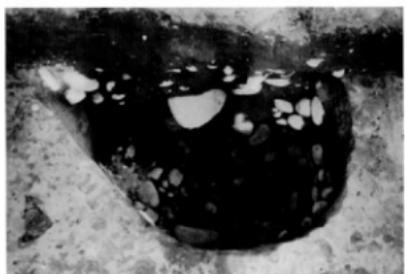
図版5 ST(3)、SD、SK



ST17遺物出土状況（北から）



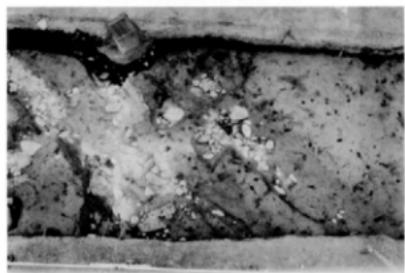
ST18遺物出土状況（東から）



ST19遺物出土状況（北から）



ST20遺物出土状況（北東から）



SD1遺物出土状況（南から）



SD3遺物出土状況（南から）



SD2、SD3、SD4、SD5遺物出土状況（北西から）



SK204遺物出土状況（南西から）



B 4 グリッド東側検出状況（北から）



B 19~20グリッド SD 4~7 東側検出状況（東から）

図版7 B3～B5グリッド 垂直写真



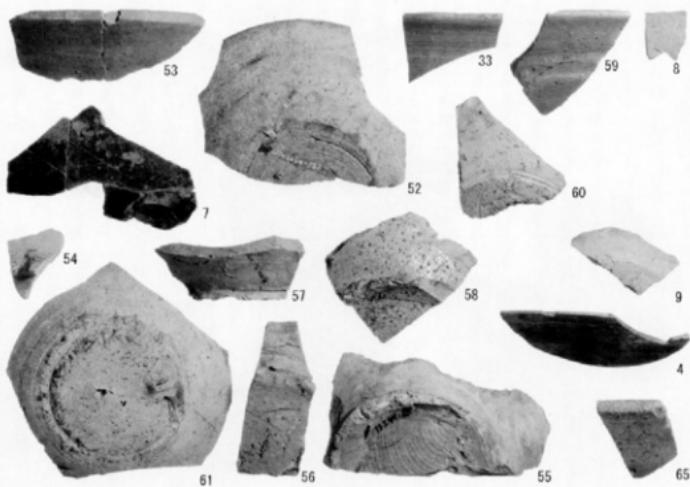
ST 1～8、SE 1完掘状況（南から）



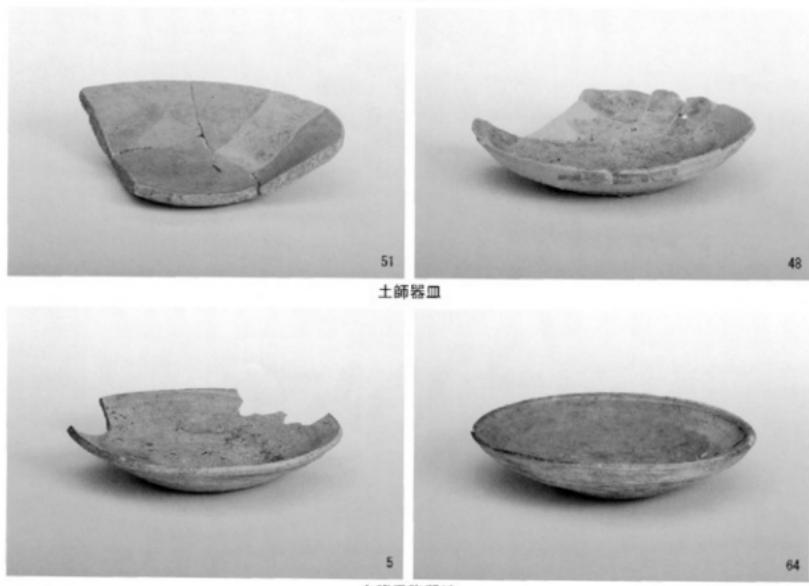
ST 9～20完掘状況（南から）



図版9 土器類（土師器・白瓷系陶器）



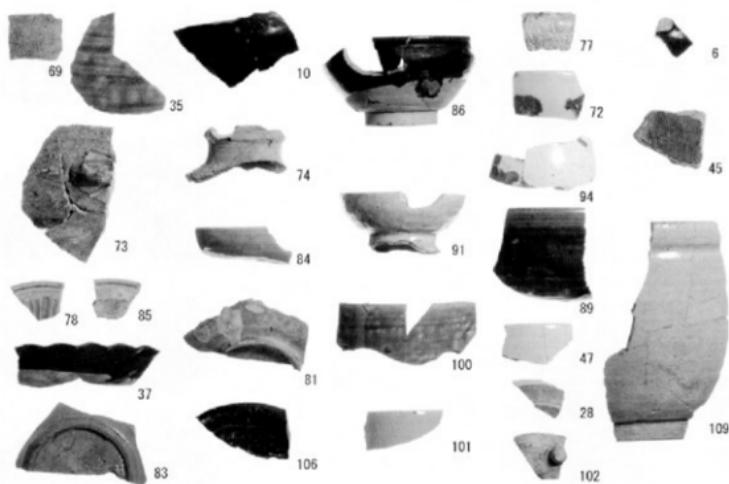
土師器・白瓷系陶器



土師器皿

白瓷系陶器碗

土器類（古瀬戸・大窯・近世陶磁器類）図版10



古瀬戸・大窯・近世陶器



72

綺腰形瓶子



71



1

丸皿



110

鳥形製品



71

梅瓶

図版11 石器・木製品・金属製品



113



114



2



3



18



19



22

27



20



21



25



26



41



42



43



44



46

木製品（板類、用途不明木製品）



11



12



13



36



29



30



31



24

23



15



16



36



38



39



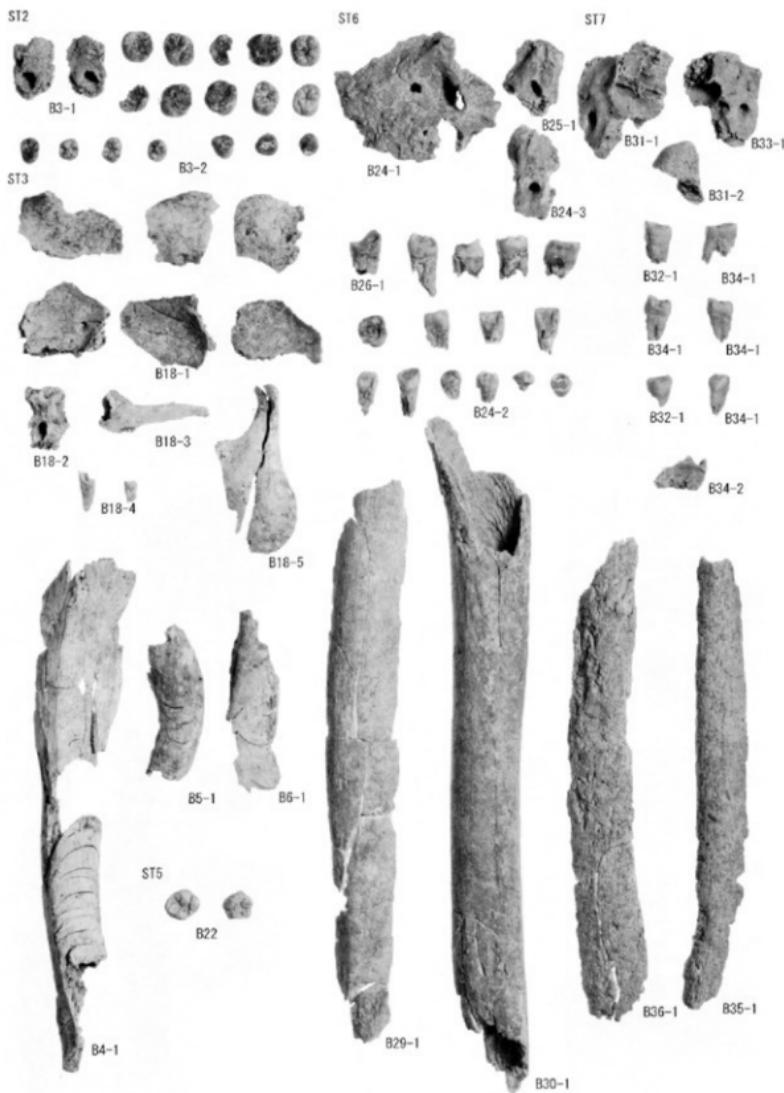
40



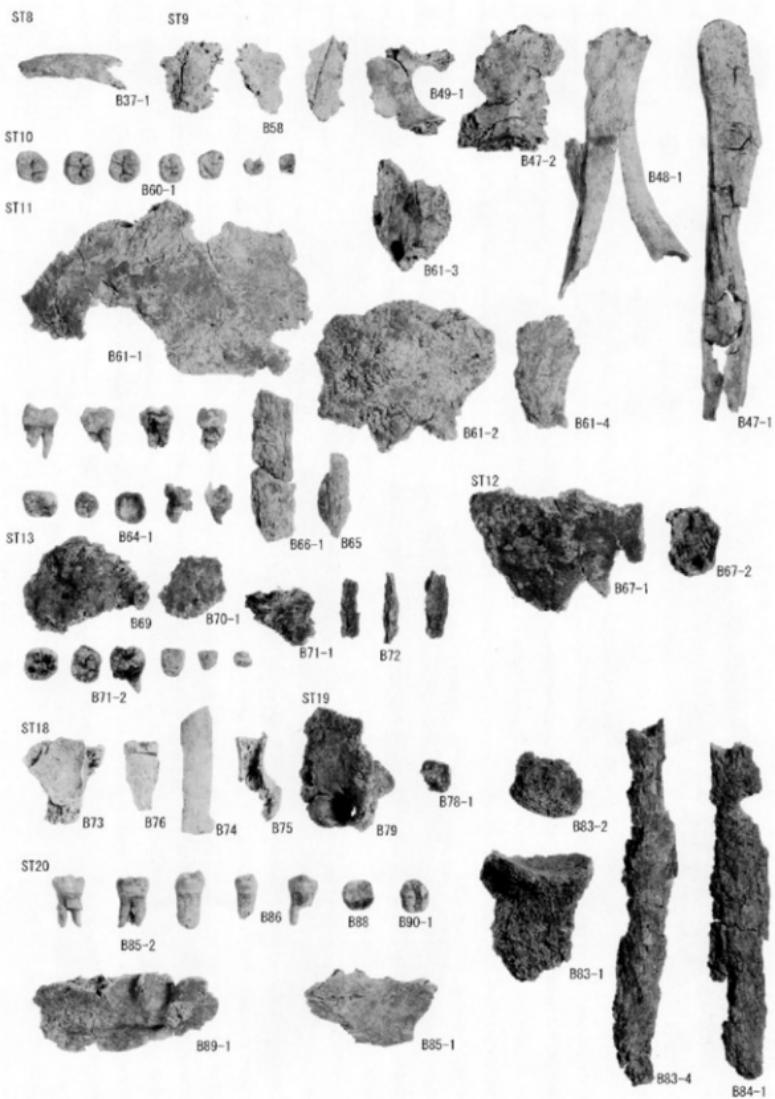
112

釘類

各種金属製品



図版13 人骨 (2)



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第130集

今渡遺跡

2014年3月3日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 新日本法規出版株式会社